

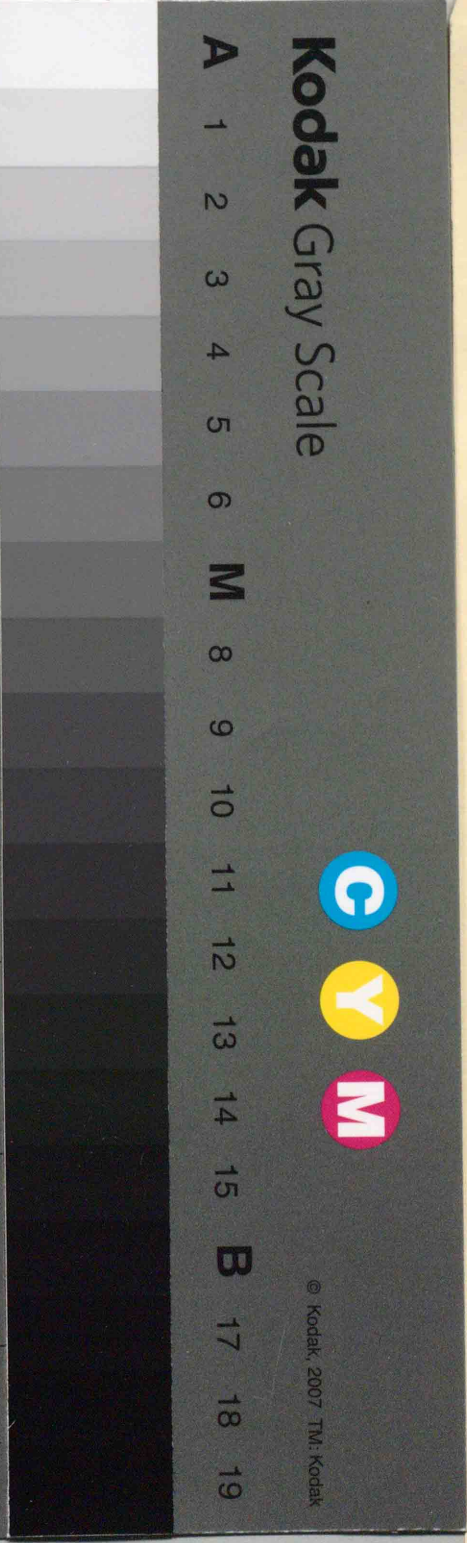
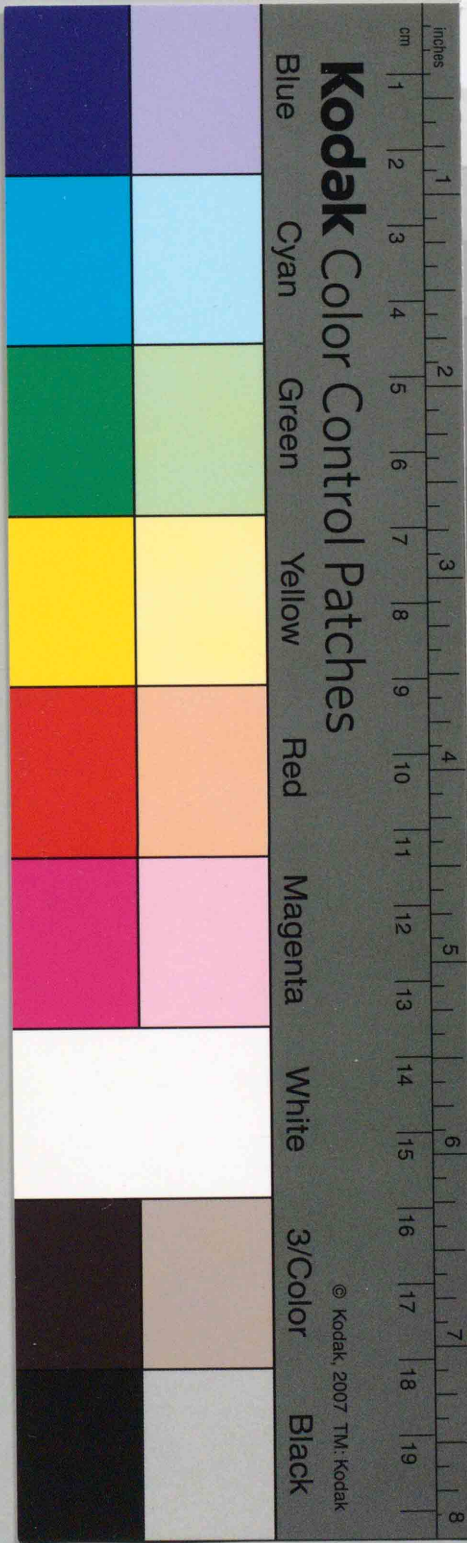
正 改  
史 洋 東 新

(用校學女等高)

著 郎 治 直 本 杉



教科書文庫  
4  
220  
42-1941  
0130449367



43230  
教科書文庫  
4  
220  
42-1941  
0130  
449367



日十月九年六十和昭  
濟定檢省部文  
用科史歷校學女等高

教科書文庫  
4  
220  
42-1941  
0130449367

# 正 改 史 洋 東 新

(用校學女等高)

授教學大科理文島廣  
著 郎 治 直 本 杉



広島大学図書  
0130449367  


序

著者は、曩に高等女學校歴史科用書として、『新東洋史』(女子用)を編纂し、中等教育、殊に女子教育に於ける外國史教授の立場から、特に我が國體の明徴を期し、我が文化の由來、我が國家の使命を明らかにし、日本女子としての自覺を促がさむことに留意し、著者自らの經驗と、實際教授者の意見とに徴し、教授者、被教授者、相互の便宜を考慮し、教育的効果を大ならしめむが爲め、幾多の點に於いて、特色を發揮するに努めたつもりであるが、こゝに昭和十二年三月二十七日、文部省訓令第十號を以て、新しく高等女學校歴史科教授要目が發布され、直ち

広島大学図書

0130449367



に同年四月の新學期より、これが實施を見るに及び、著者は、更に新要  
 目に準據して、大いに改正を加へ、以てその主旨の徹底を期し、本書を  
 編成した。これ、本書題して、『改正新東洋史』(高等女學校用)といふ所以  
 である。

昭和十二年七月

著 者 識

改正 新 東 洋 史 (高等女學校用)

目 次

卷 頭

日滿支を主としたる年代對照表  
 支那を中心とせる時代區分表

□ 東洋史の意義

①

① 上代の支那

② 上代の印度

① 總 括

②

一一二  
 三二七  
 三  
 一四  
 一七  
 一七六

目 次

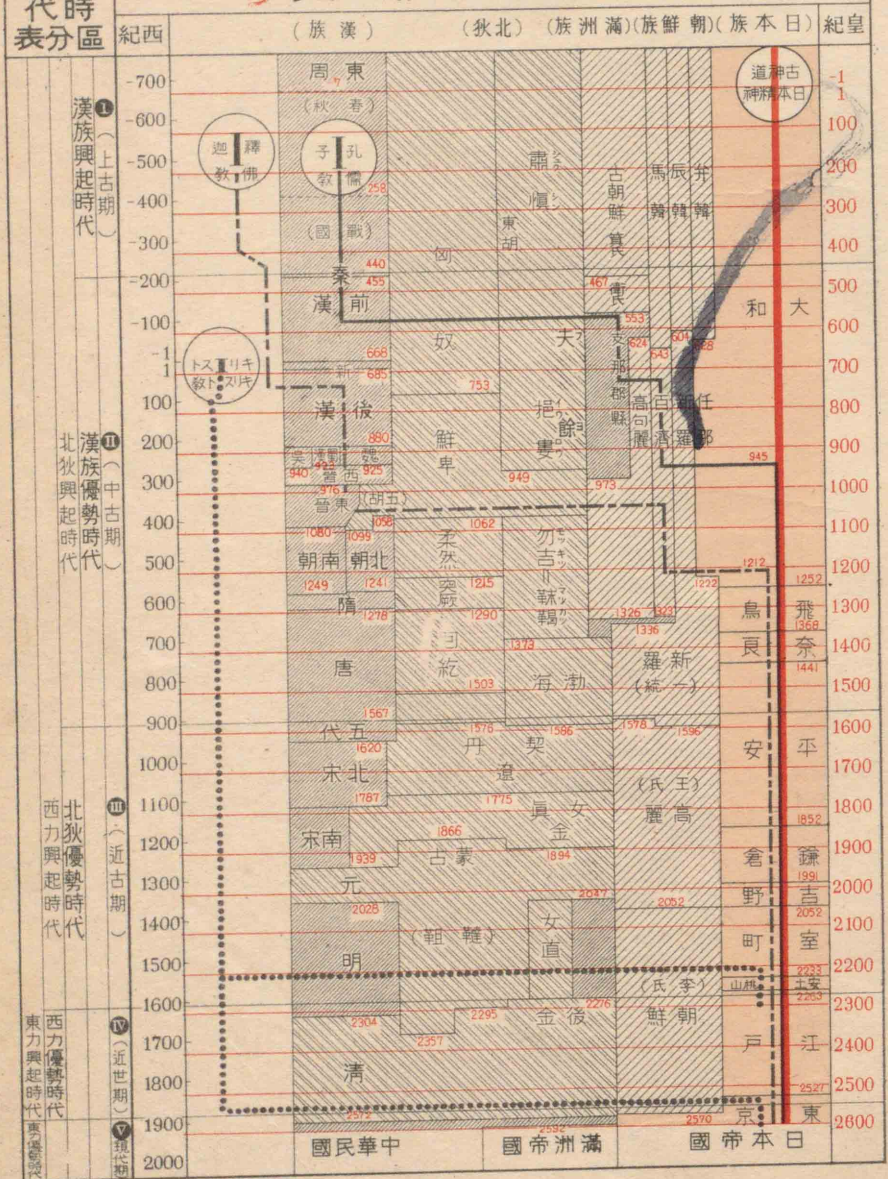
|   |                  |        |
|---|------------------|--------|
| ① | 秦・漢時代……………       | 一七     |
| ② | 三國・兩晉・南北朝時代…………… | 三四     |
| ③ | 隋・唐時代……………       | 四三     |
| ② | 總括……………          | 五七     |
| ⑤ | 五代・宋時代……………      | 五九—九三  |
| ② | 元の時代……………        | 六九     |
| ③ | 明時代……………         | 八〇     |
| ④ | 總括……………          | 九三     |
| ④ | 清時代……………         | 九三—一〇〇 |
| ② | 歐・米諸國のアジヤ經略…………… | 一〇〇    |

|    |                            |         |
|----|----------------------------|---------|
| ④  | 總括……………                    | 一〇〇     |
| ⑤  | 中華民国……………                  | 一一一—一三三 |
| ②  | 滿洲帝國……………                  | 一二一     |
| ③  | 現代の東洋……………                 | 一三五     |
| ⑤  | 總括……………                    | 一五九     |
| □  | 東洋史上より觀たる我が國の使命と國民の覺悟…………… | 一五九—一三七 |
| 卷尾 |                            |         |
| 附圖 |                            |         |

(終)

中を那支  
るせと心  
代時  
表分區

るたしと主を支満日  
表照對代年



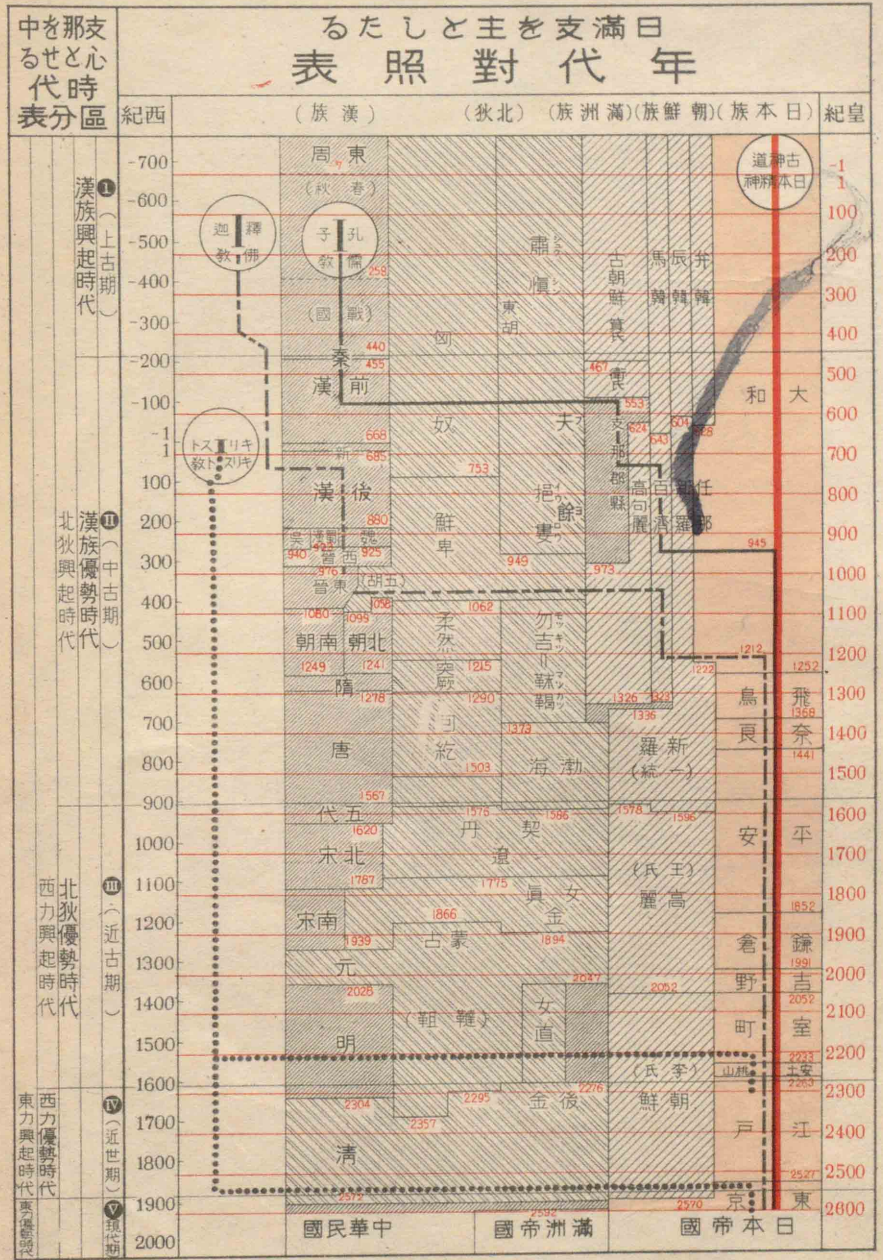
漢族興起時代  
I (上古期)

漢族優勢時代  
II (中古期)

北狄興起時代  
III (近古期)

西力興起時代  
IV (近世期)

東力興起時代  
V (現時期)



改正 新 東 洋 史 (高等女學校用)

□ 東洋史の意義

我が國の西方に横たはるアジヤ大陸は、大體に於いて、東西に連る一大山脈によつて、自然に南北に二分され、北部は、氣候が寒くて、雨量に乏しく、沙漠や草原が多くて、土地は概ね瘠せてゐるが、南部は、支那本部の如く、氣候が大體穩かで、四季の交代する處もあり、印度の如く、氣候は暑く、雨季と乾季とよりない地方もあるけれど、一般に、雨量が豊かに、土地の肥えた處が多い。

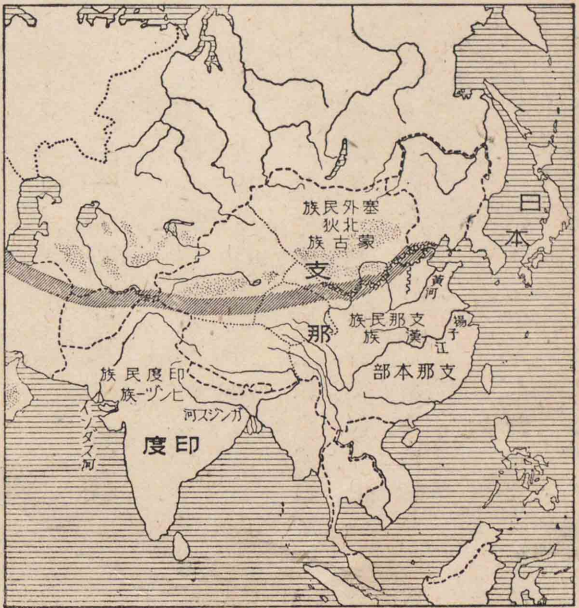
そこで民族も、北部と南部とでは、生活の状態に差を生じた。即ち北部では、狩獵牧畜を業となし、水草を逐うて移住するので、國として發達せず、

東洋史上の土地

東洋史上の民族



東洋史とその中心



(一圖地)

古來、アジャ民族が、盛衰興亡を繰返し、種々の國家を建て、獨特の文化を生じた、アジャの地方を東洋と稱し、支那を中心として、この東洋の歴史を跡づけるのが、こゝに學ばんとする東洋史である。

文化も後れてゐるが、南部では、部落に土着して、農業を営み、都會に集注して、商工業を行ひ、國家の形體を整へて、文化も進んだ。前者は、總稱して塞外民族又は北狄といひ、その主なるものに、蒙古族がある。後者の重要なものに、支那民族、即ち漢族と、印度民族、即ちヒンヅー族とがある。これらの民族を、一般に、アジャ民族といふ。

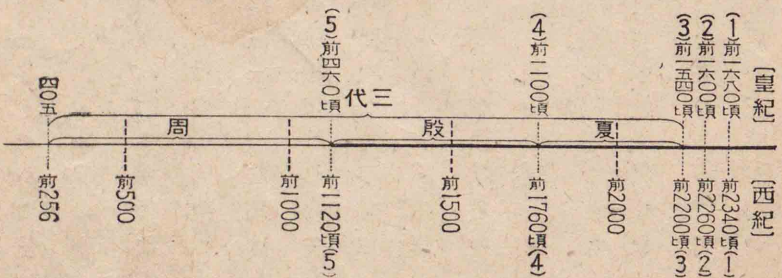
東洋史と國史との關係

國史で究める、我が國體の特色や、我が文化の由來及び特質、我が國の使命、國民たるの自覺なども、これらを外國史に照らしてみる時、一層明らかとなるであらう。さうした外國史の中で、特に國史と關係の深いのは、この東洋史であり、東洋史の中で、古くから我が國と最も交渉の多いのは、我が西隣の支那である。

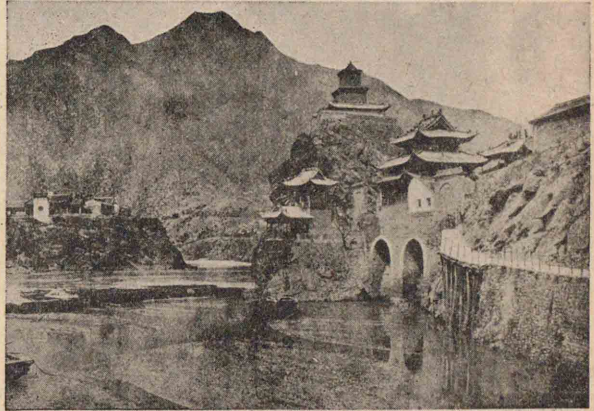
I

I 上代の支那

(一) 支那の太古  
支那は、今から數千年の昔、黄土の地方を流れてゐる、黄河の流域から開けた。それによつて、後世、建國の祖を黄帝と稱する。そこに、支那の



夏・殷・周の三



禹王廟 (一圖)

山西と陝西との界にある、黄河の水の最も急なところを、龍門といふ、人の築造する開いたの馬蹄形といふ、龍門といふ、人の築造する禹王の廟がある。圖は、即ちこれを示す。禹の廟が禹城といふこと、即ちこれを示す。禹の廟が禹城といふこと、即ちこれを示す。禹の廟が禹城といふこと、即ちこれを示す。

基礎を開いたのは、支那民族、即ち漢族である。<sup>(頁三)</sup>

傳説によると、その後、堯は、天の徳を備へて、天子となり、舜が、孝を行つて、人の徳を全うしたので、これに位をゆづり、禹は、黄河の水を治めて、地の徳を現はしたので、舜から位をゆづられた。<sup>(頁三)</sup> かく平和の間に、徳ある者に王位をゆづるのを、禪讓といふ。禹から世襲の制が始まり、夏の王朝を起したけれど、その最後の桀王は、全く徳がなかつたので、殷の湯王のため、王位から放たれ、殷の王朝も、最後には、また、暴君の紂王が出て、徳を失つたので、周の武王に伐たれ、かくて、周の王室が起つた。<sup>(頁三)</sup>

(二) 支那の國體

日・支國情の差異

た。かく、徳なきものから、戦争によつて王位を奪ふを、放伐といふ。

支那の國體は、この傳説の如く、徳あり、力あるものが、天子となるので、開國の初から、幾多の王朝が、興亡した。このやうに、王朝がかはることを、革命といふ。禪讓も、放伐も、革命たることは一である。これから以後、支那の歴史には、幾度となく、革命が繰返されるが、多くは、放伐で、表面、禪讓の如く、装ふ場合でも、内實は、毫も放伐と選ばない。かうした革命を繰返しては、そのたび毎に、國號を改め、王朝を異にし、支配者の血統を變へてゆく、支那の國柄では、直接、君に仕へる臣と、一般の民との差別が生じ、忠と孝とは、常に一致するとはいへぬ。これ我が國體の萬世一系にして、歴代の天皇が、親子の情を以て、臣民の差別なく、これに臨ませ給ふ、一君萬民にして、忠孝一本なる我が國柄と、根本的に相違してゐる點である。

周の武王が、殷を滅ぼして、天子となるや、都を鎬京に定め、一族功臣を諸侯に封じて、王室の守とした。これが、封建制度である。さうした創業の後を承けて、よく、幼王の成王を輔け、守成の功を全うした。

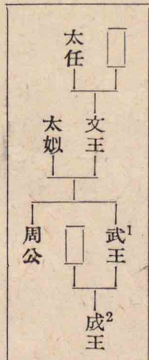
(三) 西周と東周

周公

（太任と太姒）

したのが、武王の弟、周公であつた。その徳望は、後世より仰がれ、その制度は、後代の模範となつた。

かくて周は、武王や、周公の力で興隆したが、その基礎を置いたのは、父の文王であつた。而して、これら三人の大人物を出したのも、實は、文王の母太任や、文王の妃にして、武王、周公の母なる太姒が、共に婦徳高く、子供の教育に力を盡した賜である」と傳へられてゐる。



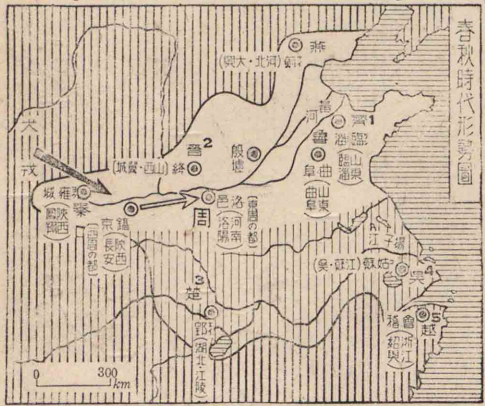
初周（一圖系）

周室の東遷

周の最盛時も過ぎて、國運が傾くや、西北方から蠻族（玁狁）が侵入して來た。そこで、周は、遂に東都の洛邑に遷つた。これを周室の東遷といひ、これより以前を西周、以後を東周と稱する。東周の時

四 春秋時代  
と戦國時代

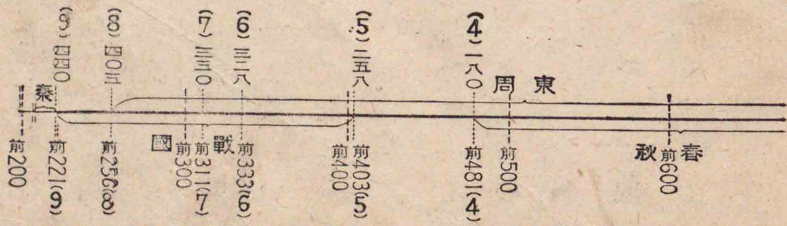
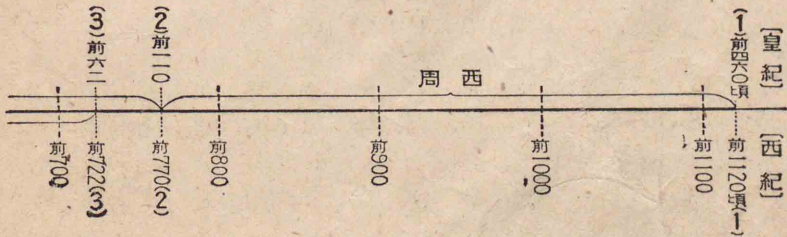
代、周室の勢は、益振はず、春秋戦國の時代となる。春秋時代は、周の東遷後、約二百五十年間を指す。この時代、周の王權は、漸く衰へ、内は、諸侯が互ひに攻めあひ、外は、蠻族が益、侵入して來た。そこで、大



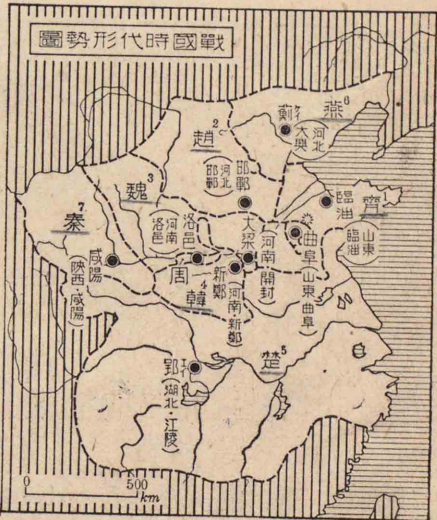
（二圖地）

数字を附したるは五霸を示す。

諸侯の中には、尊王攘夷を名として、次第に小諸侯を合せるものも出た。かくて周王の下に、天下の覇權を握つたものを、後世、春秋の五霸と呼ぶ。その後、戦國時代が、二百年ほども續く間



(五) 秦の統一



(三圖地)

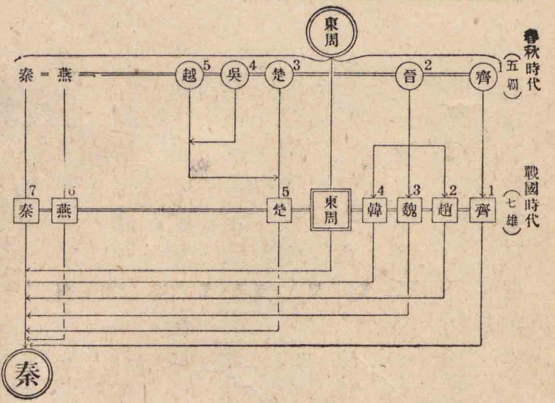
数字を附したるは七雄を示す。春秋の大勢は、晉・楚、吳・越の如く、南北の争が主であつたが、戰國の大勢は、要するに秦と六國との争であつたといへよう。

この七國の中、最も實力を備へて來たのは、秦である。そこで他の六國は、或る時は、蘇秦の合従説に従ひ、南北の國々が、同盟して秦に當つた。又、或る時は、張儀の連衡説に動かされて、東西の國々が、

に、周の王室は、威權、全く衰へて、僅かに、洛邑附近を領するに過ぎない、一小諸侯の如き有様となつた。大諸侯の中で、この時代、最も勢力のあつた七國は、いづれも王を僭稱した。世にこれを戰國の七雄といふ。かくて、尊王の風は、地を拂ひ、攘夷も、また無意味となり、たゞ實力あ

(六) 周以前の社會と文化

象形文字 (繪文字)



圖す示を一統の秦及び勢大の國戰春秋 (二圖)

殷の都の跡から出た、古い漢字の記された龜甲・獸骨や、また、可なり精巧な骨製の工藝品などは、これを想像させるよい材料である。これらの遺物から



字文の代殷 (三圖)

秦と和親し、以てその侵略を避けんとしたが、結局、秦のために、周が滅びると間もなく、統一されるに至つた。秦の統一を見るまで、周末の世は、春秋、戰國と亂れて來たが、その間にあつて、支那の文化は、大なる發展を遂げたのであつた。支那は、早くから開けたので、周以前にも、相當の文化があつた。

上代の支那

(七) 周代の社會と文化



品藝工の代古 (四圖)

見れば、當時の社會は、まだ、狩獵を主たる生業としてゐたやうに思はれる。

周代になると、益、農業を重んじ、男子は、外に出でて、農耕に従ひ、女子は、内にあつて、蠶織にとめた。春秋時代からは、次第に商業も進

み、有無を通ずる市も開かれ、交換の媒介をする貨幣も使用された。

周初、封建制度と共に、階級制度も整ひ、官制を始め、田制、税制、兵制、學制など、すべて整然と備はつたやうに傳へられる。

周初の制度  
學術の發達

然るに、春秋、戰國、五百有餘年の間に、周初の制度は、漸次に弛んで、社會の階級よりも、實力を尊ぶに至り、有爲の人物は、各國競うてこれを登用し、立身も容易であつたので、多くの學者、思想家

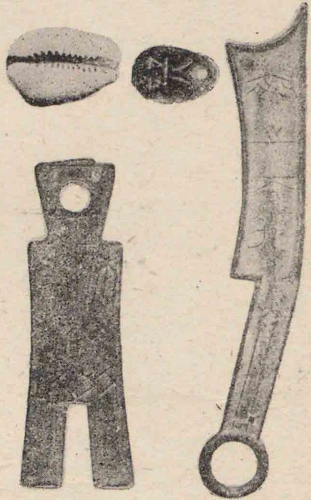
などが輩出し、それぞれ、自由に、自己の理想に従ひ、世を救ひ、民を濟はんことを説いた。周末、支那文化の大なる發展を遂



具農の代古 (五圖)

漢代の石刻に見えたるもの。

(八) 孔子



幣貨の代周 (六圖)

げたのは、かうした事情によるのである。その中でも、後世に最も偉大なる影響を與へたのは、孔子である。孔子は、春秋の末、魯の曲阜キョウフに生れ、早く父を失ひ、母の手に育てられたが、幼時より禮儀を樂しむ風

があつた。三十歳の頃、學問が成ると、更に周に赴いて、制度、禮樂の實際を研究した。そこで、周公を慕ふやうになり、周初の盛時に復するを以て、その理想とするやうになつた。初、魯に仕へたが、その説が用ゐられなかつたので、門下の高弟を率ゐて、諸國を遊説すること十餘年、屢、各地で厄難に遭うても、屈する色がなかつたが、遂に志を得ず、再び魯に歸り、その理想の實現を後世に期待して、専ら子弟の教育や、著作に従事した。歿する時、年七十四であつた。

(頁三二)

(圖七八)

(九) 儒教

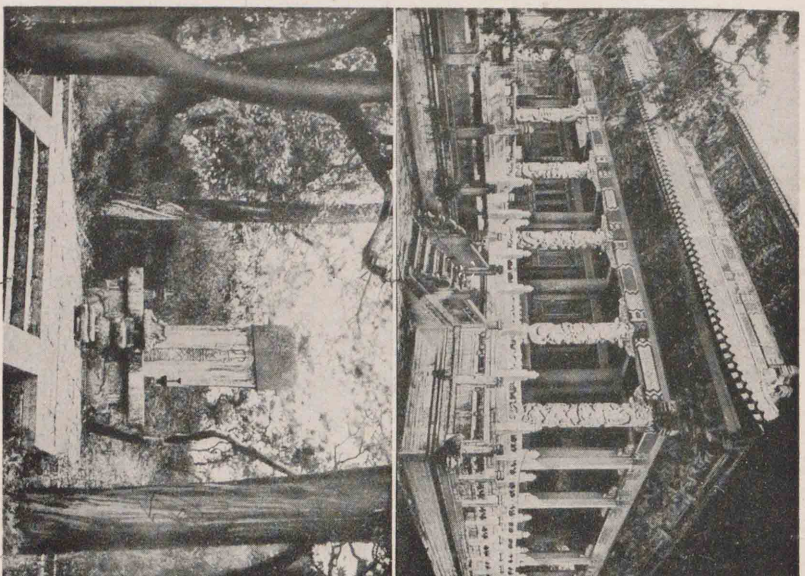
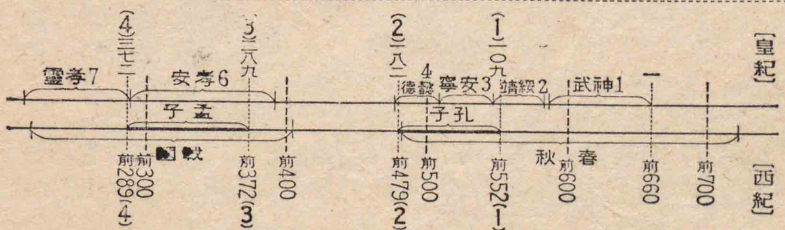
孔子の學説は、彼と、その弟子等との問答を集めた「論語」によつて知ることが出来る。その説は、一言でいふと、仁である。仁に達するためには、人情に基づいた手近な孝悌チイから始め、その道を忠恕ジュによつて、廣く、人の上にも、推し及ぼすにある。かくて、仁ニに達すれば、始めて、よく國を治め、天下を平らかにすることもできるといふのである。それ故、孔子の教は、道徳と政治との一致を説くのであつて、これが儒學、又は儒教の本旨である。

(一〇) 諸子百家

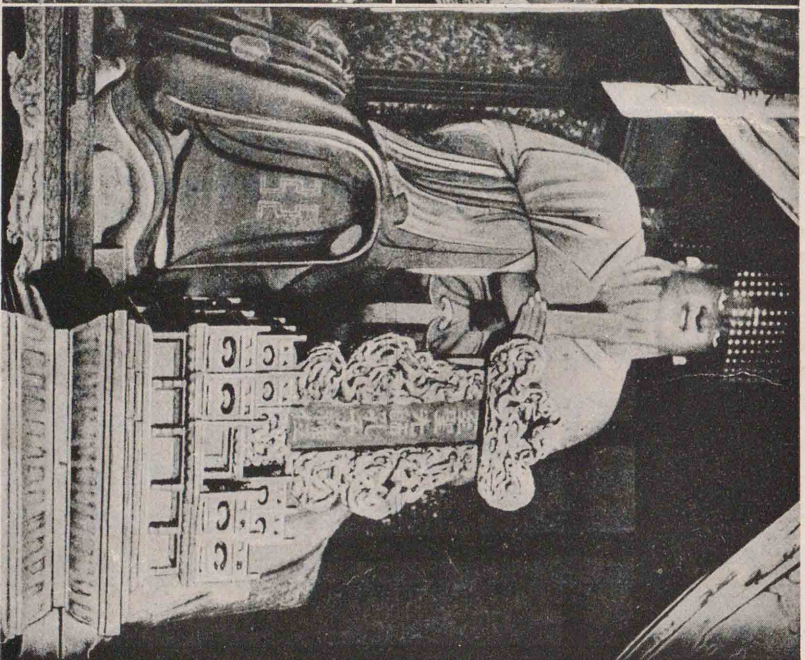
戰國の世、諸子百家が(頁一〇)出て、互ひに説を闘タカはした。その中、孔子の説を繼いで、更に仁義を重んじ、性善説を唱へたものに、孟子がある。

(孟子の母)

孟子が、有名となつたのは、母の教育の賜である。彼を、立派に教育せんため、彼の幼時、母は、三たびまでも住居を移し、彼が、怠つて學を廢せんとした時は、折から織つてゐ



墓の子孔(丸圖)[下] 殿成大廟子孔(八圖)[上]



像の子孔(七圖)

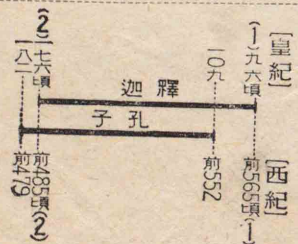
孔子の墓は、古の魯の都であつた山東省の曲阜にある。そこには孔子廟(圖九)もあり、その中には孔子の像が置かれてある。支那の都會に残つてゐる文廟は、いづれも孔子を主として祀つたものである。  
我が國でも東京湯島には、文廟にならつて孔子を祀つた聖堂が、今もその遺風を傳へてゐる。

た機たぐみの糸を斷つて、心から彼に諭した。孟母の三遷センダシ斷機キの教といふのは、これである。

孟子よりや、後れて荀子コンシが出て、性惡説を唱へて、禮儀の重んずべきことを論じた。儒教を、一に孔孟の道ともいふのは、孔子と、その後を承けた孟子との説を以て、儒教の正統と認めて來たためである。この流れを汲むものを、儒家といひ、これに對抗して、以後、永く支那人の間に勢力があつたのは、道家である。これは、戦國の初、老子の説いた無爲ムヰ自然ジゼンの道ダウの説に基づいたためである。

老子の説は、莊子に至つて發展した。そこで、これらを老莊ラウヂョウの學といふ。諸子百家の中、戦國の世に、直接、役立つたのは、法家の説である。秦が、強大となり、遂に天下を統一したのも、この説によるところ、少くない。

支那で、孔子が出て、儒教を説いてゐると、殆んど同時代に、印度では、釋迦シキヤが現はれて、佛敎を唱へた。



儒家  
道家

法家

## 2 上代の印度

### (一) 印度の古代の社會

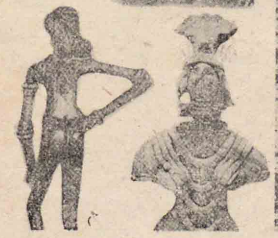
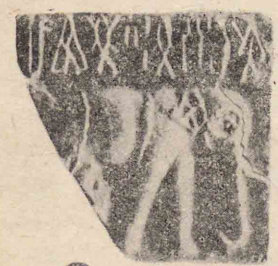
抑、佛教は、如何にして起つたであらうか。印度は、數千年の昔から、すでに開けてゐた。これは、近時發掘された、インダス河邊のモヘンジョダロの遺跡、遺物などからでも想像される。そこへ印度民族、即ちヒンヅ族の祖先なるアーリヤ人が、中央アジヤから南下して、次第にガンジス河流域を占領し、僧族士族平民、奴隸の四種姓ある、特別な社會を作り上げた。この四種姓の區別と、僧族の特權とを主張するバラモン教が、彼れ等の間に行はれて、遂に僧族の專横を來たし、他の階級を苦

### 四種姓

### バラモン教



跡遺のロダ=ヨジンヘモ (〇一圖)



物遺の右 (一一圖)

### (二) 釋迦

### (三) 佛教



釋迦の苦行の間に於て覺を開かうとしてゐる時、それを妨げようとしたむらむらの心持をば、極めて巧みに、種々の形にて現はした圖。

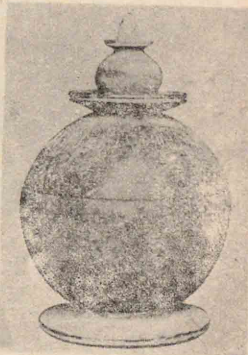
釋迦が菩提樹下に靜坐して、覺を開かうとしてゐる時、それを妨げようとしたむらむらの心持をば、極めて巧みに、種々の形にて現はした圖。

しめた。かゝる時、宗教の改革と社會の救済とを叫んで、世に現はれたのが、釋迦である。

釋迦は、中印度カピラ城の王子として生まれ、名を悉達多といふ。深く人生の無常を感じ、王宮を逃れ出て、苦行を積み、遂にブツダガヤの菩提樹下に靜坐せる時、始めて覺を開き、佛陀となり、その後、諸國を巡つて、八十歳の頃歿するまで、四十餘年間、説教した。

その教は、バラモン教に反對

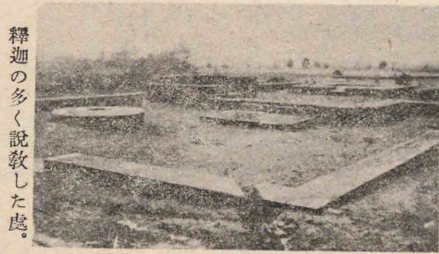




その遺骨の一部が、シヤム國を経て、名古屋の日蓮寺に迎へられた。

して、人類は、一切平等である。唱へ、何人も、私欲を斷ち、正し

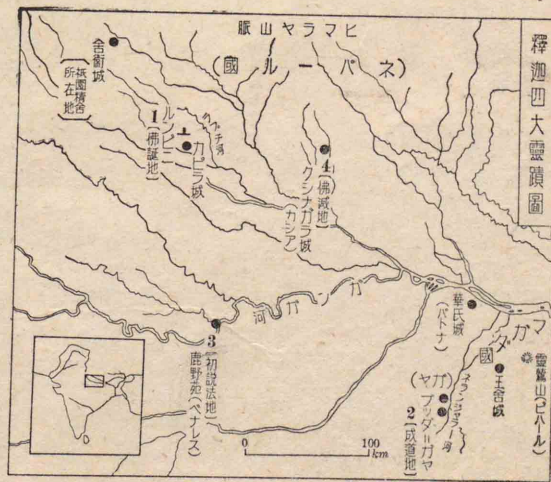
き道を行へば、皆成佛することができると説く、佛陀の教、即ち佛教である。



釋迦の多く説教した處

ヤジウヤシンラキ 祇園精舎の跡 (四一圖)

佛教は、儒教よりも廣く、且つ深く、東洋の諸國諸民族の間に影響を及ぼし、我が國民性にも感化を與へた。されば釋迦が、孔子と共に、世界の聖人と仰がれ



(四圖地)

東洋の二大文化

漢族興起時代

① 總括

るのは、當然である。佛教と儒教とは、實に東洋の二大文化である。

太古より、秦の統一に至るまでの上古期は、政治上文化上漢族興起時代である。我が日本の生れたのも、實に、この期のことであつた。我が建國から間もなく、支那に儒教が起り、印度にも佛教が現はれた。その儒教が、支那でかたまり、その佛教が、支那に入るのには、秦を経て、漢の時代のことである。

②

① 秦・漢時代

(一) 始皇帝の新政  
中央集權  
郡縣制度

周末の亂れた天下を統一して、都を咸陽に奠めた始皇帝は、封建制度の弊に鑑みて、中央集權の實を擧げんとし、全國を郡縣に分ち、

言論の壓迫

中央から派遣した官吏に治めさせた。一方天子の威嚴を示すため、特に皇帝の尊稱を定め、大いに宮殿を營み、屢々各地を巡遊した。



秦の代文字 (五一圖)

始皇帝が泰山に登つて立てた碑の断片に残れるもの。

また、民間の兵器を没收し、富豪を國都に集め、文字や度量衡の制を一定するなど、統一に力を用ゐた。

然るに、當時は、思想・言論の自由な、戦國時代の後とて、人民の中には、始皇帝の新政を非難するものも

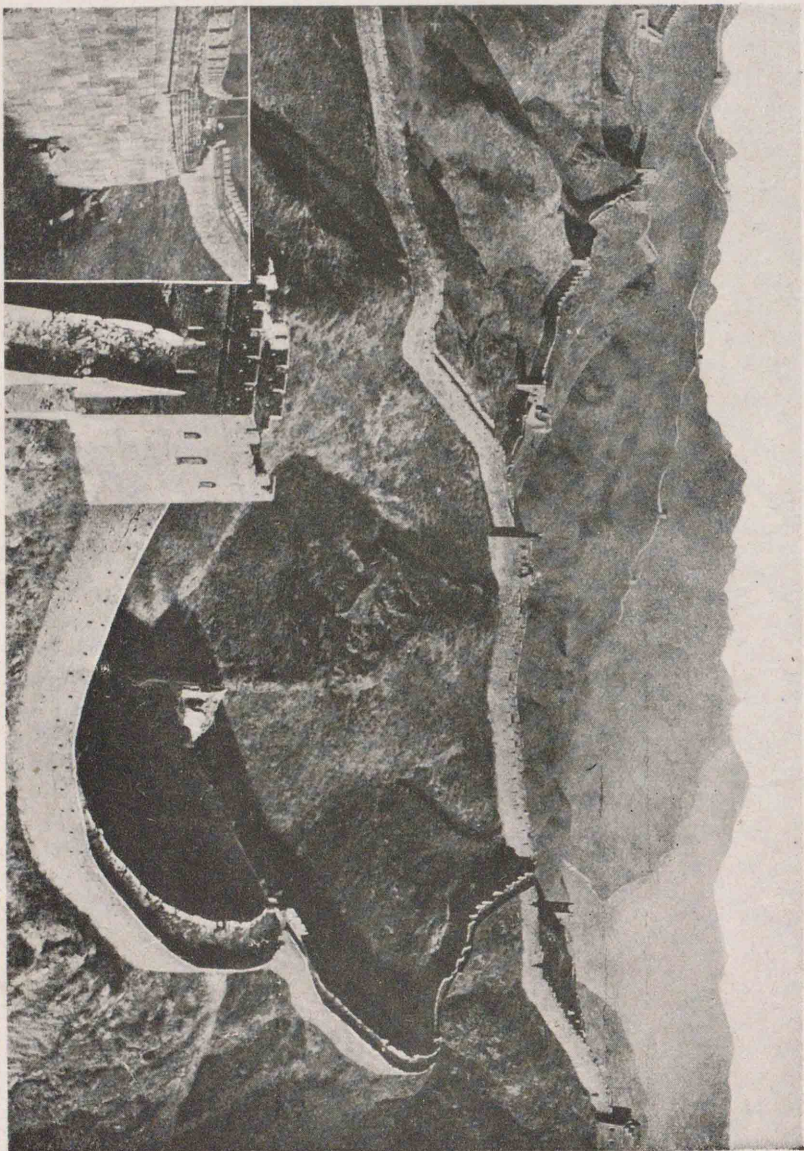


秦の代銅分 (六一圖)

(二) 始皇帝の外征

に於いても、また、その威力を輝かし、北方では、匈奴を撃ちて、萬里の長城を築き、南方では、越族を討つて、三郡を置いた。

匈奴 (頁二三・二四・二五) 蒙古族 (頁二三・二四・二五)



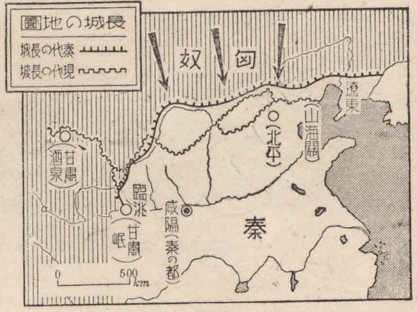
長城の圖 (七一圖)

支那の國名の起原

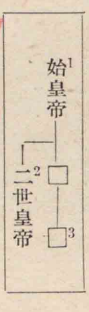
(三) 秦の滅亡

(四) 前漢の初世

高祖の創業



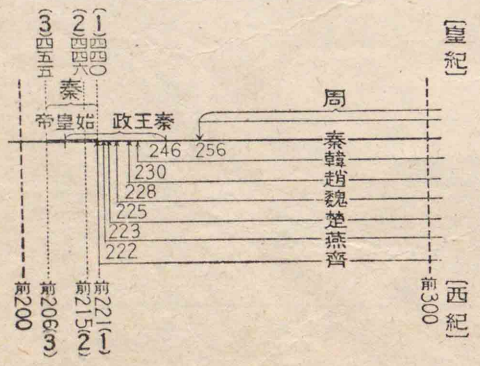
(五圖地)



(二圖系)

秦の滅亡後、彭城に都した楚の項羽は、一時勢を振ったが、程なく漢の劉邦がこれを亡ぼして、長安にて帝位に即いた。漢の高祖、これである。高祖は前代の弊に鑑み、周

かくて、漢族の發展は大いに見るべきものがあり、秦の盛名は、諸外國にまで響き渡った。支那といふ名は、實に秦から起つたと考へられる。  
かやうに、秦の國威は、内外共に頗る強盛に見えたが、人民の多くは、その壓制と負擔とに苦しんで、却つて王室を離れ、始皇帝が歿してから間もなく、僅か十五年で、秦は滅んだ。  
(系圖三)

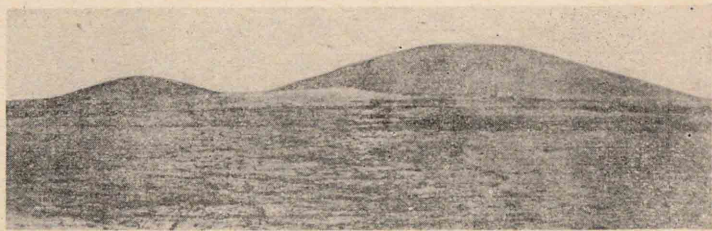


これは、北平の北方に残つてゐる明代に修築された長城である。秦代の長城は、今日残つてゐないが、北方民族を防ぐため、漢族の築いた長城が、如何に大工事であつたかは、これによつて想像することができるであらう。

吳・楚七國の亂

(五) 武帝の功業

年號の制定  
思想の統一

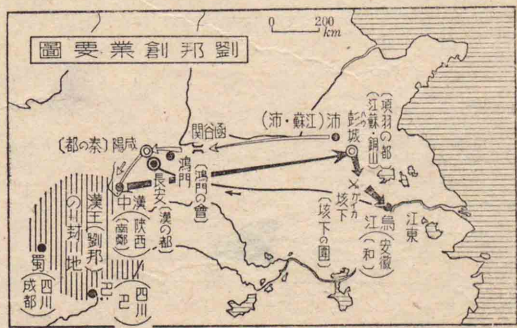


陝西省咸陽縣にある。

(陵長) 陵の祖高の漢前 (八一圖)

の封建制度と、秦の郡縣制(頁五)とを併用した。然るに、高祖の孫景帝の時、吳・楚七國の亂があつて、有力な諸王が仆れてから、封建の實はなくなり、郡縣とかはらぬものとなつた。かくて漢室の基礎、始めて固く、國力も充實した。その時、位に即いたのが武帝である。

漢の武帝は、即位の翌年、始めて年號を建てて、建元(頁三)といひ、儒教を以て、國民思想の統一(頁六)を期した。かく、武帝は、内治に意を用ゐ、更に外征に於いて、大

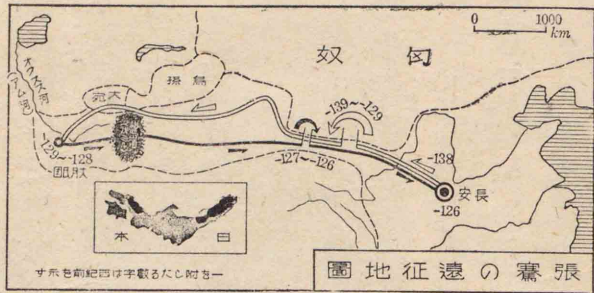


(六圖地)

匈奴の征伐  
張騫の遠征

-139- 西記

(細君)



(七圖地)

なる功業を遂げた。即ち、北方では、再び匈奴を討つて、これを漠北に逐ひ、西方には、張騫を遠征せしめて、匈奴に備へるため、大月氏國と同盟を結ばしめようとした。そこで彼は、非常な困難を嘗めたが、目的を達することができず、十三年目に歸つた。けれども、彼が再び西域に使用するや、天山の北方なる烏孫國と同盟して、これをして匈奴に當らしめることができた。これ皆夷制夷策のあらはれに外ならぬ。

漢が、烏孫と同盟した裏には、政略結婚の犠牲となつた、妙齡なる、漢の皇族の細君があつた。年老いた、遠き異國の烏孫王に嫁して、悲しい生涯を送つた彼の女の詩は、古來、人の同情をそゝつてゐる。漢族が、外民族と和

西域との交通

南越の征服  
古朝鮮の滅亡

武帝の晩年

(六)前漢の末  
路  
宣帝の中興

するため、かゝる政略結婚の犠牲とした婦人を、和蕃公主と稱した。

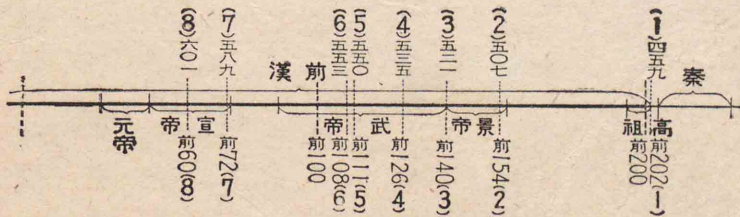
張騫の遠征によつて、西域と漢との交通が開け、葡萄、苜蓿、石榴、胡麻、さては、孔雀、獅子などが、支那に傳はり、支那からは、絹や鐵の類が、西方に輸出されるに至つた。

武帝は、また南の方、南越を併せ、東の方、古朝鮮を滅ぼした。

かくて武帝は、大いに功業を成したが、外征や奢侈のため、財政の困難を來し、そこで鹽鐵の專賣を行ひ、その上、國民に重税を課したので、晩年には、國內の形勢が、不穩となつた。

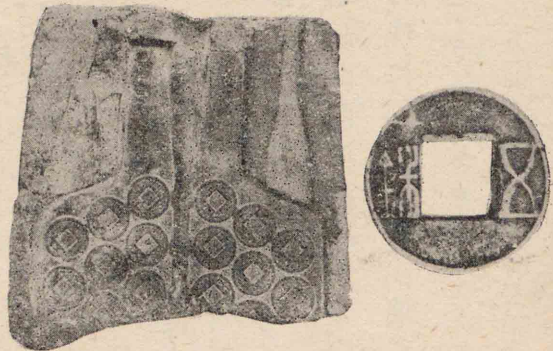
武帝の曾孫の宣帝は、漢を中興して、匈奴を降し、西

〔皇紀〕西紀

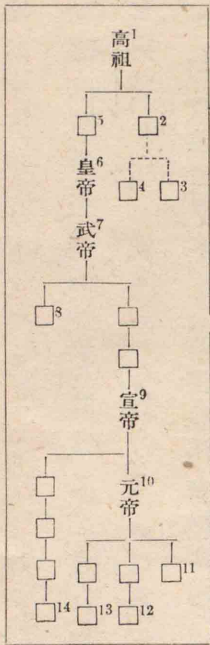


(王昭君)

王莽の篡立



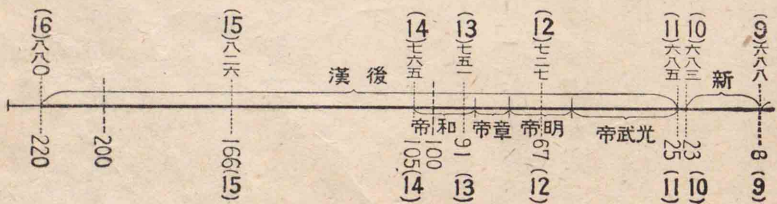
漢の前代宣帝の五銖錢とその鑄型 (九一圖)



漢前 (三圖系)

域諸國を從へた。かの王昭君が、和蕃公主として、匈奴に嫁したのは、元帝の時である。匈奴の外患がなくなる。外戚の内憂が生じ、やがて、王莽は、天命によると稱して、漢室を篡ひ、國を新と號した。そのため、漢は一時中斷したが、間もなく、叛亂が起つて、王莽は殺され、新は、

なく、叛亂が起つて、王莽は殺され、新は、



(七) 後漢の興起  
光武帝の即位

後漢の盛時

(明帝の皇后馬氏)

(八) 後漢の對外關係

匈奴及び西域の經略

大秦との交通

僅に十五年にして滅んだ。

時に漢の王族の劉秀は、衆に推されて、洛陽にて帝位に即き、漢室を再興した。後漢の光武帝、これである。  
河南省(頁六、三三)

1 都の位置によつて、前漢後漢をば、西漢東漢ともいふ。

2 光武帝は、心を内治に注ぎ、前漢の末路に鑑みて、節義を獎勵した。明帝、章帝、共に明君で、漢の國運は、また盛んとなつた。  
(頁三三)

明帝の皇后馬氏は、賢明の譽高く、内助の功多かつた。

その後、匈奴は、西域諸國を併せて、支那の北邊に入寇したので、明帝は、これを征伐する一方、班超を西域に遠征せしめた。和帝の頃、班超が西域都護となつて後、匈奴は、遠く西方に移り、西域諸國も、一時、漢に歸服した。彼が、西域にある時、大秦國の富強を聞き、この國とも交通せんとして、使を出したが、成功しなかつた。されど、後漢の末頃、大秦王安敦の使者と稱するもの、海路より、漢の南端に着い

M.A. Antoninus

印度支那東岸(頁三三、三六)

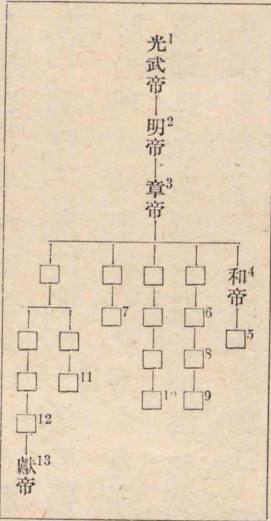
(九) 後漢の衰亡

外戚の專横

宦官の跋扈

た。これ、支那と歐洲との最初の交通で、以後、大秦の商人は、海路時々、南支那に来て、貿易したが、その最も欲したのは、絹であつた。

この頃、支那産の絹は、大秦國の貴族、富豪の間に珍重され、一時は、黄金と同じ目方で、交換されたといふので、その價の高かつたことも知られよう。



(四圖系) 後漢

和帝以後の天子は、多くは幼弱で、母后が政を執つたため、外戚が、漸く專横となると、宦官の力をかりて、これを抑へんとしたが、その結果、また宦官の跋扈を來し、政治は亂れた。そこで、光武帝以來、獎勵した節義の士の中には、奮起するものも出たけれど、却つて、宦官のため退けられ、朝廷の威信は墜ち、群雄、四方に起るや、前後、約四百年にして、漢は滅んだ。

この間、我が國と關係の深い、朝鮮半島は如何であつたか。  
(頁三三、三六)

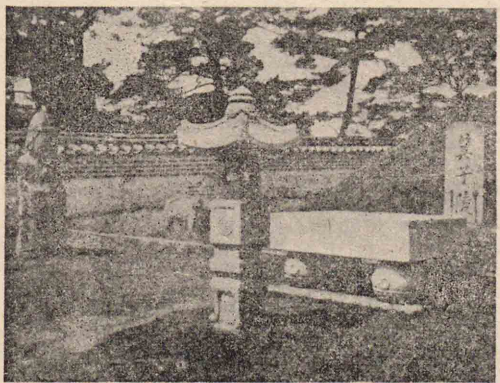
(一〇) 朝鮮半島と我が國

朝鮮半島は、我が國と大陸との中間に位し、古來、大陸の文化を我が國に傳へた、唯一の棧橋であり、また、我が國防の生命線でもあつた。今や帝國の一地方として、その歴史は、特に注意を要する。

(一一) 古朝鮮

傳説では、殷の亡んだ時、王族の箕子が、支那から逃れて遼東に行き、朝鮮の王となり、その子孫は、世々、王險に都した。當時の朝鮮は、半島の北部から、今の滿洲國南部に及んでゐた。前漢の初、衛滿が、この國を奪つた。箕氏と衛氏との朝鮮をば、古朝鮮といふ。

然るに、衛滿の孫の時、漢の命に従はなかつたので、武帝は、古朝鮮を攻め滅ぼし、その地に四郡を置いた。かくて半島の



平壤にある。今より八百餘年前、始めて求め出したもの。

箕子の墓 (〇二圖)

(一二) 漢の四郡

(一三) 三韓

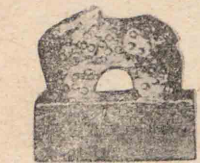
日本と三韓

日・漢の交通

北部は、支那の領土となり、支那の文化は、これより盛んに半島に流入した。その中心は、今の平壤附近の樂浪であつた。時に半島の南部には、馬韓、辰韓、三韓があつた。

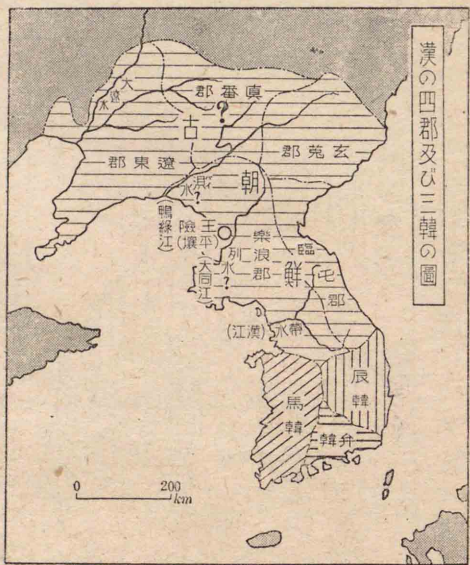
我が國は、神代より三韓地方

と交通し、その風俗も似てゐて、殆ど同域といつてもよいからであつた。



(一二圖) 漢ノ委ノ奴ノ王國ノ印

武帝の朝鮮征伐後、三韓と漢との間が密接となり、我が國人と漢との交通も開けた。漢では、我が國を倭と呼び、我が國人で、後漢の光武帝より、王印を授けられたものもあつた。



(八圖地)

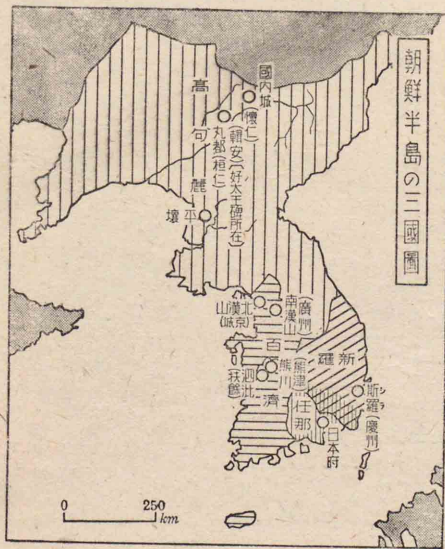
(一四) 半島の三國  
高句麗  
新羅  
百濟

日本と三國  
任那

日本府

前漢の末頃、滿洲族の高句麗は、鴨綠江の上流に起り、漢の郡縣を侵して、半島の北部を占領するやうになり、南方の三韓も高句麗の建國と前後して亡び、辰韓のあとに新羅が起り、馬韓のあとに百濟が起つた。これらを半島の三國といふ。

我が國では、三國をも依然、三韓と呼んだ。辨韓のあとに任那が起つたが、常に新羅の侵略に苦しみ、救ひを我に求めて來た。我が國は、日本府を設けて、これを保護した。神功皇后の新羅出兵は、支那内地が混亂した後漢末で、これによつて、我が國威は、半島に振うた。これより日本固有の文化も、大陸文化の影響を受けて、非常に發達す



(九圖地)

(一五) 漢代の文化

儒學の興隆  
董仲舒

訓詁學

史學と文學

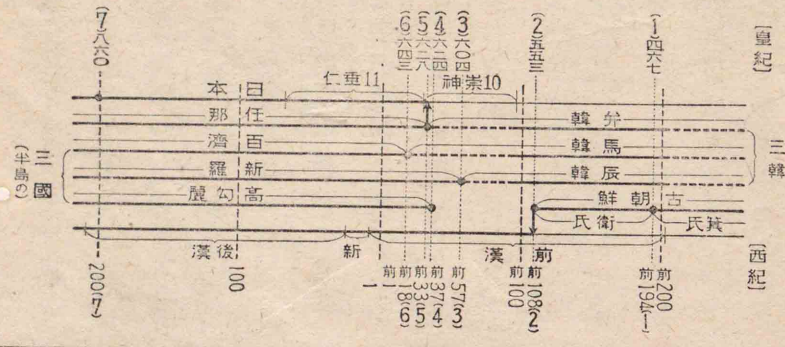
るに至つたのである。

漢は、漢族、漢字、漢文、漢學などに於ける如く、後世、支那の代名詞となつた。それは、漢代に、支那の國威が振つたと共に、その文化が、著しく發達して、後世に大いに影響したからである。

秦代に衰へた學問も、漢初、漸く復興したが、武帝は、更に董仲舒の意見を用ゐ、儒學を獎勵して、國民思想の統一をはかつた。

漢代の儒學は、字句の解釋を主としたので、これを訓詁の學といふ。

史學は、大いに發達し、その代表的なものに、前漢の司馬遷の「史記」と、後漢の班固の「漢書」とがある。





(班昭)

班固は「漢書」の成らぬ前に歿したので、妹の班昭はこれを繼いで完成した。彼の女は、また「女誡」を著して、婦人の守るべき道を説き、自らもその

手本を示した。かつて曹氏に嫁し、夫に死別して、宮中に仕へ、曹大家(家は姑の意、大)と呼ばれ、婦徳と學問と兼ね備へたので有名である。

文學では、武帝の頃、司馬相如が最も名高い。

秦代に統一された文字が、漢代には、更に簡

略な隸書となり、後には、一層書き易い楷行草

の三體が現はれた。これらの文字は、最初、竹

木または絹などに書かれたが、後漢の中頃、蔡

倫が紙の製法を發明してから、書物も世に廣

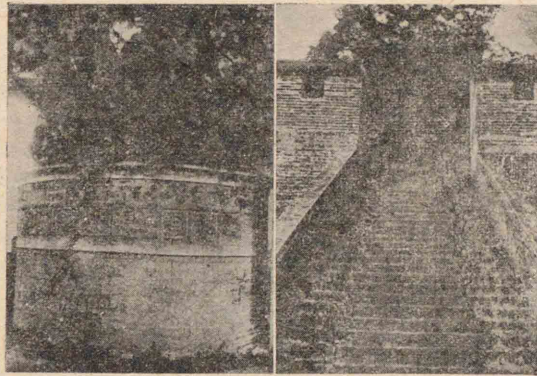
まり、頗る文化の進歩を助けた。後、この製紙

法は、東は、朝鮮や我が國に傳はり、西は、アラビ

かくの如く、東洋の發明で、西洋のそれより

漢字の發達と  
書寫の材料  
漢字の書體

紙の發明



墓の遷馬司(二二圖)

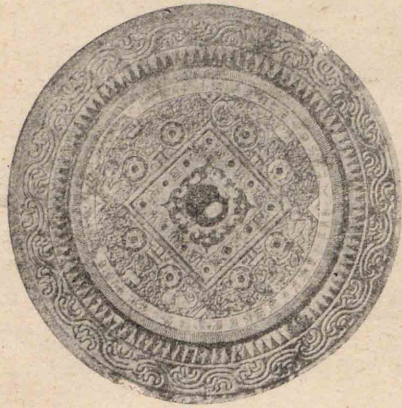
陝西省韓城縣にある。

ヤ人を経て、歐洲に傳はつた。

美術工藝

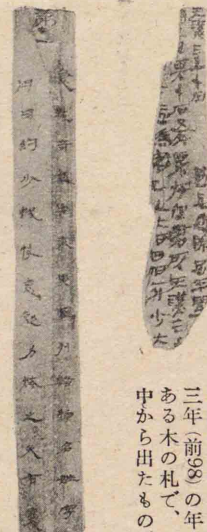
早いものは少くない。

人々の生活程度が高まるにつれて、美術工藝の如きも、大いに進歩した。この時代、銅鏡、漆器、織物など、甚だ精巧なものがあつた。



鏡 漢 (四二圖)

後漢の元帝の時、史游の作つた「急就篇」の出土したもの。



書隸の代漢 (三二圖)

宗教  
佛教と道教

(一六) 漢代の  
文化と我  
が國  
漢學の傳來

漢代、支那に佛教が傳來すると、それに刺戟されて、道教が起つた。これは、後漢の末頃、張道陵の唱たもので、道家の説をかり來つて、老子を本尊とした、民間の信仰である。我が國に始めて漢學を傳へたのは、應神天皇の御代で、漢族の後といはれる、百濟の王仁であつた。これ以來、支那や朝鮮からの歸化人の子孫は、多く、文筆を以て朝廷に

技藝の傳來

日本精神

仕へ、學問の普及にも、功勞があつた。また、朝鮮支那から、機織、裁縫の職工も、多く歸化し、我が文化の發達を助けた。彼れ等の子孫が、よく忠良なる日本臣民となつたことと共に、皇室が率先して、國民文化の開拓にあたり給ふたこと、及び國民が、固有の日本精神を發揮し、これを基礎として、外來文化を同化し、益、國本を培養したることなどは、我れ等の特に留意せねばならぬ點である。

かくて、漢代の文化に、新しい要素を加へ、以後の文化に、影響を與へるものは、佛教である。

(一七) 佛教の  
興隆  
アシヨカ王

佛教は、釋迦の後、二百餘年を経て、戰國の末頃、中印度にアシヨカ王が立ち、熱心にこれを弘めたので、南はセイロン島、北は中央アジアの大月



刻彫の式ラードンガ (五二圖)



(六二圖) 漢代漆器(蓋)

この鏡奩は、大正十四年、漢の樂浪郡時代の一墳墓中から發見され、た多くの遺物中、最も完全で、しかも最も興味ある、精巧な漆の作品である。圖は、その蓋を除いて、身の上部に、銅鏡一面を載せてゐるところを示したものである。二千年ばかりも以前のもものが、絹の組紐の着いたところまで、そのまゝ残つてゐるとは、土中にあつたればこそで、まことに珍らしい限りである。この精巧美麗な一工業品から推して、如何に漢代の美術工藝の進んでゐたかが知られよう。

カニシカ王

(一八) 佛教の東傳



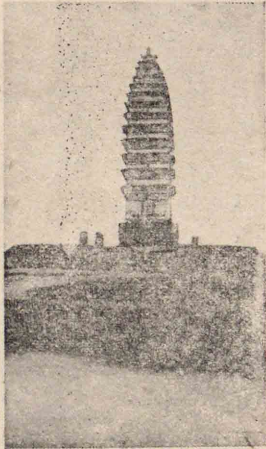
(七二圖) 支那新疆省焉耆(ルンヤシラカ)の西より出た泥像

影響を受けて、佛教美術が發達した。この様式は、中央アジアを経て、支那に傳はり、更に朝鮮を経て、我が國にも流入した。

支那に佛教の傳はつたのは、大月氏から、傳説では、後漢の明帝の時

氏國にまでも傳はるやうになつた。大月氏國が、佛教の中心地となつたのは、カニシカ王の時、支那では、後漢の時代である。

大月氏國の都のあつたガンダーラ地方は、ギリシヤ文化の



この塔は、南宋の初、後漢の白馬寺址の東南に建てられたものである。

白馬寺址附近 (八二圖)

である。洛陽の白馬寺はこの頃建てられた。その後、西域諸國の僧侶相ついで支那に來り、譯經布教に従事した。

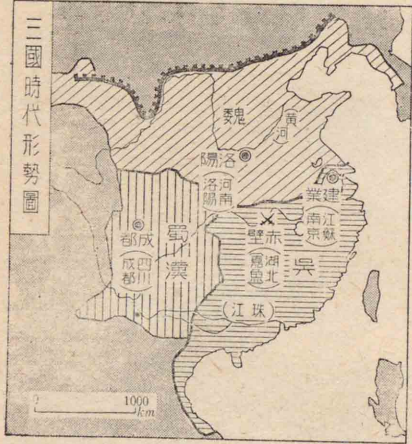
かくて、三國・兩晉を経て、南北朝時代に佛教は榮えたのである。  
(頁三五)

### ② 三國・兩晉・南北朝時代

後漢末の群雄中、曹操は天子を奉じて、江北を平定し、子の曹丕は、

表面、禪讓を装ひて、後漢の獻帝から、  
位をゆづらしめ、洛陽に都して、新し  
く國を興した。これを魏といふ。  
(頁六二四)

次で、前漢の景帝の遠孫劉備も、蜀漢  
を建てて、成都に都し、その後、江東の  
孫權も、建業を都として、吳を建てた。  
魏、蜀、漢、吳を、世に三國といふ。  
(頁三三三)



(〇一圖地)

### (一) 三國の分立

魏 蜀 漢 吳

中、蜀漢は、諸葛亮の忠誠によつて、よく他の二國と  
鼎立し、更に漢室の復興を計つて、屢魏を伐つたが、  
志を達しなかつた。

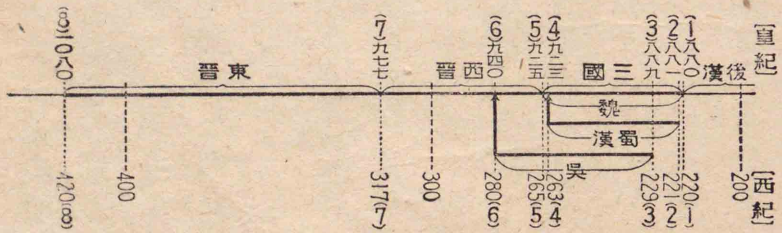
諸葛亮は、孔明の字を以て名高く、支那は勿論、我が國  
に於いてさへ、忠誠・武勇の典型として、尊敬されて來た  
一人である。劉備の死後、よくその子を輔けたが、魏を  
征するに臨んで、幼主劉禪に上つた前後二回の出師表  
は、言々句句、肺腑より出たといはれる。外國のことを  
よく言はなかつた江戸時代の國學者、平田篤胤ですら、  
孔子と共に、孔明の人物を稱讚してゐる。

その後、魏は、蜀漢を滅ぼし、朝鮮半島にまで勢を  
及ぼしたが、宰相司馬炎の立てた晉のために、篡は  
れた。司馬炎は、即ち晉の武帝である。武帝は、や

### 諸葛亮

### (二) 西晉の盛衰

### 晉の統一



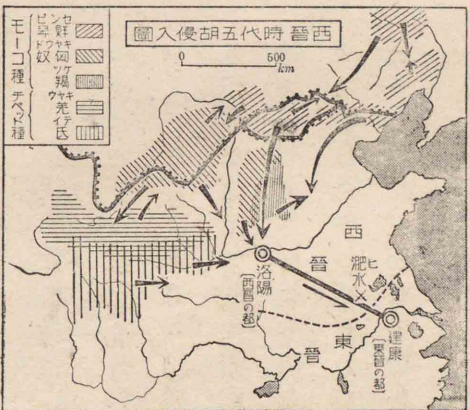
諸王の亂

がて吳を滅ぼして、天下を統一した。けれどもその死後、一族の諸王は、互に權力を争ひ、内亂を起した。(頁三三六) その上、當時、老莊の説が盛んに行はれ、禮節を卑しめ、世事を省みず、(頁三三三) 専ら空論を談じて、これを清談と稱した。

清談

かゝる隙に乘じ、後漢末から、北支那の地に移住してゐた五胡と總稱される異民族が蜂起し、その中、(地圖二) 晉の都に近い匈奴が、先づ洛陽を陥れた。そこで

(三)五胡と東晉



(一—圖地)

南方の開発  
北方の争亂

ふ。晉の南遷と共に、北支那の名家は、多く江南に移つたので、それ以來、南方は、北支那に代つて、文化の中心となつた。(頁三三三) 然るに東晉で

(附圖二)

晉の王族は、江南に遷り、建康に據つた。これより以前を西晉、以後を東晉といふ。(頁三五五) (頁三五七) (頁三五八)

は、また内亂が相ついで起り、北方でも、五胡及び漢族が、諸方に國を建てて、互に攻め争つてゐた。かうした形勢が、やがて南北朝の時代となる。

(四)南北朝時代

南方では、東晉を滅ぼして宋が興り、北方では、後魏が、北支那を統一した。かくて支那には、南北の二大勢力が、以後、百五十年間、對立するやうになつた。世に、これを南北朝時代といふ。(頁三三三) (頁三三六)

道德の紊亂

この頃、道德が紊れ、表面は、禪讓と稱しながら、天子を廢し、又は、弑したと、史上に類なく、南北朝合せて五十君の中、終を全うしたのは、僅かに二十君であつた。宋の最後の順帝が、願はくは、後身、世々また天王の家に生まるゝこと勿れと嘆かれた如きは、我が國民の想像だも及ばぬところである。

(五)後魏の孝文帝  
北方民族の漢化

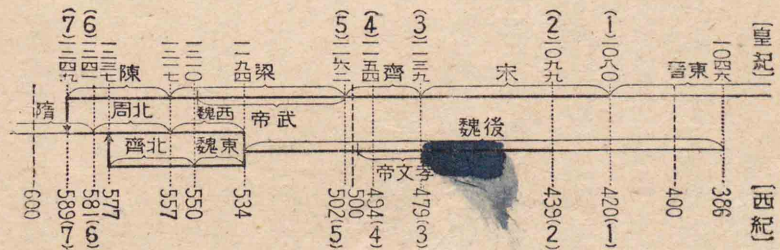
北朝の諸國は、その風俗が粗野で、南朝からは、常に北虜と卑しめられた。後魏の孝文帝は、支那の文化を慕ひ、國俗の野鄙を嫌つて、

六朝時代の文化  
文學

都を洛陽に遷し、制度言語風俗等すべて支那風に改めた。<sup>(4)</sup> ところで、後魏の文化は、頗る進んだけれども、北方民族固有の武強な精神を失ひ、國運は次第に振はなくなつた。しかし、南北朝を通じて、一般に北人は、武強を尊び、南人は、文弱に流れた。これやがて、北朝の最後の北周から起つた隋が、南朝を併せて、天下を統一する所以である。<sup>(6)</sup>

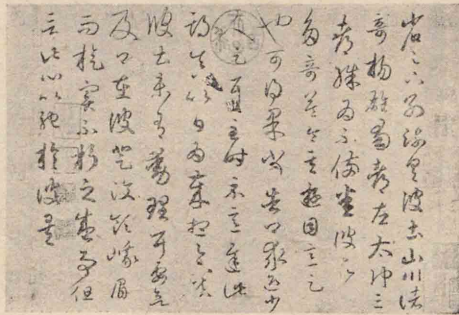
吳、東晉、宋、齊、梁、陳は、同じく今の南京に都したので、總稱して六朝といふ。この時代、儒教は衰へ、老莊の説が行はれ、また文學藝術などの趣味が發達し、殊に文學は、形を整へて、美しい對句をならべることが流行した。<sup>(5)</sup>

我が平安時代の文學の中、和漢朗詠集の如きは、六朝



文學の著しい影響を受けてゐる。

かの清節を以て名があつた詩人陶淵明、書道の神と稱されたる王羲之、畫家の聖といはれる顧愷



書之羲王 (九二圖)

之も、共に東晉時代の人である。

漢代に傳はつた佛教は、六朝時代に入つて盛んとなり、東晉の僧法顯は、印度に行つて法を求め、梁の武帝は、佛教に心酔して、國運の衰頹を招



畫之愷顧 (〇三圖)

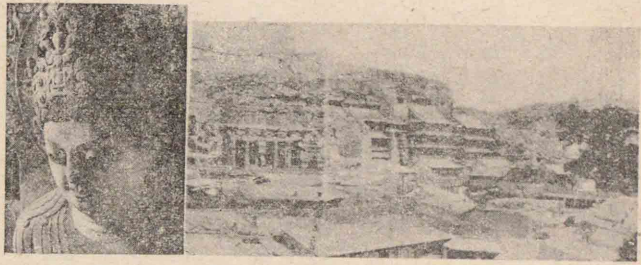
書畫

佛教

佛教美術

道教

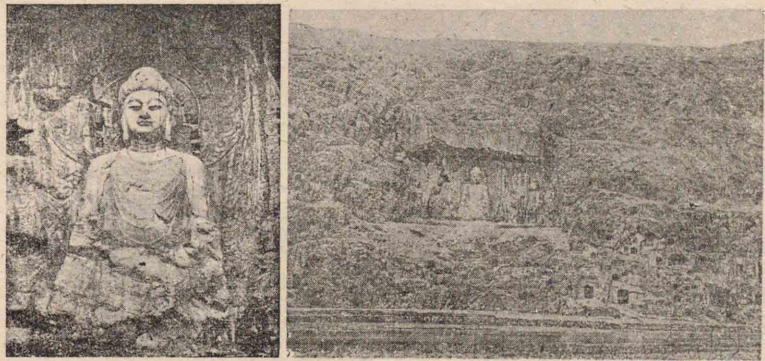
(七) 朝鮮半島  
と佛教



佛石と窟石の岡雲 (一三圖)

いた。南印度から支那に來た達磨タスマが禪宗ゼンシュウを傳へたのは、この頃である。この時代、佛教美術も頗る進歩し、印度に倣つて、雲岡ウツンカウ（山西）や龍門リウモン（河南）などの石窟寺クツクツも開かれた。佛教に對抗して、道教ダウキョウも盛んとなり、道佛の論争リョウソウも激しかつた。

東晉の中頃、佛教は北支那から高句麗コウコリに傳はり、高句麗コウコリから新羅に入り、百濟ハクサイに



佛石と窟石の門龍 (二三圖)



畫壁の代時麗句高 (三三圖)

平壤の西南なる遇賢里ウケンリに、高句麗時代の古い三つの墓がある。その中の大墓は、径51m 餘り、高さ9m 足らずあつて、内に方形の室がある。良質の大きな花崗岩で巧妙に築かれ、その四つの壁や天井などには、繪畫や模様が美しく彫がれてゐる。こゝに示したのは、その東方の壁にある蒼龍サウリョウの圖である。入口から流れこむ弱い光線で見ると、夢のやうに浮かんで、えもいはれぬ見事なものである。この龍の形は、支那の北朝の後魏時代のものに似てゐる。またその他の繪畫模様も、様式は全く支那の南北朝時代のものであり、我が飛鳥時代のもとも最も密接な關係がある。今から凡そ千三百年以上以前のもので、我が法隆寺の壁畫より百年ばかりも古く、印度のアジャンタの壁畫に次ぐ東洋最古の壁畫である。(圖二)

高句麗の強盛

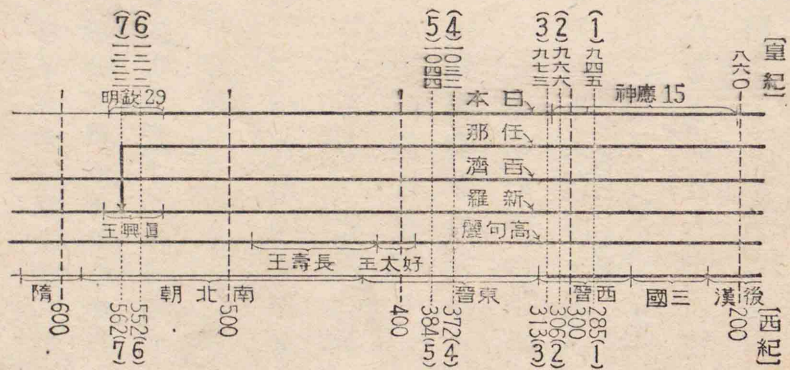
新羅の強盛と日本府の滅亡

佛教の日本傳來

我が國と南朝諸國

は、別に東晉から傳へられた。その後、好太王廣開土王などの英主が出て、強盛となつた高句麗が、支那の影響により、進んだ文化を持つてゐたことは、當時の遺物などからも想像される。次いで新羅にも、また英主が現はれて、強盛となるや、百濟を侵し、任那を攻めて、遂に日本府を滅ぼした。この間、百濟は常に我が國の援を得て、國力の恢復を圖つた。佛教の我が國に傳へられたのは、日本府滅亡の十年前である。(頁三)

佛教と共に、佛教美術も、東傳し、我が飛鳥時代の燦然たる文化を築いた。我れ等の祖先は、この外來の教を全く日本化し、儒教と共に、精神上(頁三)





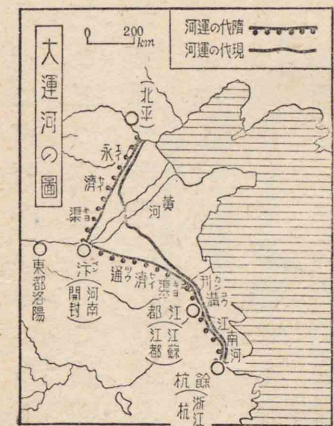
の糧として來た。かく南北朝時代、支那の文化は、多く朝鮮半島を経て、我が國に傳來したが、我が國から、直接南朝の諸國に、織物、裁縫の工女を求めたこともあつた。日支の公の交通は、南北朝を統一した隋からである。

### 3 隋・唐時代

## (一) 隋の興起

北周の外戚楊堅は、帝位を篡つて、長安に都し、ついで、南朝の陳を滅ぼし、天下統一の業をなした。隋の文帝、これである。北朝の系統ではあるが、元來は漢人である。こゝに至つて、漢族は復興した。

## (二) 隋の煬帝



圖地の河運大 (二一圖地)

その子煬帝は、性、豪華を好み、多くの宮殿を造り、また、巡幸の便のため、支那の南北を連ねる大運河を開いた。その工事には、男子のみでは不足したので、婦人をも徴發した。彼は、更に、外國經略を志し、四方に兵を

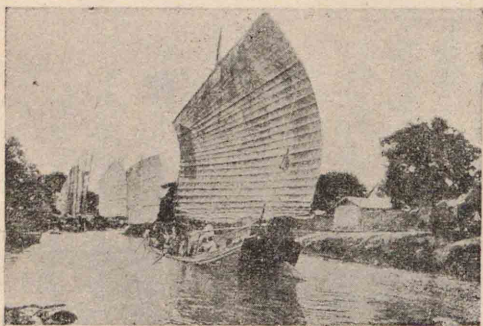
## (三) 隋と我が國

出した。されど、高句麗を征するに及び、隋の威信を失つたので、この機に乗じ、不平の徒は、各地で亂を起した。その時、李淵も、その子、世民のすゝめて、兵を擧げ、またたく間に、長安を占領した。ついで煬帝が、江都の離宮で殺せ

られるや、隋は、統一以來、三十年にして滅んだ。

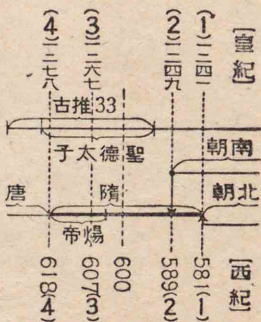
## (四) 隋と我が國

## 日・支國交の始



景現の河運のけ於に南江 (四三圖)

聖德太子が、小野妹子を隋に遣はされたのは、煬帝が立つてから、まだ間のない頃である。尊大なる煬帝は、日出處天子、致書、日没處天子といふ我が國書を見て、甚だ喜ばなかつたが、やがて裴世清を使者として、我が國に來朝せしめた。この對等の交際は、公に日本と支那とを結んだ。



唐初の隆盛  
高祖太宗

貞觀の治

(唐の太宗の皇后)

高宗



太宗の陵(昭陵)は、陝西省醴泉縣にある。これは、太宗の乗用した六駿馬の一として名高い。當時の武人の服装も、左側の人によつて知られるであらう。

物造の前(陵昭)陵の宗太の唐 (五三圖)

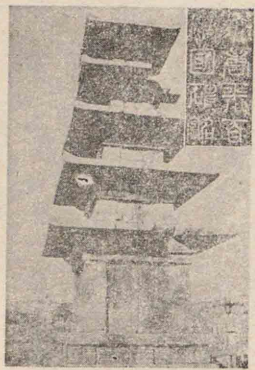
最初の國交であつて、次の遣唐使派遣の端緒となつた。  
煬帝の殺せられた年、李淵は、長安で帝位に即いた。これが、唐の高祖である。高祖は、やがて位を、子の世民に譲つた。これを太宗といふ。太宗は、稀なる英主で、文武の名臣を用ゐ、よく天下を治めた。世にこれを貞觀(太宗の年號)の治とたゞへる。

太宗は、皇后の長孫氏を重んじ、よく相談された。されど皇后は、談政治の事に及ぶと、「牝雞之晨、惟家之索」として、如何に問はれても對へなかつた。そこに皇后のゆかしさがあつた。その著に、「女則千卷がある。太宗の歿後、高宗の時も、前朝から残つた功臣が、これを輔けたため、兩帝の治世、約六十年間は、唐の勢、隆盛を極め、漢族の

(五)唐の外國  
突厥 西域

朝鮮

百濟の滅亡



これは、唐の顯慶五年(656)に建てられたもので、百濟時代の建造物として遺つてゐる唯一のもの。今忠清南道扶餘郡にある。

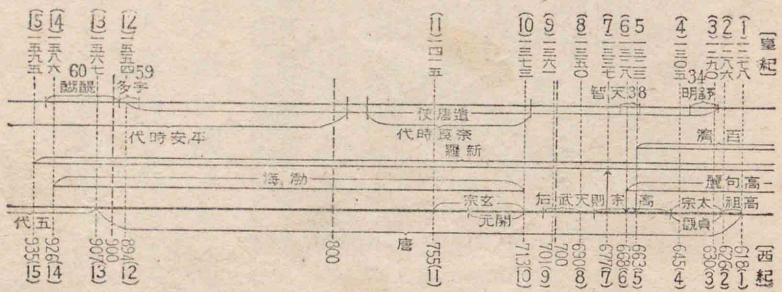
銘題のそと塔國濟百平唐六 (六二圖)

發展は、殆んど絶頂に達した。そこで、唐の國威は、廣く周圍の國々に及んだ。

唐初、北方から西域に力を張つてゐた突厥は、

後に東西に分れ、東突厥は、太宗に、西突厥は、高宗に亡ぼされたので、西域諸國は、唐に従ふに至つた。またチベットも、太宗の時、初めて支那に通じた。

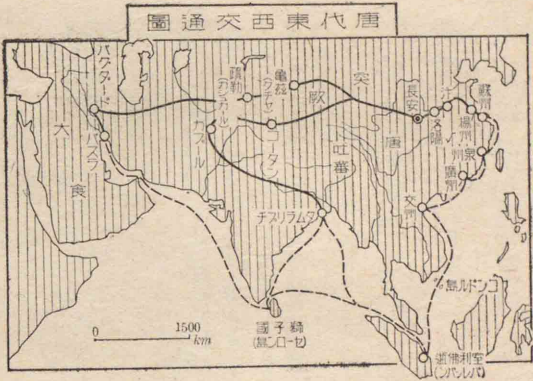
時に、朝鮮半島では、高句麗が、百濟と同盟して新羅に當り、新羅は、孤立して援を唐に求めた。太宗は、高句麗を親征して失敗し、高宗は、百濟を



高句麗の滅亡  
新羅の統一

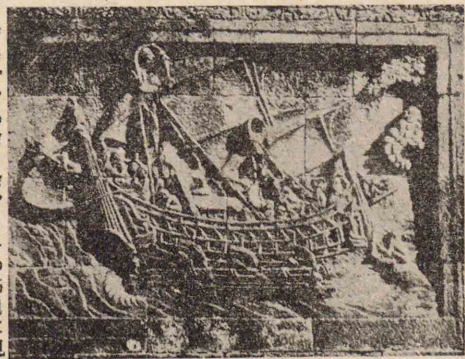
滿洲  
靺鞨

六都護府



(三一圖地)

唐に臣事して、その文化を傳へた。また東  
晉の頃から、北滿洲に住む靺鞨(古の肅慎)も、唐  
初に來貢してゐる。  
唐は、これらの廣大なる勢力範圍を管轄

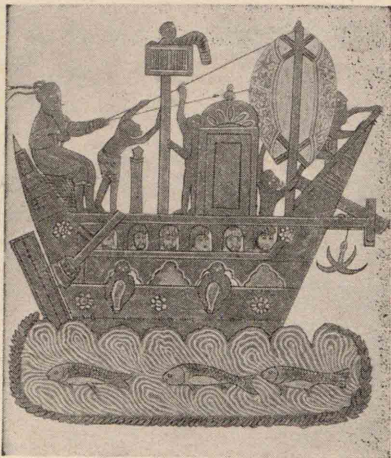


船舶の通交海南の代唐 (七三圖)

降し、次いでこれを滅ぼした。  
この時、我が軍は、唐軍と白村江口に戦  
ひて利なく、ために天智天皇は、半島の經  
營を止め給うた。その後、高句麗もまた、  
唐に滅ぼされた。  
が、新羅は、間もなく唐の兵を逐う  
て、大同江以南の地を統一し、一方

(六) 諸外國との交通

大食



圖の船舶の大食 (八三圖)

船室内に顔の見えるのは、大食人であり、働いてゐる黒人は、崑崙奴である。これは大食人の畫いたもの。  
て來た。唐では、この國を大食と呼んだ。その後、この國の商人は、多く海路から支那に來り、胡椒、象牙、犀角などを賣つて、絹、陶器、茶などと交換した。大食人は近世に至るまで、東洋の海上貿易を支配した。

(頁三〇・六七)

するため、安東、安北、單于、北庭、安西、南の六都護府を置いた。  
唐の國威が、四方に輝くにつれて、諸外國との交通も、盛んに行はれた。太宗の頃、イスラム教を起したマホメットが、アラビヤ半島を一統して、新しく建てたサラセン國は、やがてペルシヤを滅ぼして、唐と境を接するに至り、高宗の時、使者を唐に送つ

我が國

日本の名が、始めて西方に知られたのも、唐代からで、當時、大食人は、日本をワクワク(倭國)といひ、黄金の多い國として傳へた。  
我が國と唐との公の交通は、太宗の時、<sup>34</sup>

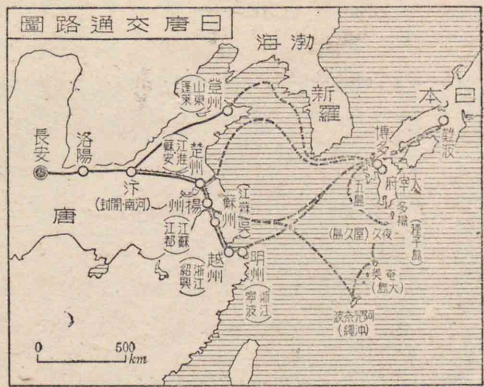
明天皇が遣唐使を遣はされたのに始まり、<sup>59</sup>  
宇多天皇の時、これを止められるまで、二百六十餘年に及んだ。この日唐交通は、我が文化を高める上に、大いに役立つた。<sup>(地圖一)</sup>

(七) 則天武后

高宗の死後、則天武后は、自ら帝位に即き、國を周と號し、十五年續いたが、外國に對する唐の勢威は、この間に、漸く衰へた。

(八) 玄宗の世 開元の治

玄宗の初世は、開元の治とたゞへられるほどで、唐の文化も著しく發達した。外に對しては、四邊の要地に、十節度使を置き、國防に



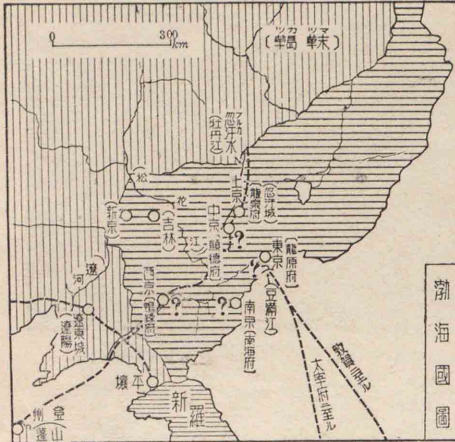
(四一圖地)

節度使 (楊貴妃) 安祿山の亂 (九) 渤海の興起

備へたので、唐の勢は、再び振つた。然るに、晩年には、漸く政に倦み、楊貴妃を寵して、奢侈を極めるに及び、東北の三節度使を兼ねた安祿山は、遂に大亂を起した。<sup>(附圖二)</sup>

さきに高句麗を滅した唐は、安東都護府を平壤に置いたが、その後、新羅の勃興により、これを遼東の地に移した。高句麗の遺種大祚榮は、靺鞨を基礎として、渤海國を建て、玄宗の時、始めて唐の封册を受け、爾來、唐の文化を採り入れた。一方、新羅を制せんとし、我が國に使を遣はして、好を修め、貿易を營んだ。

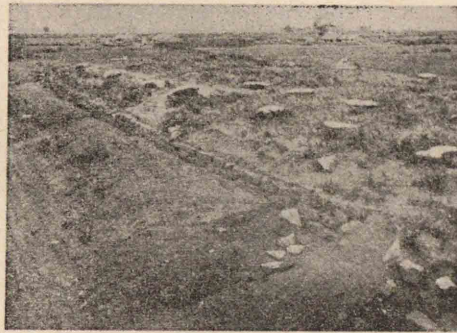
奈良朝より平安朝にかけて、かの國使の我が國に來るもの、約百八十年間に、前後三十五回に及んでゐる。<sup>(頁五五)</sup>



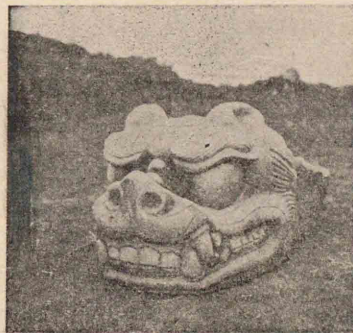
(五一圖地)

(一〇) 唐の衰

内憂 外患



渤海國上京の宮殿の址 (九三圖)



渤海の遺物 (〇四圖)

(圖四〇)の遺蹟から發掘されたもの。我が國に行はれる獅子舞の獅子によく似てゐる點を注意してほしい。

唐交通に貢獻したことも少くない。

安祿山の亂後、唐は、國威の恢復遂に成らず、夷狄は、屢、邊境に侵入し、地方の節度使は、その勢、強大となつて、朝廷を憚らなくなり、朝廷には、また宦官が跋扈して、天子の廢立まで行ひ、政治は紊れ、財政は

11 憲宗は宦官に弒せられる



文珠菩薩の像 (一四圖)

本圖は、新疆省敦煌縣の千佛洞で發見された、絹製の幟に畫かれた文珠菩薩即ち文珠師利(Mandju-sri)の像である。同所で發見された遺物の中では、最も完全なもの一つであり、且つ支那の佛教美術中、印度傳來の要素を最もよく示してゐる好例として擧げられる。即ち菩薩の體形・姿勢・服裝など、いづれも全く印度風だからである。下方の獅子をひいてゐる從者の黒人は、支那人の謂はゆる崑崙奴に外ならぬ。

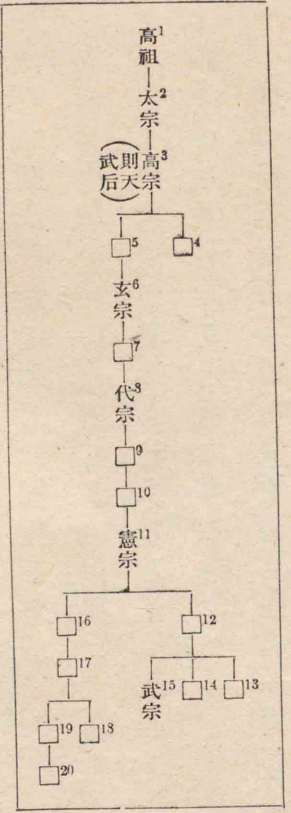
こゝに特に文珠菩薩の像を掲げたのは、それが明らかに印度風であるといふばかりでなく、その文珠の名が、實に後に擧げんとする新興滿洲帝國の滿洲の名の起原をなすものとして興味あるがためでもある。思ふに文珠菩薩は、東方又は東北方にあらはれるものとして、この地方では、古來特別の尊敬を拂はれてゐた。そこで、土地の酋長らは、文珠の名に因み、滿珠、或は滿住などと自稱し、又は他稱されて、得意であつた。現に清の太祖なども、自分自ら滿住と稱したこともあり、西藏の喇嘛僧などが、清朝の皇帝を尊稱して、文珠師利皇帝などと呼んだこともある。それが如何にして國名となつたかといふに、初め清の太祖は、國を金又は後金と號してゐたが、次の太祖の頃になると、清の勢力は發展して、漢人その他を併せたので、金の名稱では、かつて漢人を苦しめた阿骨打の建てた金を思ひ出させ、漢人統治上不便であつたから、金の代りに滿住の國の意で「滿洲」といふ語を用ゐるに至つたと考へられる。

印度文化の中に生れた文珠の信仰が、西域を経て支那に入り、更に滿洲の國名に轉じてゐようとは、歴史を調べるでなければ、わからないことである。

節度使の纂立

(一) 唐の文化

制度



唐 (五圖系)

益、困難となつた。かくて節度使の朱全忠が、唐の政權を篡ひて、開封に

て、帝位に即き、國を後梁と號した。

かくて唐は、滅んだが、滅んだ後にも、不朽なのは、その文化である。唐は、隋の後を承けて、南北兩朝の文化を統合すると共に、交通の開けた結果、印度や、西域諸國の風をも採り入れ、華やかな世界的文化を成すに至つた。それが、唐の國威に伴れて、の國々に、多大の影響を及ぼした。

唐の制度は、略、太宗の時に成つた。中央政府の三省は、天下の大政を統べ、その中の尙書省の下には、六部があつて、政務を分掌した。地方は、十道に分れ、州・縣が、その下に置かれた。

官制  
田制・税法

| 表 較 比 制 官 唐 日 |   |
|---------------|---|
| (唐)           | (日)   |
| 省 三           | 官 二<br>神 太<br>祇 政<br>官 官  |
| 部 六           | 省 八<br>中 式 民 治 兵 刑 宮 大<br>務 部 部 部 部 部 部 部 部<br>省 省 省 省 省 省 省 省  |
| (寺九)          | 大 藏 内 省 省 省 省 省 省 省 省<br>府 寺 大 大 大 大 大 大 大 大<br>省 省 省 省 省 省 省 省 |

夏・秋の二期に、資産に應じて課税した。

初徴兵の制を布いた唐も、玄宗以後には、職業的の兵士を募ると、なり、節度使が、私兵を養ふ基となつた。

都には、大學があり、州・縣にも學校があつて、身分あるものの子弟や、平民の優秀なるものを教育し、これらの學校出身者などを、試験

唐は貧富の隔たりを除くため、土地を國有とし、人民には、均しく田地を給與して、租庸調の義務を負はせた。田地より收穫の幾分を官に納めるのが、租。毎年二十日間、公の勞働に従ふのが、庸。絹や布など、その地方の物産を納めるのが、調である。この制度も、安祿山の亂後には廢れ、

兵制  
學制

大化の改新と  
唐の制度

儒學  
文 詩

文

の結果官吏に採用した。その登用試験を科擧といひ、種々の科に分れてゐたが、文章を主とする進士科が、最も世に重んぜられた。

我が國の大化の改新や、大寶律令が、唐制を取入れて、これをそのまゝ模倣することなく、かへつて國風を發揮するに努めた點は、注意を要する。

唐の儒學は、漢代の如く、訓詁に傾いたため、新しい研究は、起らなかつた。これに反して、文學は、歷代中、最も隆盛を極め、中にも、詩は、

特に發達し、玄宗の時

には李白、杜甫の二大

詩人が出て、半世紀後、

白居易が出た。文に

は、その頃、韓愈、柳宗元

の二大家が、従來の弊を破つて、達意を主とする、古文を復活した。

阿部仲麿、吉備眞備の留學は、玄宗の時である。仲麿は、永く唐に留つて、



(二四圖) 宋 梁楷の李白畫

藝術

繪畫

書道

彫刻  
音樂



畫の維王 (三四圖)

維貞觀中十五夏  
之月皇帝避暑于  
九成之宮此則隨  
之仁壽宮也冠山

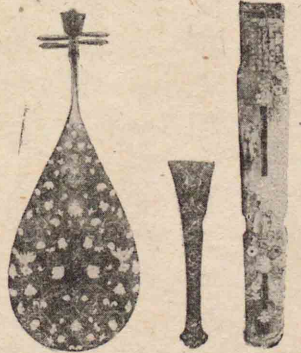
書の詢陽歐 (四四圖)

が名高く、書道では、歐陽詢、顏真卿等が知られた。佛像の彫刻、諸種の音楽で、我が國に

高官につき、李白、王維なども親交があつた。朝衡といふは、彼の唐名である。



樂音の域西 (五四圖)  
るゐてつ謠か何て奏伴の琵琶  
たし土出らか省疆新、ろこと  
るえ見にのもの代唐



(1) 正倉院の御物 (六四圖)  
(2) 撥子  
(3) 琵琶、いづれも唐より

傳來せるもの。

工藝  
印刷  
宗教

佛教

道教

外來教



これは敦煌で發見された  
咸通九年(五五八)の印刷

菩提心者一切法應如是  
解不生法相須菩提兩言法  
法相是名法相  
佛說阿含經云世尊七寶持  
男子等受持讀誦為人演說其  
福無量阿含經云世尊七寶持  
福無量阿含經云世尊七寶持  
一切有為法如夢幻泡影如露  
如電應作如是觀  
佛說走經已長老須菩提及諸  
菩薩摩訶薩世尊天人所共  
皆大歡喜信受奉行

唐の代木の版 (七四圖)

れを新らしく翻譯した。

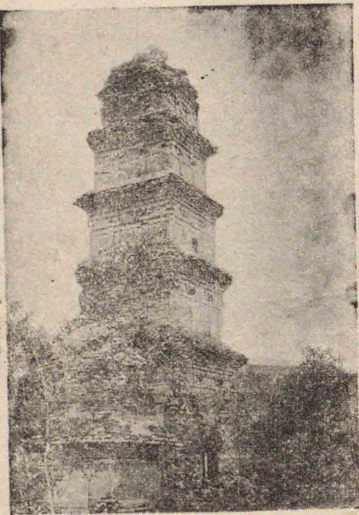
唐室の保護によつて榮えた。その他、諸種の外來教が行はれた。

道教も

多くの經典を持ち歸つてこ

傳來したものも多い。我が正倉院の御物の中には、立派な唐の工藝品もある。また、木版印刷も行はれるに至つた。

南北朝の時、流行した佛教は、唐代に入つて、更に盛んとなり、高僧も多く出たが、中にも、玄奘や義浄は、遠く印度に旅行し、



塔墓の非支 (八四圖)

陝西省長安縣興教寺にある。





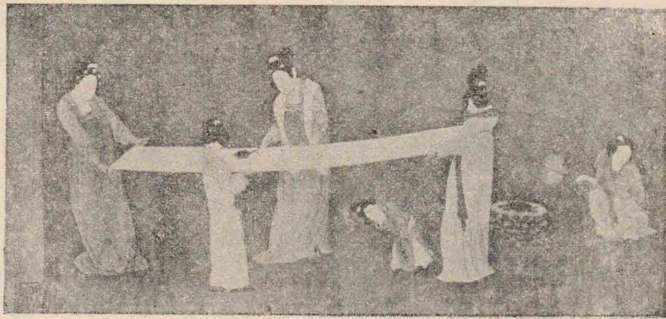
碑國中行流教景秦大 (九四圖)

陝西省長安縣にある。

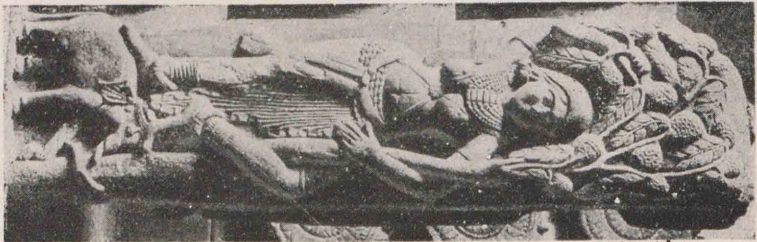
ペルシヤの拜火教なる祆教(Zarathustraの教)、キリスト教の一派なる景教(Nestoriusの教)が傳はり、更に祆教にキリスト教や佛教を加味したマニ教(Maniの教)や、アラビヤの回教(Mahometの教)も東流した。

唐代婦人の風俗は、文化と共に、華やかとなり、周囲の國々に影響を及ぼした。年中行事も、多くこの時代に完成した。

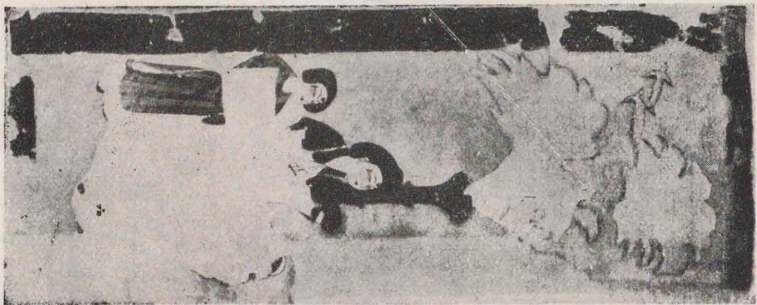
唐代婦人の風俗



俗風の代唐 (〇五圖)



(3)



(2)



(1)

(1) 奈良、正倉院の御物なる「鳥毛立女屏風」繪の一つで、唐代に最もよく行はれた樹下美人形式の圖である。

(2) 大正四年、英國のスタイン氏が、中央アジアで發見した樹下美人圖の一つである。

(3) 印度に於て見出される浮彫で、樹下美人圖のもととなつたと思はれる一形式である。

かくの如く、(1)は、我が國にあるもの、(2)は、中央アジアから出たもので、いづれも、唐代の風俗をあらはしてゐるが、樹下に美人を配してゐるのは、(3)の如く、印度が、もとのやうである。

(二) 唐の文化と我が國



(一五圖) 唐城(今西安)の婦人(唐の俗風)の装束(唐の俗風)の注意(唐の俗風)の注意(唐の俗風)の注意

近世支那の婦人の奇習なる纏足の風も、この時代から起つたといふ。

奈良時代から、平安時代の初にかけて、我が國の文化は、唐の文化の影響を受け、

各方面とも、長足の進歩を遂げた。この點、明治時代に、西洋文化を取入れたのと、似たところがある。しかもこの間に、我れ等の祖先は、努めて國風の美點を失はないやうに、注意した事を忘れてはならぬ。

② 總括

上古期に於いて、興起したる漢族は、中古期(前漢(前190-106)後漢(106-220))に入つて、大なる發展を遂げた。秦漢と隋唐とは、これを代表する。中間の六朝は、一時、北狄に乗せられたが、未だ大勢は、漢族の手中にあつた。實にこの期は、漢族優勢時代である。文化の上より見れば、佛教東流時代であつた。この時代、我れ等の祖先は、漢族と接觸し、その最も優秀な文化を吸収して、國家とし

漢族優勢時代

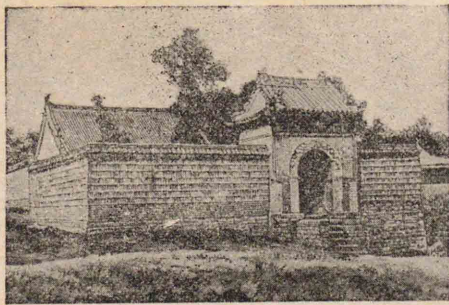
ての實力を養つた。唐末、公の交通を止めてから、我が國の文化は、大いに日本的な色彩を發揮した。その頃、支那では既に唐が亡んで、五代を経て、宋となつてゐた。



### ① 五代・宋時代

世界的な唐の華やかさから、國民的な宋の清新さに移る過渡期が、五代五十餘年の混亂の世である。中央では、後梁を始め、五たび王朝を變へ、地方では、武人が跋扈して、國內は分裂した。

この時、趙匡胤が衆に推されて、開封にて、帝位に即いた。これが、宋の太祖である。五代の諸國を全く征服して、天下を統一したのは、



(三五圖) 宋の太祖の廟(河南洛陽縣にあり)

### (一) 五代の世

### (二) 宋の統一

### (三) 遼の強盛 契丹

### 渤海の滅亡

### 宋・遼の關係

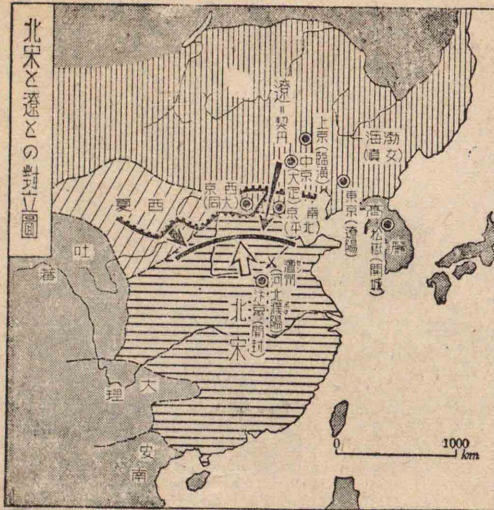


(四五圖) 契丹人の風俗

太宗の時である。宋は、武人の跋扈する弊に懲りて、權力を中央に集め、平和を旨としたが、却つて地方の軍備が忽になり、南方の安南は獨立し、北方異族の侵略を招いた。

初頃、今の遼河の上流に、契丹(蒙古族)の種族が起り、西は、内外蒙古を従へ、東は、建國以來二百餘年續いた渤海國を滅ぼし、南は、北支那の一部を取り、五代の末頃、國を遼と號した。

かくて北方の遼と、南方の宋とは、相對立したが、宋は遼のため壓



(六一圖地)

高麗と遼

迫された。

（頁六）<sup>(10)</sup> さきに朝鮮半島を統一した新羅は、五代の頃、王建の建てた高麗

に滅ぼされ、その高麗は、宋と好を通じたので、

遼は、伐つてこの國を降した。この頃、遼の勢

は、東西に振ひ、その名は、歐洲にまで響いた。

今も露人など、支那をキタイと呼んでゐる。

北方から遼に威壓されてゐた宋は、西北か

ら、西夏に脅かされた。

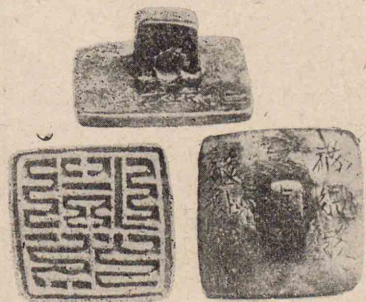
西夏は、チベット族の國で、特別の文字

を有し、相當文化も開けてゐた。

年少氣鋭な神宗が立つと、國初以來、

遼、西夏等から受けた屈辱を雪がんと

欲し、王安石を擧げて、富國強兵の諸新



西夏の官印（五五圖）



西夏の時代畫（六五圖）

（四）宋の改革と統一

神宗と王安石の新政

新法・舊法兩派の争

（宣仁太后）



王安石の像（七五圖）

法を行はしめた。然るに歐陽脩、司馬光等は、舊法を主張して、これに反對した。

神宗の母の宣仁太后は、すぐれた婦人で、女中堯舜と崇められてゐた。その下に用ゐられた司馬光が、幼時、大きな水甕の中に落ちた友を、甕

を割つて救ひ出した話は、有名である。

かくて、新舊兩派の争は、三十餘年も續き、ために政務は振はず、國力は益、衰へた。

時に、遼も、民心漸く柔弱となり、そこで新しく興つたのが、鞞鞫の

後といふ女眞である。その長アクダは、都

を會寧に定め、國を金と號した。これを知

つた宋は、金と同盟して遼に當らんとした

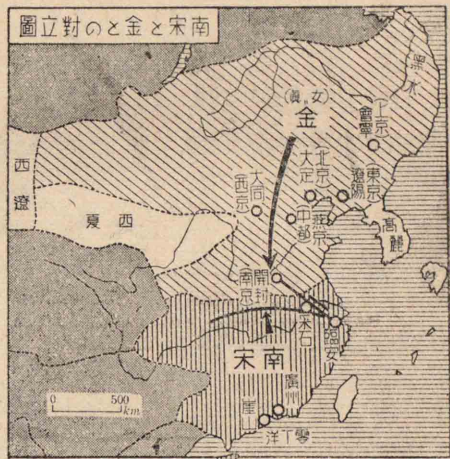
が、金は獨り遼を攻めて、遂にこれを滅ぼし



女眞人の風俗（八五圖）

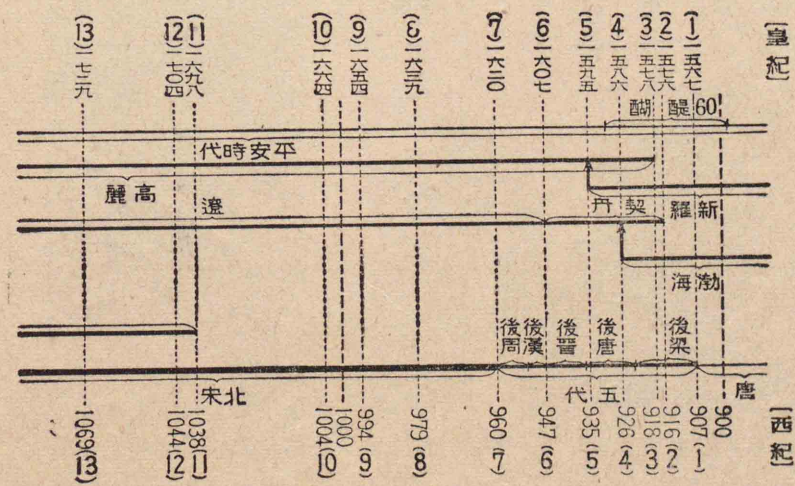
（五）金の興起  
女眞  
金の建國  
遼の滅亡

(六) 宋の南渡  
金の南侵



やがて、金は、更に南下して、宋を侵し、都の開封を陥れ、徽宗、欽宗以下、多數の皇族・大官を捕へて、北に還つた。そこで、高宗が即位し、金の鋭鋒を避けて、江南に逃れ、臨安を以て、假の都

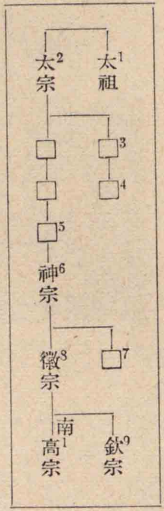
た。さて、遼の對立は、今や宋・金の對立に轉じた。



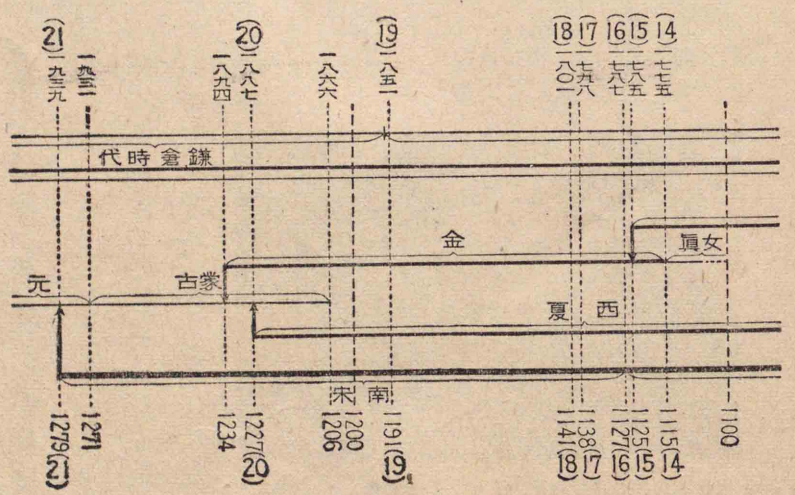
南宋

宋・金の和議

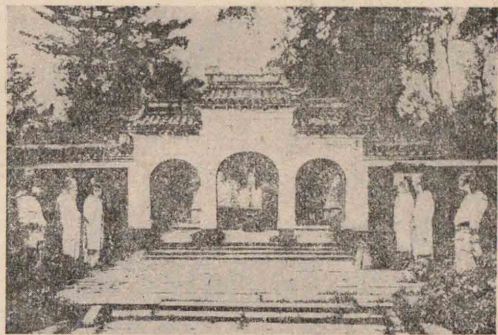
とした。欽宗までを北宋、高宗から南宋といふ。かくて北支那は、全く金の領土となつたが、南支那は、宋の南渡によつて、大いに開けた。



國家の體面を重んずる學者や、岳飛の如き軍人の間には、金に對して、飽くまで主戦を唱へるものがあったが、和議を望んでゐた高宗は、秦檜の説を容れ、最も不利なる條件で、金と和した。これによつて、宋は、金に

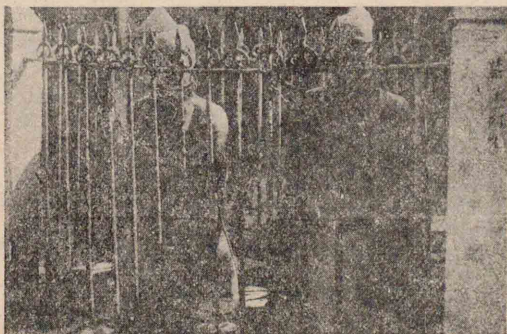


岳飛



（るあに縣杭省江浙）墓の飛岳（九五圖）

檜を罵つてゐる。幕末の志士橋本左内（圖五）の如きは、岳飛を景慕するのあまり、自ら景岳と號した武の方面では、振はなかつた宋も、文の方面では、見るべきものが多い。



（るあに前の墓の飛岳）像石の妻夫檜秦（〇六圖）

對して臣と稱し、毎年多額の貢物を納めることを約した。

岳飛は、一意國威の恢復を念とし、大小數十戰一度も敗れたことがなかつた。極力、和議に反對したので、秦檜のために殺された時、その背には「盡忠報國」の四字が、入墨（イレス）されてあつた。世人は、今に至るも岳飛を惜しみ、秦檜（アイン）を罵つてゐる。

（七）宋の文化

儒學

佛教の感化

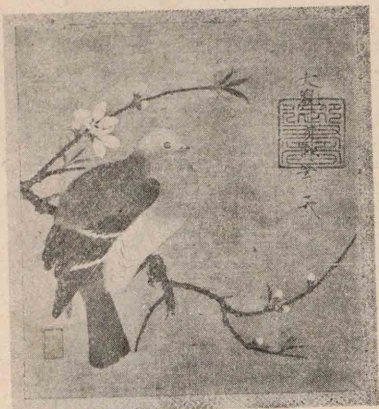
文學

宗教  
禪宗の流行

宋の文化は、唐代に見られぬ自由清新の趣（オモムキ）があらはれ、著しく國民的となり、その社會は、頗る近代風（フウ）になつた。

漢・唐の訓詁學に反し、宋代の儒學は、佛教の感化を受けて、經書の哲理を研究した。北宋の二程子（テイ）、南宋の朱熹（キ）、最も名高く、これを宋學（ソウガク）又は程・朱の學といひ、儒學の正統として、大に行はれた。

文學も、また盛んで、特に議論文に勝れ、北宋には、歐陽脩、蘇軾（ソウキツ）等が出た。世に謂はゆる（イハレ）唐宋八大家の六人までは、宋人である。



畫の宗徽（一六圖）



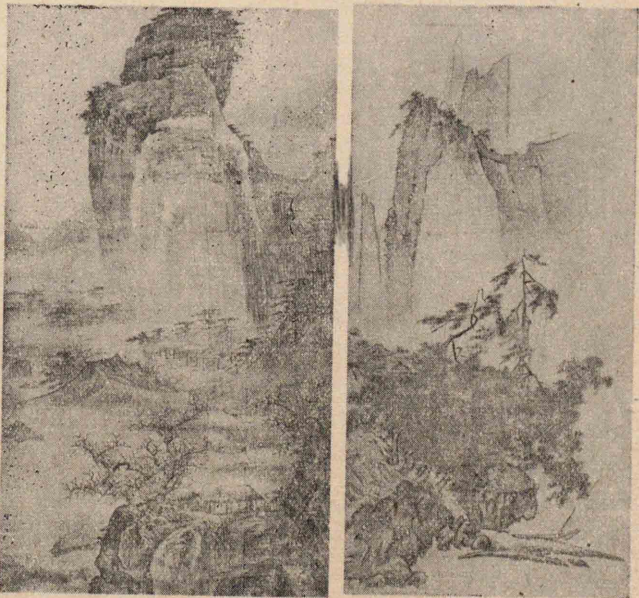
畫の麟公李（二六圖）

佛教の中、禪宗は、最も廣く流行し、儒學に影響した外、その感化は、藝術にも及んだ。

藝術  
繪畫

一般に、道教も行はれた。  
繪畫は、朝廷の奨励で、長足  
に<sup>(頁六)</sup>進歩し、徽宗の如き、頗る花  
鳥畫に秀でた。<sup>(圖六)</sup>北宋では、李  
公麟の人物畫、米芾の山水畫、  
南宋では、馬遠、夏珪の山水畫  
が名高い。<sup>(圖五)</sup>

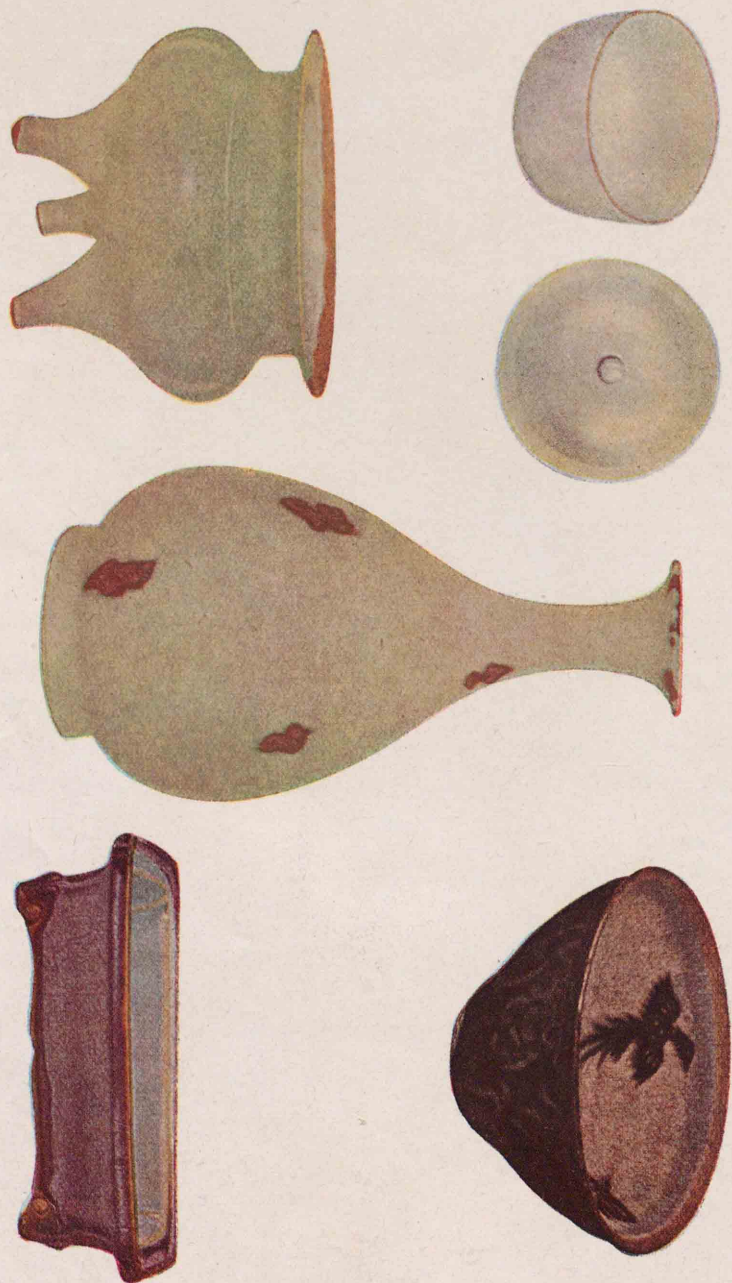
印刷  
木版印刷術は、大いに進み、  
多くの書物が、出版されて、文  
化の普及を促した。<sup>(圖五)</sup>北宋の  
中頃、畢昇は、西洋より四百年  
ほど早く、活版印刷術を發明した。  
達した。<sup>(頁一〇)</sup>



夏珪の畫 (四六圖)

馬遠の畫 (三六圖)

陶磁器の製法も、また頗る發  
達した。<sup>(圖五)</sup>



宋 代 陶 磁 器 (五六圖)

經濟  
貨幣經濟  
南海貿易

(八) 宋代の文  
化と我が  
國

唐の時代には、陶磁器の種類も少く、その産額も乏しかったが、宋の時代になると、種類も産額も共に著しく増大して、海外にまで輸出されるに至つた。さうした宋代の陶磁器の中には、極めて立派なものもある。こゝに示せるは、現今いづれも西洋に傳はつてゐるものゝ中から、五種を選んで擧げたのであるが、これらを以て見ても、自由清新の趣ある宋代文化の一面が、浮び出てゐるではなからうか。

商業貿易は、盛んとなり、紙幣や銅錢が多くつくられた。殊に南海貿易は、大いに開け、陶磁器・絹・銅錢などが輸出され、香料・象牙・藥材・寶石などが輸入された。南海貿易の發達に伴ひ、航海術も開け、造船業も進んだ。(頁三八七) 羅針盤が、航海に使用されたのは、西洋よりも百年近く早く、北宋の末頃からである。

日支の國交は、唐末から絶えたが、僧侶・商人の往來は、依然として行はれ、宋代の文化は、各方面とも、我が國に影響するところ、大であつた。(頁四) 程朱の

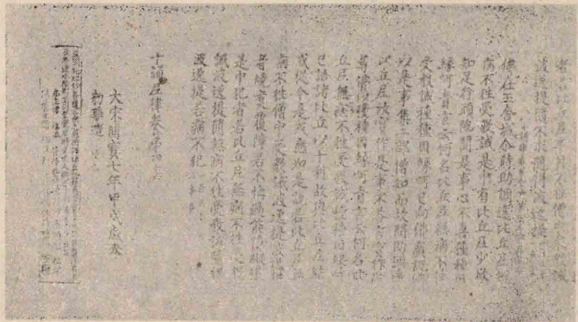


畫版の代時宋南 (六六圖)  
(昭班は目入四、君昭王は目入二りよ右)  
(〇三頁) (三二頁)

學は、江戸時代に行はれ、我が尊王思想を培ひ、(頁五) 唐宋八大家文讀本は、司馬光の資治通鑑等と共に、一般に愛讀された。

禪宗は、鎌倉時代の初入(頁五)





宋 版 大 藏 經 (七六圖)

宋した榮西、道元によつて傳へられ、我が武士道に偉大な感化を與へ、室町時代の雪舟、狩野元信など、宋の畫風を學んで、一代の畫聖となつた。榮西は、宋より茶の種子を持ち歸り、茶道、これより起り、道元に從つて入宋した加藤景正は、陶磁器の法を傳へて、瀬戸焼の祖となつた。宋の銅錢は、我が國でも用ゐられた。それと共に、我が國で發達した獨特の文化が、彼の地に逆輸入せられたものもあり、我が入宋僧で、彼の地にて、我が國の立派さを誇つてゐたものもあつた。

宋の文化が、我が國に及ぼした影響は、宋が亡んでから後にあらはれた。而してこの宋を亡ぼしたのは、實に塞外民族の蒙古である。

## 2 元の時代

### (一) 成吉思汗の興起

成吉思汗の即位  
成吉思汗の西征

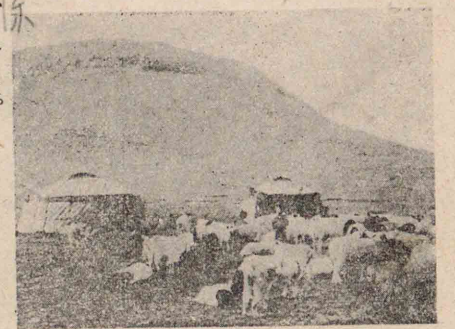
(成吉思汗の母)



像の汗思吉成(九六圖)

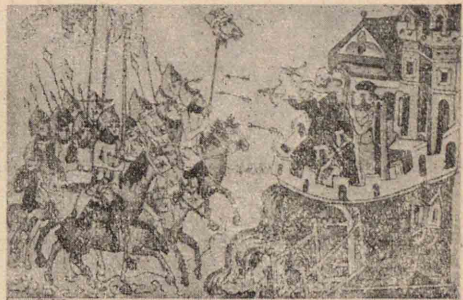
蒙古族は、今の外蒙古の東部に遊牧し、遼金に屬してゐたが、宋の末頃、部長に鐵木眞が出るや、内外蒙古の諸部を服し、推されて君主となり、成吉思汗と號した。蒙古の太祖、これである。彼は、中央アジアより印度北部を略し、別軍を南露に侵入させ、自らは東歸して、西夏を滅ぼし、更に金を伐たうとしたが、中途にして仆れた。

成吉思汗の偉大となつたのは、その母ユゲレニエゲの感化によるところ大であつた。寡婦となつた彼の女は、子供達の教育に努め、且つ自ら部民を率ゐて、武器を取り、外敵を退けた。



景現の畜生牧遊古蒙外 (八六圖)

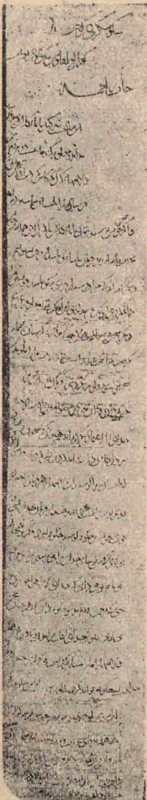
(二) 太宗・憲宗の外征  
太宗（オゴタイ）  
金の滅亡  
拔都の西征



○七圖 ツバの軍のツグー城に迫る

都は、獨りサライに留まつて、キブチャク汗國を建てた。これより二百四十年の間、露國は、蒙古人の支配する所となつた。

2 太宗が諸王諸將の聚會で、選ばれて大汗となるや、南宋と同盟して、金を夾撃した。金は、興起より、百二十年にして滅んだ。翌年、都を外蒙古のカラコルムに建て、次で拔都をして、西の方、歐洲諸國を征伐させた。蒙古軍の殺掠と強暴とは、到る處、歐洲人を怖れしめ、その影響は、西の涯なる英國にまで及んだ。たまたま太宗死去のため、西征の軍を還したが、拔都は、獨りサライに留まつて、キブチャク汗國を建てた。これより



○一七圖 定宗の宗書

1246年、ローマ法王インノセント四世に送れるもの。右より左に横書せるベルシャ文である。蒙古に服従するは、天の命であるから、早く降服せよとすめたる手紙。

憲宗（マング）  
忽必烈の南征

フラグの西征

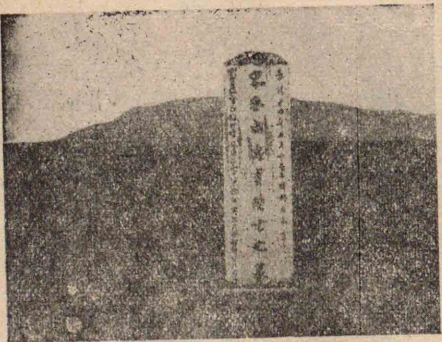


○二七圖 忽必烈

3 定宗を経て、憲宗が立つや、忽必烈をして、南方の大理を経略させた。こは、雲南のタイ族の建てた唐の南詔の後で、宋代から大理と稱したが、蒙古に滅ぼされた後、タイ族は、南方でシャム國を建てた。憲宗は、大理

(三) 宋の滅亡  
世祖（忽必烈）の即位  
宋の滅亡

征伐の翌年、フラグをして、西方を征伐させ、イル汗國を建てしめた。最後に残つた宋を、憲宗親ら征伐に行つて、陣中に病死した。そこで、世祖が大汗となり、都を大都に定め、國を元と號し、大軍を發して、宋を攻めた。宋の忠臣文天祥等は、勤王の兵を募つて奮戦したが、臨安は陥り、後三年、陸秀夫は、崖山の海戦に、幼帝を負うて海に投じたので、南



○三七圖 陸秀夫の墓

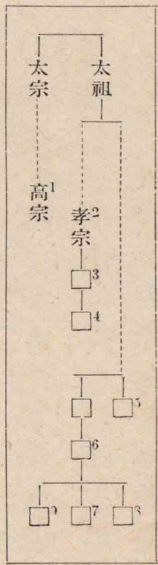
崖山 廣東省

廣東省新會縣崖山にある。

(元の世祖の皇后)

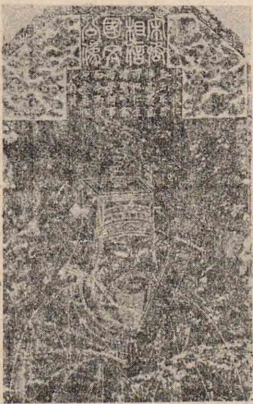
宋も遂に全滅した。

世祖の皇后昭睿順正皇后は、敵の宋をもよくいたはつたほど、心のやさしい蒙古婦人であつた。世祖が外に出でて、勇ましく活動できたのも、皇后のゆかしい婦徳によるところ多かつた。



(七圖系) 宋 南

かくて宋は、南北を通じ、約三百年続いたが、こゝに至つて、支那全土は、始めて



像の祥天文 (四七圖)

塞外民族の手に歸した。

顧れば、宋は、屢、異族の侵入を受けて、國威が揚らなかつたけれど、尊王愛國の義士は決して少くなかつた。文天祥の如き、まさにその一人である。元軍は、彼の人物を惜しみ、降伏せしめようとしたが、到底、聞かないので、これを大都の獄に送り、

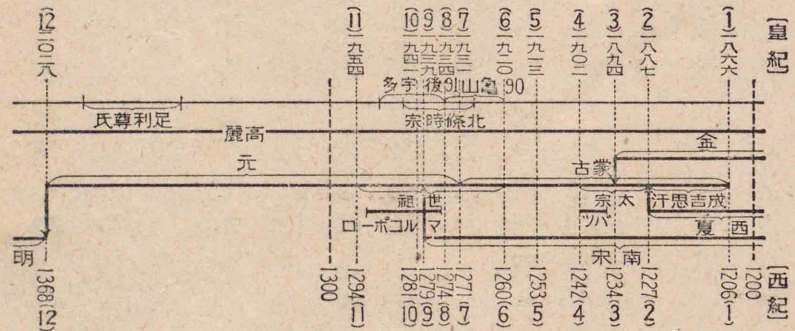
文天祥

遂に殺した。時に年四十七。正氣の歌は、實にその獄中での作である。彼の事蹟は、後世に大なる感化を及ぼし、我が吉田松陰や、藤田東湖も、彼と同じく、それ〴〵、正氣の歌を作つた。

四) 世祖の外 高麗の服屬 日本遠征の失敗

朝鮮半島の高麗は、世祖の時に至つて、全く元に降服した。そこで世祖は、更に日本を従へんとし、高麗を介して、國書を送つて來た。鎌倉幕府の執權北條時宗は、その無禮を怒つて、これを斥けたので、世祖は、高麗にも強制して、出兵を命じ、前後二回、日本遠征の大軍を起した。時に、元軍は、優れた武器と、巧みな戦法とで、我が軍を苦しめたが、我が上下一致の奮戦と、神國の自覺とは、全く元軍を撃滅するこ

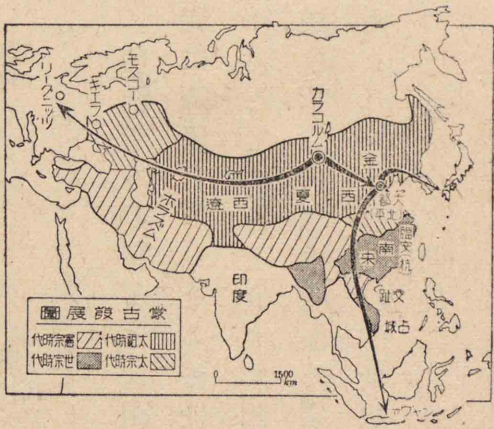
(頁九六三)



南海經略

とを得た。この後も、世祖は、日本侵略の志を翻さなかつたが、遂にそのことなくして止んだ。(頁三七)しかし南海經略に於いては、元の國威を擧げた。

(五) 元の領土



(八一圖地)

かくて蒙古は、太祖が興つてから、約八十年の間に、亞細亞の大部と、歐洲の東部とを含む、世界空前の大帝國を建てた。元の皇帝は、蒙古・滿洲・支那を直接に治め、朝鮮・西藏をも支配した。その他、太祖以來封ぜられた、一族諸王の領土があつた。その中では、四汗國が、最も強盛であつた。(附圖三、頁八三)

(六) 元の衰亡  
相續法の不完  
全と領土の分  
裂

5 4 2  
さきに憲宗が、大汗に選ばれてから、太宗の子孫は、大いに不平で、世祖の時には、遂に海都の亂となつた。これによつて、諸汗國は、皆

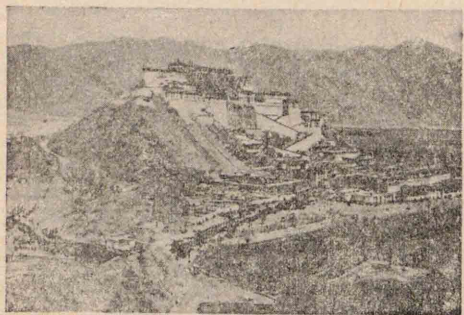
元室より離れて、互に相争ふに至つた。

● 海都の女、アイヤルクは、美しく、女丈夫であつた。自分より勝れたものでなければ、夫と定めないと心に誓ひ、廣く、相手を募つたが、遂に一人の夫をも見出し得なかつたといふ。自分を立てることは、結局自分を不幸にすることを知らなかつた。

(女丈夫アイヤルク)

漢人の不平

ラマの尊信  
財政の困難



山本總の教マラのサツラ (五七圖)

轉じて支那内地を見るに、文武の大官は、おもに蒙古人を用ゐ、色目人よりも下に置かれた漢人に、不平のない筈がなかつた。然るに世祖以來、權臣は專横となり、打續く戰役に、多大の軍費を失ひたる上、代々の皇帝は、西藏から傳はつたラマ教を尊信して、佛事の祈禱に多大の費用を要し、財政は、益々困難になつた。そこで濫に紙幣を出して、これを救はんとし

(圖七、頁六七)

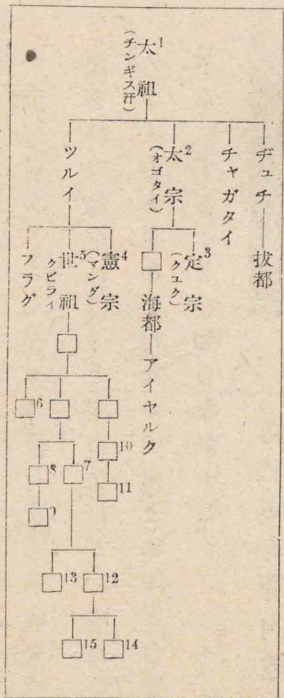
元の滅亡

だが、却つて物價は、愈騰貴し、人民は大いに苦しんだ。こゝに於いて、漢人の不平は爆發し、貧民より起つた朱元璋は、遂に元を伐つて、これを蒙古に逐うた。世祖が、宋を滅ぼしてから、こゝに至る九十年である。



幣紙の代元 (六七圖)

(七)東西の交通の發達



元 (八圖系)

を開き、宿驛を設けて、交通の便利を圖つたので、大帝國となるや、東

政治上、大統一を遂げた元は、文化上、どんな役割をなしたであらうか。  
蒙古は、早くから道路

マルコポーロ

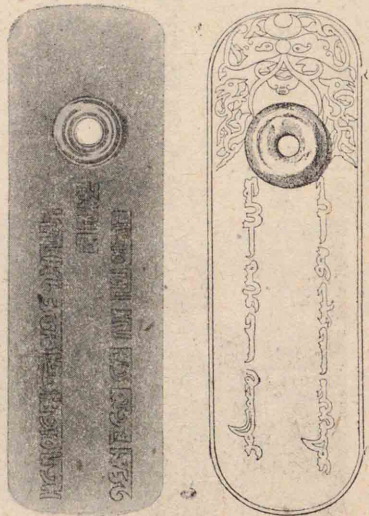


像ローボニコルマ (八七圖)

西の交通は、頗る發達し、使者や、旅行者等の來往も多かつたが、中でも有名なのは、世祖の時、支那に來た、伊國人マルコポーロである。

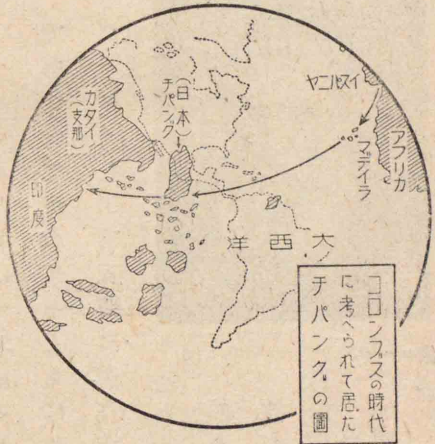
マルコポーロは、十七歳の時、商人であつた父や、叔父とともに、故郷のヴェニスを出で、支那に滞在すること十七年、

頗る世祖の信任を受け、地方の役人にもなつた。彼の名高い「東方見聞録」の中に、我が國は、日本國の支那音を訛つたチバングの名で、黄金國として紹介された。今日西洋人が、ジャパンなどといふのは、このチバングを更に訛つたもので、決



子シ牌の代元 (七七圖)

海上貿易



(九一圖地)

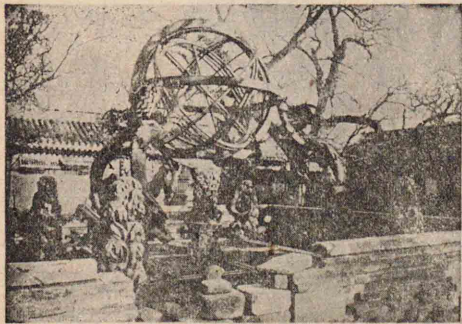
して日本の正しい呼名ではない。この書は、各國語に譯され、廣く讀まれたが、(頁六六)コロンブスも、その愛讀者の一人であつた。彼がアメリカを發見したのは、この黄金國などに達せんとして、偶然に起つた事に過ぎぬ。(頁六六) (地圖五)

海路による交通貿易も、

た盛んで、南支那の諸港には、外國人も多く住み、殊に、當時の泉州は、世界第一の貿易港として知られた。

(八) 元代の文化

かくて、東西の交通が盛んになつた上に、元は、國初から、西域人を重く用ゐたので、彼れ等



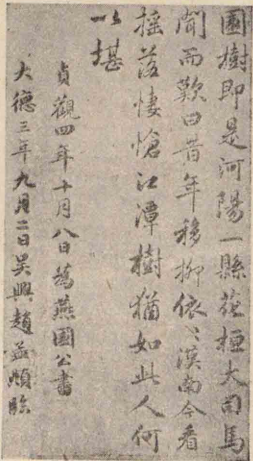
北平觀象臺元の代の大觀測器 (九七圖)

元室と支那文化

の中には、新知識を以て來り仕へるものが多く、従つて、西域の天文・曆法、砲術、醫學等が、支那に傳へられた。またキリスト教や、回教も、この機運に乗じて、支那人の間に弘まつた。(頁七八) (圖七九)

平民文學の發達

元は、世祖以來儒者を用ひ、支那の制度を採つたけれど、心から支那文化を尊敬したのでなかつた。それで、儒學や、詩文には、見るべきものがなかつたが、たゞ平民文學たる小説や、戯曲には、傑作が出た。美術も振つたとはいへないが、元初の趙孟頫等、氣品のある山水畫に



趙孟頫の類書 (八圖)

書畫

(九) 元代の文化と我が國

我が國と元とは、公の國交がなかつたが、元末に、足利尊氏が、天龍寺船を派遣するなど、商人や、僧侶の往來は、依然、盛んであつた。元代の曆は、江戸

時代の貞亨曆（チヤウキョウリキ）の參考となり、水滸傳（スイコデン）の如き小説は、江戸時代の平民文學の手本となるなど、元代文化の影響も少くないが、それは、元の滅亡後のことである。

### ③ 明 時代

元の滅亡前、朱元璋（チユウワン）は、南京に即位して、一代一元の制を創め、洪武（フウフ）と改元した。明の太祖（テイソ）、これである。

（頁六）  
（頁六）  
（頁六）  
洪武帝（フウフ）圖（一）



像の祖太の明（一八圖）

一代一元とは、天子一代に、一つの年號を用ゐることである。我が國では、（頁三）明治以來、この制を採られた。太祖は、内蒙古滿洲等の地を定めて、國威を輝かし、儒學を獎勵し、制度を整へるなど、支那固有の文化の復

### （一）太祖の創業

一代一元

支那文化の復活



畫の望公黃（三八圖）〔左上〕 畫の類孟趙（二八圖）〔右上〕

畫の瓚倪（四八圖）〔下〕

(明の太祖の  
皇后馬氏)

(二) 成祖の纂  
立

内 治  
外 征

活に力<sup>ツド</sup>め、また風紀を厳にし、儉約を實行して、よく民心を収めた。

太祖が、微賤<sup>ヒビシ</sup>から起つて、よく天下を統一したのは、馬皇后の内助の功によるところ多い。學識があつても謙讓<sup>ケンジョウ</sup>を忘れず、尊貴になつても儉素を守り、仁慈深くして、感化、廣く及んだ。

されど、太祖は、死後の安全を圖らんため、多くの功臣を殺し、帝室を固めんとして、子弟を要地に封じたが、これらは、全く失策であつた。

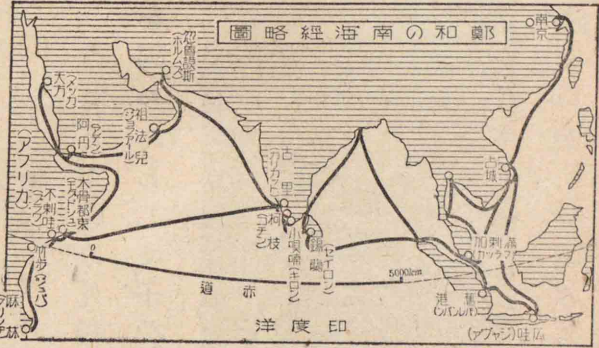


像の祖成の明 (五八圖)

惠<sup>2</sup>帝<sup>クイ</sup>が立つと、諸王の強大を患へて、これを抑<sup>オサ</sup>へたので、燕王<sup>エン</sup>は、兵を今の北京に擧げ、南京に迫つて、帝位を篡<sup>ウツ</sup>つた。成祖<sup>3</sup>、これである。成祖は、都を北京に遷<sup>ウツ</sup>し、學問、教育を勵まし、元<sup>4</sup>の餘勢を征して、外

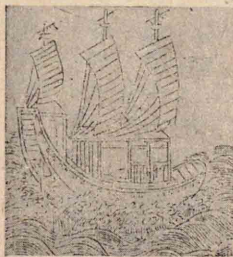


(三) チムール帝國の興起



(〇二圖地)

トルコを破つて、國勢大いに振つた。彼は、内治にも注意し、學問藝術を勵まし、産業の發達を圖り、回教を弘めた。西方が定まるや、その宿志で



(六八圖) 船船の通交海南の代明

蒙古の地を平定し、南方では、安南を伐つて、一時、これを併せ、また宦官の鄭和をして、大船隊を率ゐ、南海諸國を巡航して、明の威光を示さしめた。これより支那人で、南海方面に移住するもの、益、多きを加へた。

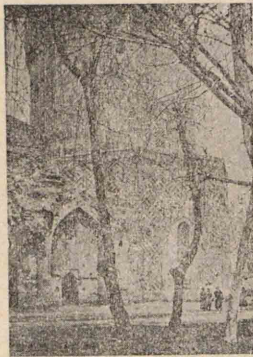
これより先き、西方では、蒙古王族の後なるチムールが、チヤガタイ汗國から起り、サマルカンドを都として、諸汗國を降し、印度の北部を取り、

(四) 明の衰運の内憂

邦人の大陸發展



像のルームチ(七八圖)



墓のルームチ(八八圖)

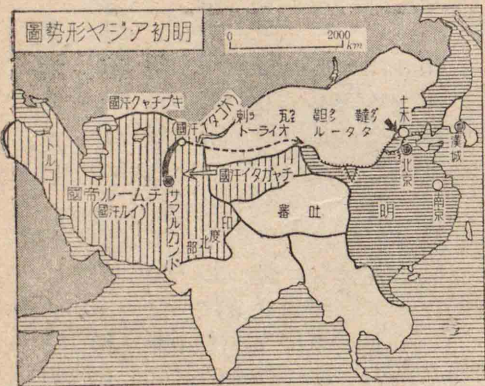
外征は振はず、明の衰運を來した。

これより先き、元寇に刺戟された我が國では、國民精神の昂揚を見ると共に、邦人の海事思想が啓發され、殊に航海に巧みなる

あつた、明征伐の大軍を起したが、その途中で病死した。かくて東西兩雄の決戦は、遂に見るを得ず、その廣大な領土も、忽ち分裂した。

明も、その後、内には、宦官が專横を極め、

外には、北方から蒙古の瓦剌や韃靼が侵入し、内政は紊れ、



(一一二圖地)

(五) 李氏の朝鮮

李成桂

西國の邊民をして、次第に支那の沿岸にまで進出させた。固よりそれは、貿易の利を收めるためで、侵略などの意は、少しもなかつた。然るに悪い支那人が、日本人と伴り、掠奪を事としたので、正當に通商してゐた邦人まで、これらの悪い支那人と混同されたが、その實、明の沿岸を荒したものが、眞の日本人でなかつたことは、明人の記録を見ても、明らかに證せられる。室町幕府や、豪族などが、進んで明との貿易に従事したのは、それが有利であつたためであるが、また、それは同時に、明のためにも、甚だ益があつた。明では日本に關心を持ち、日本研究の書物さへ出るほどであつた。

さきに、元寇に參じた高麗は、内政紊れ、明の初には國力、益衰へた。

高麗の文化で、残つてゐるものに、大藏經や、高麗燒などがある。

この時に當り、李成桂は自立して國を朝鮮と號し、明の太祖の封冊を受け、都を今の京城に定めた。これが、朝鮮の太祖で、李王家の祖である。その後、約百年間は、國內よく治まり、程朱の學が行はれ、

明初の朝鮮と我が國

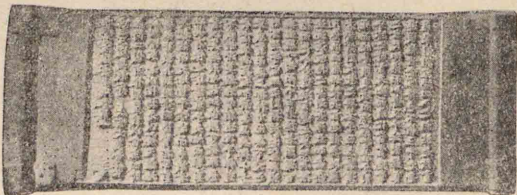
(六) 朝鮮の役

明の大敗

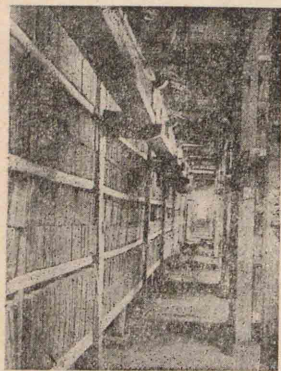
(1) その一部分 (2) 同上板木



(1)



(2)



(〇九圖) 右板八萬六千餘有、杖藏の寺印海、杖藏の寺印海

(九八圖) 高麗の板藏大の經印海、木板のそと部分一の

文化の發達も、目覺しかつた。

國初以來、朝鮮は、明の朝貢國となり、又、我が室町幕府とも交通した。對馬の宗氏や、山口の大内氏は、これと貿易を營んでゐた。

やがて朝鮮では、風紀が頽れ、政治が紊れて、國務、大いに衰へた。



高麗燒 (一九圖)

の時、豊臣秀吉は、朝鮮を介して、明を征せんとしたが、朝鮮が従はないので、兩度、ここに兵を出した。明の神宗は大

萬曆帝

財政の困窮

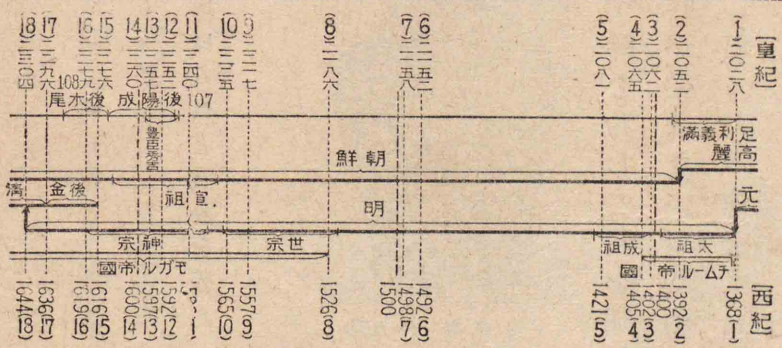
兵を送つて朝鮮を援け、散々に敗北した。我が軍は、この役に、確く掠奪を禁じ、よく朝鮮の民を愛護したので、彼の地を荒したのは、むしろ亂民や、明兵等であつた。明は、このため多くの軍費を失ひ、財政の困難を來し、重税を課したので、民心は、次第に明から離れた。かくて、滿洲人は、東北から起つて、遂に明を滅ぼすに至るのである。

明の滅亡に先だつて、西洋人が、漸く續々と東方

に渡來した。

元代に、東西の交通が開けて、歐人の東洋に來るもの、漸く多く、彼れ等が著はした旅行記の中には、歐人の冒險心をそゝるものがあつ

(七) 印度新航路の發見  
歐人東漸の由來



ヴァスココルダガマ



(二九圖) マガダコスアウ 蹟筆と像の

た。然るに元の領土が分裂し、西アジアにトルコ人が興るや、東西の交通は、海陸共に危険が多くなつた。この頃、西洋では、羅針盤の使用により、航海術が、頗る進んだので、別に新航路を發見して直ちに東洋に至らんとした。 葡人ヴァスココルダガマが、アフリカの南端を廻つて、印度に達したのは、明の中頃である。これより歐人の、海路、東洋に來るものが、多くなり、唐代以來、南海の交通貿易を支配してゐた大食人は、彼れ等のために、その位置を奪はれるに至つた。

その後、葡人は、印度のゴアを根據地とし、更に支那海に出で、澳門を占領し、我が國とも通商し、一時、東洋貿易を獨占した。

西人は、南米を廻つて、太平洋に出で、比律賓のマニラを根據地として、東洋



(二九圖) マガダコスアウ 船乗の

(八) 歐人の東漸  
葡人  
西人

蘭人

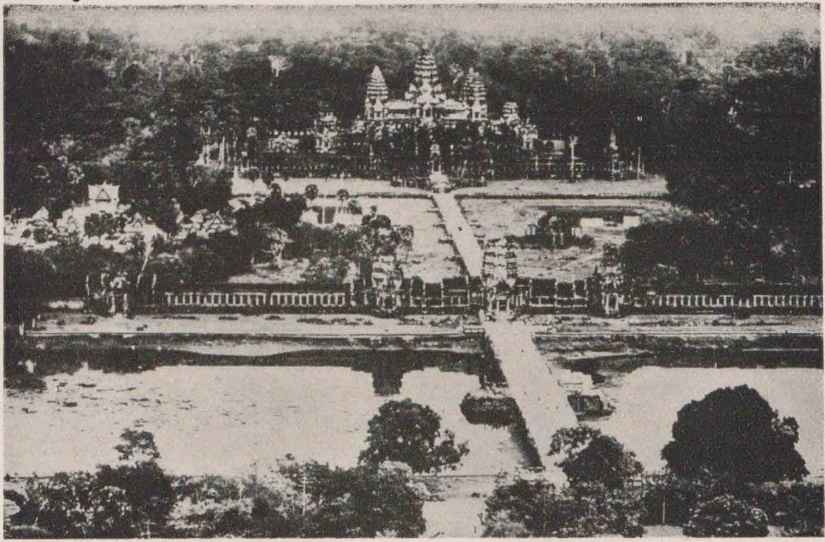
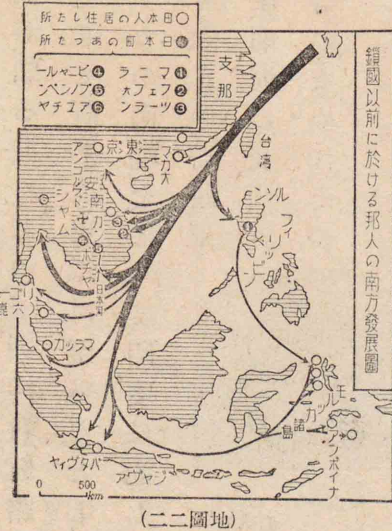
(九) 邦人の南方發展

貿易に従ひ、我が國にも来た。

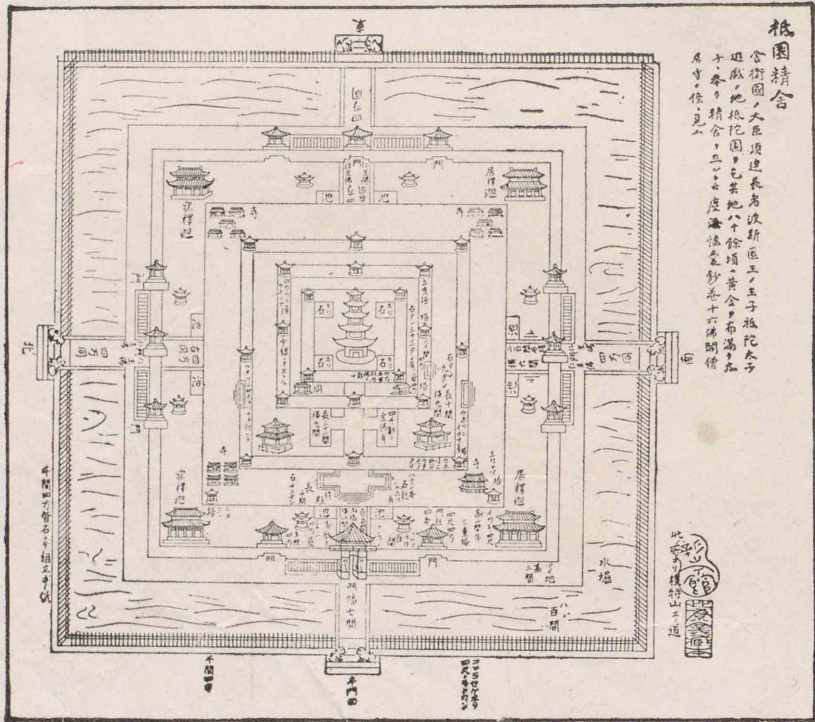
これら兩國人より後れて、東洋に來航した蘭人は、明の神宗の頃、ジャバ(Java) (頁二三) アのバタヴィヤを根據地とし、更に臺灣を取り、我が國とも交通して、久しく東洋貿易の覇權を握つた。(頁八〇)

歐人東漸の初頃、邦人の南進も、盛んであつた。安南・カンボヂヤ・シヤム・ルソンなどには、日本町が起り、その他(頁六七)の地でも、到る處に邦人が進出して、或は貿易に従事し、或は傭兵となつた。かの山田長政が、シヤムで立身したのは、よく人の知るところである。

後に、日本婦人で、シヤムの宰相夫人となつたものも出た。當時の邦人には、カンボヂヤの奥地にあるアンコールワットも、祇園精舎として、參詣されてゐた。かくて南進した邦人は、東漸した歐人に對抗して、南海方面では、



景全るた見りよ(西)面正のトツワ・ルコンア (四九圖)



圖面平の上同るたき畫の人邦に代時川徳 (五九圖)

カンボヂヤ (Cambodia) の奥地、俗にトナハサップ (Tonlé sap) として知られてゐる湖の西北端に近く、湖岸から少し離れた森林の中に、廣い池をめぐらして、夢のやうな石造の宮殿がある。それは今から八百年前、我が國では平安時代の末、支那では宋の中頃、この地方に君臨したスールヤヴァルマン二世 (Suryavarman II) によつて建てられた、アンコールワット (Angkor Vat) の寺院である。(圖九四)は、飛行機上から見た正面全景を示す。その如何に廣大なものであるかは、前面池中の參道を行く人々が、蟻よりも小さく見えるのからでも想像されよう。カンボヂヤが、西隣のシヤム (Siam) と戦つて敗れてからは、建つて間のないこの寺も、いつしか荒れはてた廢寺となつた。元の時代、支那の使者が、これを見たことを記してゐるが、とにかく數百年の間、空しく蝙蝠のねぐらとなつてゐたこの寺が、廣く世に知られ出したのは、西力東漸の波が、この奥地まで押寄せてからのことである。

當時この地方に、大いに發展してゐた我れ等の祖先は、これを見逃す筈がない。時の將軍徳川家光が、長崎で通譯をしてゐた島野兼了(シマノカニヲ)を遣はして、この寺の實測圖を作らしめた。その寫が、(圖九五)に掲げた水戸彰考館所藏の祇園精舎の圖である。印度のそれを知らぬ當時の我が佛教信者たちは、まのあたりこのアンコールワットに接して、これこそ名に聞く祇園精舎と思つたのである。鎖國になる少し前の寛永九年(三九二)には、加藤清正の舊臣森本儀太夫の子の一房等が、この寺に詣でて、佛像四體を獻納した墨書などが、今も廊下の數ある石柱の中の二本の面に残つてゐる。かうした我が國人の足跡は、今日では思ひがけぬ南海の此處彼處に、空しく印せられてゐるのである。

大いに勢力を振つたが、その衰へるに至つたのは、天主教の禁止に伴ふ、我が鎖國のためであつた。

(一〇) 天主教の傳來



(六九圖) 像のルエイヴザスシンラフ

基督教の一派なるジエスイツトの宣教師は、布教の天地を東洋に求め、續々と乗りこんで來た。中にも有名なのは、かのザヴィエルである。彼は、先づ印度に來り、我が國にも布教し、支那に渡らんとして、途中で

歿した。その志をついで、明の神

宗の時、支那に來た伊人マテオリ

ツチは、姓名も利瑪竇と改め、始め

て北京に教會堂を建て、王族大官

の間にも、この教を弘め、徐光啓の

如き、名高き信者をも出した。こ

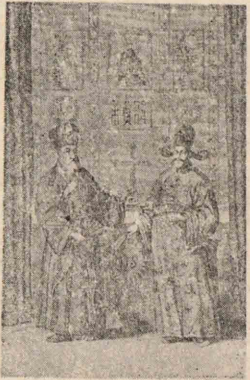


(七九圖) 圖るけ受を禮洗后太王明

マテオリツチ

徐光啓

（徐光啓の女）



ナツリ=オテマ (八九圖)  
(右) 啓光徐と (左)

の派の基督教を、天主教といふ。

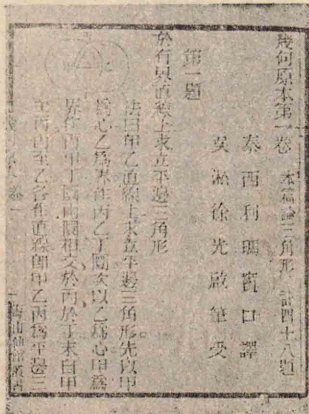
徐光啓の教名をパウロと稱したが、その女も、天主教を信じて、カンデイダと呼ばれた。彼の女は、葉子の收養や、盲人の保護など、慈善事業に一生を捧げ、布教にも力を盡した。

西洋學術の輸入



かく、天主教が興つたのは、宣教師等がよく支那風に順つて布教したのと、彼れ等の有する數學、天文學、地理學等の智識が、支那人の注意を惹いたのところに、よるところ大である。

天主教と、それに伴ふ西洋學術の傳來とは、明末の文化に異彩を添へたが、支那國有の文化は、餘り振はなかつた。



(九九圖)  
本原何幾のナツリ=オテマ

(一) 明代の文化  
儒學  
朱子學



(〇〇一圖)  
書と像の仁守王

陽明學  
文學

出た王守仁は、知行合一の説を唱へた。これを陽明學といひ、朱子學と共に、以後儒學の主流となつた。この時代、詩文の復古が唱へられたが、古人の模倣に止まつた。

藝術



(一〇一圖)  
器磁陶の代明

(二) 明代の文化と我が國

繪畫では、初期に戴進があらはれ、後、沈周、文徵明、董其昌等の大家が出た。工藝では、室町時代以來、禪宗の僧侶や、商人で、明へ渡つたものが多く、その後、江戸時代に流行した朱子學も、この頃、既に輸入せられた。陽明學は、朱子學よ



り後れて、江戸時代に行はれた。明の文人畫を取入れ、一家をなしたのもあり、磁器織物の製法なども、新しく傳へられた。

③ 總括

北狄優勢時代

漢族優勢時代は、北狄興起時代であつたが、今や近古期(卷中三頁)は、實に北狄優勢時代である。(頁五)契丹遼、女真金を経て、蒙古(元)が起るや、漢族の宋を滅ぼして、歐亞に跨る空前の大帝國を建て、東西の交渉を盛んにした。漢族の明が、元に代つても、もはや漢唐の盛時は、望まれなかつた。この期の初頃、武家政治に入つた我が國は、元寇を退け、後には秀吉の出兵となる等、次第に實力を示すに至つた。この期の末頃、東漸した西方は、清代(清)に入つて優勢となるのである。

④

北宋の米芾の山水畫を模したるもの



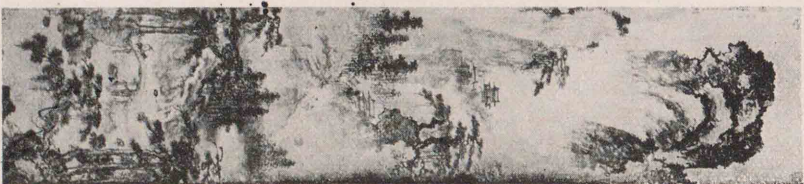
畫の昌其董(五〇一圖)



畫の明徵文(四〇一圖)



畫の周沈(三〇一圖)



畫の進載(二〇一圖)

① 清時代

(一) 滿洲の勃興  
ヌルハチ

清の國號



清の太祖の像 (六〇一圖)

今の滿洲國の地に、唐の時、渤海が興り、宋の代、遼・金が相繼いで起つた。  
その後、元・明の間は、それらの支配を受けて來た。  
(頁四三) (頁五九) (頁六一)

14 明の神宗の頃に至り、努爾哈赤が出て、今の興京(奉天省附屬)に起り、次第に滿洲の諸部を定め、後金國(後金)を建てた。  
これが後金の太祖(太祖)である。太祖は、明と朝鮮との聯合軍を破つて、都を奉天に遷し、更に明に迫つたが、途中で仆れた。  
その子太宗(太宗)は、國號を清(清)と改め、内蒙古を併せ、朝鮮をも屬國視した。  
(頁三三) (頁三三) (頁三三)



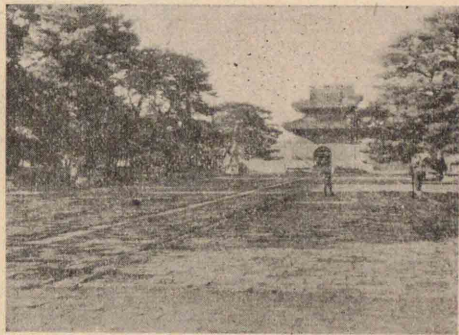
清の太祖の陵 (七〇一圖) 奉天東陵 = 福陵



清初の朝鮮と我が國

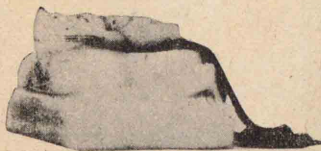
(二) 清の統一

明の滅亡



(八〇一圖)

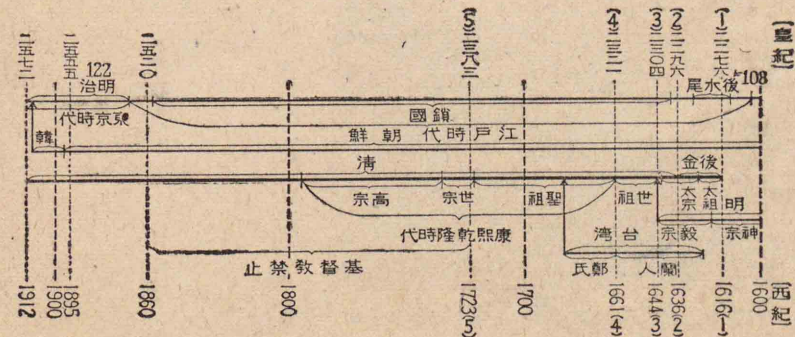
清の太宗の陵 (奉天北陵昭陵)



清の玉璽 (九〇一圖)

徳川家康は、朝鮮との國交を復し、朝鮮は、將軍の代替りに毎に、慶賀使を我に送つた。

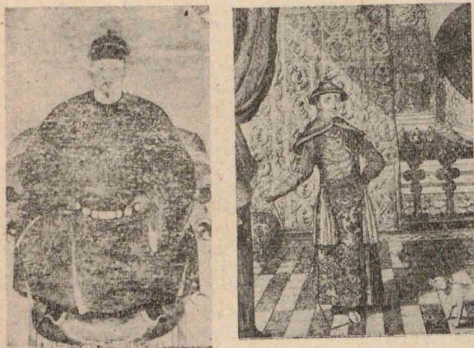
當時、明では、政治が紊れ、飢饉が續いて、賊徒四方に起り、遂に、李自成が、北京を襲ふに至つて、毅宗は、自殺し、明は、約二百七十年で滅んだ。清の世祖は、明



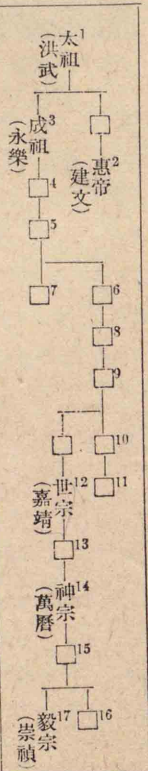
清の統一と對漢人策

(三) 明の遺臣と我が國 鄭成功

の將軍吳三桂を助けて、李自成を討ち、都を北京に遷し、ついで兵を派して、江南の明の諸王を滅ぼした。かくて世祖は、辨髮の命を下し、漢人をして滿洲の風俗に從はしめ、征服者としての威を示したが、同時に、よく漢人を利用し、その統一の業も、明の降將によることが多かつた。



清の世祖の像 (〇一圖) 鄭成功の像 (一一一圖)



明 (九圖系)

明の遺臣中、最も有名なのは、鄭成功である。その父は、明人鄭芝龍で、母は、日本人である。初、廈門に據り、後、臺灣に渡り、蘭人を逐つて、その地を取り、明の恢復を圖つたが、不幸にして早く歿した。

朱舜水

僧隱元

四 清の聖祖と高宗

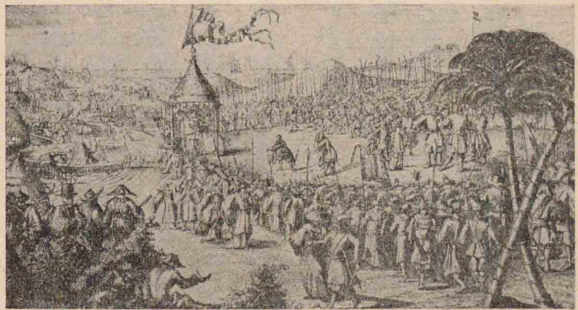
我が國に歸化した明の遺臣中、朱舜水は徳川光圀に招かれて、その師となり、尊王論の發達に貢獻した。また僧隱元は、禪宗の一派なる黄檗宗を我が國に傳へた。

4 聖祖が即位するや、先づ江南に據つた明の降將吳三桂等の叛を平らげ、臺灣の鄭氏を降し、外蒙古、西藏を従へた。その孫高宗の時、天山南北路を定め、更に緬甸、暹羅、安南を朝貢國としたの

て、清の領土は、漢唐を凌ぐに至つた。かくて聖祖より高宗に至る約百三十年間、謂はゆる康熙乾隆時代は、清朝の極盛期で、國家の財政も豊かとな



像の祖聖の清 (三一一圖)



圖る降に功成鄭入ダンヲオの灣臺 (二一一圖)

康熙・乾隆時代

五 清朝の制度

滿漢併用

中央政府

地方制度

八旗兵

六 學問・藝術

圖書の編纂  
考證學

り、屢、租税を軽くして、善政を布き、制度・文物も、大いに整うた。

清は、危険思想を取締ると共に、漢人の心を收めることに努め、官吏の如きも、滿漢兩人を併せ用ゐた。その制度は、多く明の制度によつてゐる。中央政府には、初、内閣があつて、政治を總べたが、世宗の時から、軍機處が置かれ、内閣に代つて、政治を執るやうになつた。又別に、理藩院があつて、蒙古・西藏等の藩部を統轄したが、その政治は、大體、各民族の自治に任せた。地方は、支那本部を十八省とし、滿洲は、三省と

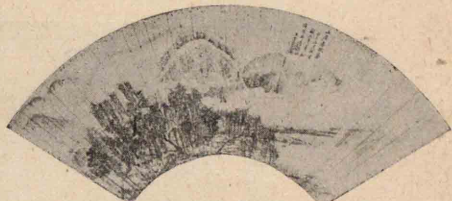


像の宗高の清 (四一一圖)

した。軍隊は、八旗兵が中堅で、主として滿洲人より成り、天子に直屬した。

4 聖祖・高宗は、共に頗る支那の學問・藝術を奨励し、多くの學者を集めて、有益なる書籍を編纂せしめた。清代に起つた學風は、考證學

繪畫



畫の翠王 (五一)



畫の平壽平 (六一圖)

であるが、これは、宋以來の學者が、とかく空論に走るのに對して、古書(頁五九)を研究し、事實に基づいて立論せんとするもので、清初の顧炎武(頁六〇)に始まる。康熙乾隆の全盛期には、經學(頁六一)に閻若璩(頁六二)史學に錢大昕、文字の學に段玉裁等が出た。また、この頃、繪畫には、王翬(頁六三)が、山水畫に長じ、惲壽平(頁六四)が、花鳥畫を大成した外、伊

國人カスチリオーネは、西洋の畫風を輸入した。Castiglione ヲウセイノイ 郎世寧 圖二七

(七) 西洋學と天主教  
天文曆法、數學、地理學、砲術等の西洋學は、アダム・リッシャー(湯若望 Adam Schall 圖二八)や、フェルビースト等(南懷仁 Verbiest 圖二九)、天主教の宣教師によつて、



畫の寧世郎 (七一圖)



像の望若湯 (八一圖)

大いに發達した。これらの宣教師は、西洋の文化を支那に傳へるばかりでなく、支那の文化をも、西洋に紹介した。然るに宣教師間に争ひなどがあつたので、世宗は、遂に基督教(頁六六)

を禁じた。(頁六五)

(八) 清初の文化と我が江戸時代の日清貿易の文化の影響

我が鎖國時代、清の商船は、長崎に來て、貿易したので、清の文化も、自ら我に輸入せられた。我が考證學の流行は、清の影響を受けたものである。長崎に來遊した清の畫家から、文人



像の仁懷南 (九一圖)

畫や、花鳥畫が傳へられた。その他、明末以來の西洋學術が江戸時代の文運に貢獻したことも少なくない。鎖國によつて、我が國が、西力東漸の大勢を防いでゐる時、アジアの各地は、西洋諸國のために侵略されてゐた。

(一) ムガール帝國の盛衰

バベル

アクバル

2 歐・米諸國のアジヤ經略

印度では、唐の中頃から、佛教が衰へて、ヒンヅー教(バラモン教に佛教を加味した教)が流行し、ついで北宋の初頃から、回教徒の侵入が起り、これら兩教徒の争は、それ以後、殆ど絶えなかつた。(頁四七) 明の中頃、バベル(チムール)は、中央アジヤより印度に攻め入り、デリーを都として、ムガール帝國を建てた。バベルの孫 Akbar 大帝は、都をアグラに遷し、多くの善政を行ひ、特にヒンヅー教徒と回教徒との融和を計つたので、國內はよく治まつた。アクバルの曾孫アウランゼブが、ヒンヅー教徒を迫害して以來は、叛亂屢起り、國運次第に衰へた。



(〇二一圖) 圖るす見引を臣使國外がルベバ

(二) 英國の印度經略

クライヴ

莫臥兒帝國の滅亡

英人が、東印度會社を立てたのは、アクバル大帝の時であるが、その極東貿易が失敗に終ると、専ら印度の經略に従ひ、マドラス・カルカッタ等を根據地として、佛人と競争した。初、佛人は、デユブレイトックスのゐる頃、優勢であつたが、英國東印度會社の元書記クライヴの奮戦と、その後、英人の絶えざる經營とにより、印度に於ける英國の勢力を確立して、遂にムガール帝國を滅ぼした。ついで東印度會社は、解散され、印度は、政府の管轄となり、英國王親ら印度の皇帝を兼ねるに至つた。その後、英國は、緬甸を取り、馬來半島



(三二一圖) 像のヴィラク

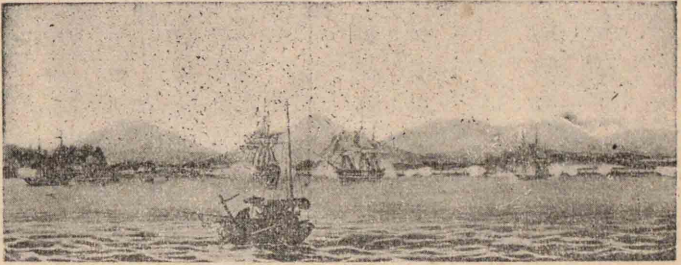


(二二一圖) 像のアゼンラウア



(一一一圖) 像のルバクア

(三) 阿片戰役  
阿片問題



阿片戰役の圖 (四二一圖)

の諸小國を保護國とした。  
英國の東印度會社は、印度の商權を握ると、盛んに印度産の阿片を支那に賣込んだ。阿片は、人體に害があるのみか、支那は、これを買ふために、正貨である巨額の銀が、海外に流出したので、宣宗は、林則徐を廣東に遣はし、英國商人の所有する阿片を焼き棄て、且つ貿易を禁ぜしめた。そこで英國は、貿易保護を名と



西一千八百四十二年八月廿九日英艦 (五二一圖)  
コウンスロ上にて南京條約署名調印の圖

南京條約

し、艦隊を以て南京に迫つたので、清は、遂に屈して、南京條約を結び、

(四) 長髮賊の亂



天德

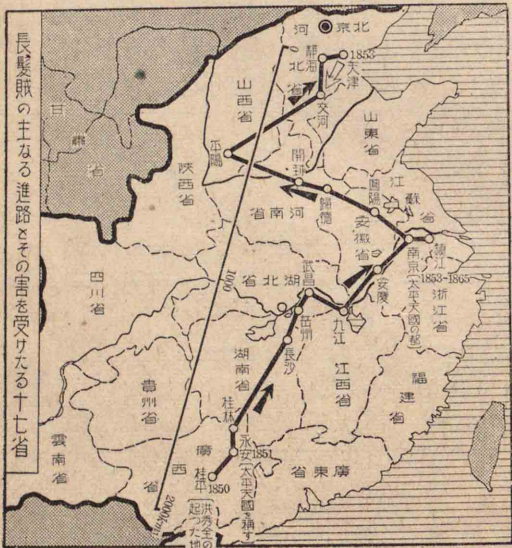
(六一一圖)  
洪秀全の全像

香港を割讓し、上海等の五港を開いた。  
この阿片戰爭で、清朝は、漸く積弱をあらはしたため、漢人の洪秀全は、滿洲人排斥を名として、廣西省で兵を起し、國を太



太平天國の圖 (七二一圖)

平天國と號した。その勢は、甚だ盛んで、たちまち、南京を占領した。これを長髮賊の亂といふ。時に官兵は弱くして、用をなさず、文宗は、天下に詔して、勤王の軍を募つた。曾國藩李鴻章は、義勇



(三二圖地)

長髮賊の主なる進路とその害を受けたる十七省

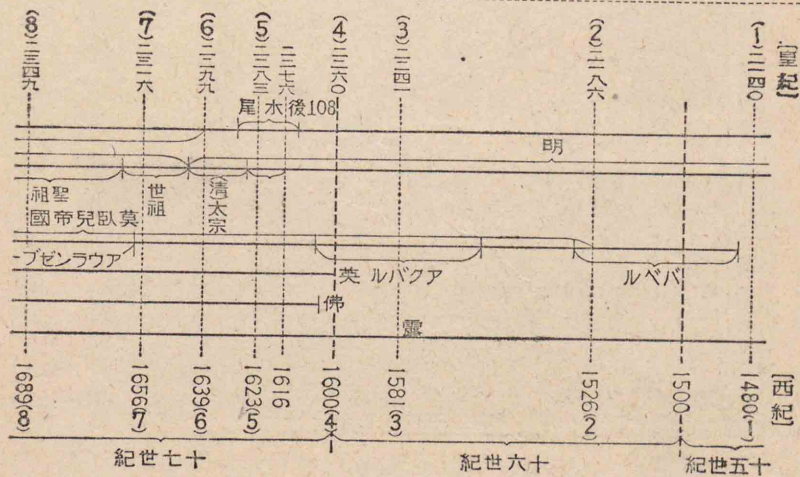
清朝の衰弱

兵を起して、これに應じた。かゝる間に、英佛聯合軍の侵入があり、賊徒の討伐も、<sup>(頁二五)</sup> 文宗は歿し、<sup>(頁二九)</sup> 穆宗が位に即位した。やがて英人ゴルドンは、洋式の訓練を施した軍隊を以て、清朝を援け、曾國藩も、



(八二一圖) ゴルドンの像と筆蹟

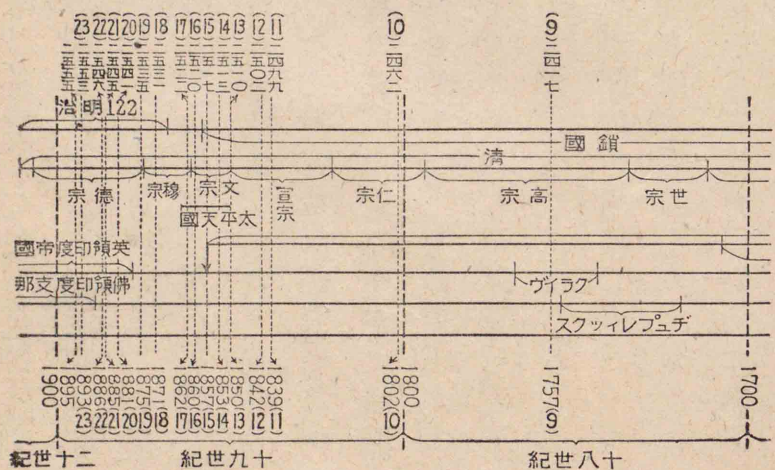
益、振ひ、十七省に及んだ、この動亂も、前後十五年にして、漸く平定された。清は、阿片戦争以來の内亂と外患として、國家の財政は、愈、困難となり、又この叛亂も、主として漢人の手で平定されたの



(五) 英・佛軍の侵入

て、滿洲人たる清朝の權威は、全く地に落ちた。

長髮賊の亂の最中に、廣東の清國官吏が、英國の船籍に登録されてゐる、支那船のアロー號に踏み込み、乗組の支那人を海賊の嫌疑で捕へ、且つ英國人に侮辱を加へた。この頃、佛國の宣教師も、廣西にて清國官吏に殺されたので、英佛二國は、聯合して艦隊を派遣し、先づ廣東を陥れ、ついで、天津を侵し、清國と天津條約を結んだ。然るに清國の官兵が、英佛の軍艦を砲撃したので、聯合軍は、再び天津より北京に迫り、圓



北京條約

明園の離宮を焼き拂つた。文宗は熱河に避難して和を請ひ、謂はゆる北京條約を結び、九龍半島を英國に譲り、外國公使の北京に駐在するを認め、基督教の布教をも許した。かくて英國は、次第に揚子江流域にその勢力を固めた。

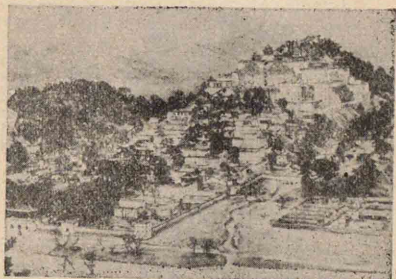
(頁五九)

(頁一六)

(頁二四)

(六) 米國の東洋進出

日本の開國



宮マラの河熱 (九二一圖)

北米合衆國が、東洋へ進出したのは、英佛等より遅かつたが、その支那貿易は、盛大であつて、廣東入港の船數は、英國に次ぎ、やがて清國との間に、通商條約を結んだ。その領土が、太平洋岸に擴まると、その船は、太平洋を越えて來航するに至り、従つて、往來の途にある日本に立寄るを便とし、ペリーを遣はして、我が開國を求めしめた。ついで、英佛聯合軍の支那侵入が起つた時、米國の總領事ハリスは、この形勢を説いて、江戸幕府に迫り、遂に幕府も、安政の假條約に調印

(頁一〇五)

(頁一〇五)

(頁一四)

(頁一四)

(頁一四)

(七) 露國の興起

アジア侵略の發端

して、五港を開くに至つた。

海上よりの西力東漸に對して、陸上でも、露國が、次第に東侵して來た。

露人は、久しく蒙古人の支配を受けて來たが、イヴァン三世の出づるに及び、遂にその支配を脱した。その後、南露に住むコサツク

(頁七〇)

(頁七〇)

(頁七〇)

の酋長エルマクが、ウラル山脈を東に越えて、オビ河畔のシビル地方を占領し、これをイヴァン四世に獻じたのが、そのアジア侵略の發端で、シベリヤの名は、實にこのシビルから起つたのである。

Yernack

Ural

Obi(Ob)

Sibir (附圖)

清の太宗の末、黒龍江の流域を探檢した露人は、アルバジン城を

附圖

Siberia

Altayan

(地圖)

(八) 露國の極東經略

清・露の交渉、ネルチンスクの條約

その北岸に築いた。清の聖祖は、支那本部の平定が終ると、兵を出して北滿洲の露人を攻め、露國とネルチンスク條約を結び、外興安嶺及びアルグン河を以て兩國の境と定めた。

Argun

Netchinsk

(地圖)

(頁一〇四)

露國の南下と江戸幕府

そこで、露人は、轉じてカムチャツカ半島に向ひ、南下して我が北邊に迫つた。江戸幕府が、北門の經營を始めたのは、この形勢に刺

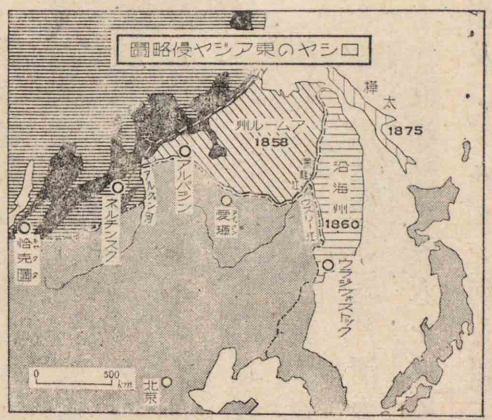
Kamohakka

(地圖)

アイグン條約  
と北京條約

(九) 露國の  
中央細亞  
經路

戦されたためである。やがてムラヴィヨフが、東部シベリヤ總督に任ぜられると、清が、長髮賊の亂や、英佛聯合軍の支那侵入等で苦しんでゐるに乘じ、黒龍江流域を占領し、清に迫つて、アイグン條約を結び、黒龍江以北の地を取り、ついで露國は、英佛軍と清との和議に盡力した報酬として、また北京條約を結び、ウスリー江東の地を割かしめ、その南端にウラジウオストツク港を設けて、極東經營の根據地とした。後、露國は、我が國と交渉して、千島と樺太とを交換した。



(四二圖地)

露國の中央アジア經路は、清の聖祖の頃から始まり、阿片戦争が終つた頃、清と領土を接するに至つた。穆宗の時、天山地方に回教

英・露の衝突

(一〇) 佛國の  
印度支那  
經路

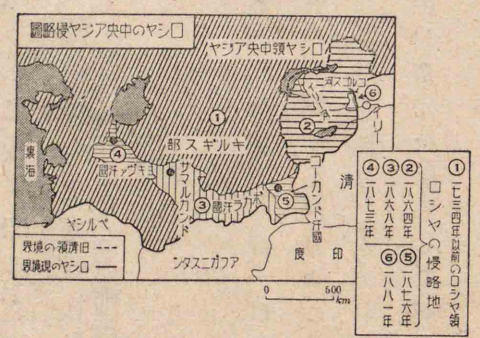
安南の統一

佛國の安南侵略

徒の亂が起るや、露國は、國境鎮撫を名として、伊犁を占領した。その平定後、清は、露軍の退去を要求したが、露が應じないので、清は、遂に伊犁の西境を割いて、局を結んだ。この後、露は、中央アジアより南下せんとし、印度を領有する英國の抗議に會ひ、これと境界を協定して、その南侵を止めた。

佛人は、印度では、英人との競争に敗れたが、印度支那では、着々、經路を進めた。

清の中頃、安南人の阮福映が、佛國宣教師の援により、安南を統一して、今の安南王家を開いたが、その後、宣教師を虐待したといふので、佛國は、交趾支那を取つたのを始め、次でカンボヂヤを保護國とし、更に東京を譲らしめ、安南をも、その保護國にした。安南を屬國

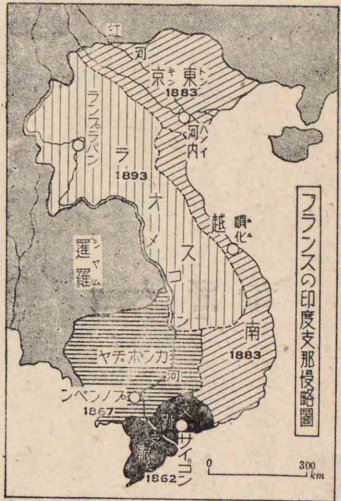


(五二圖地)



清・佛戰爭

暹羅の割地



(六二圖地)

Ⅳ 總括

北狄優勢時代の後を受け、近世期(三三七―三五五頁)は、滿洲族の清が、一時、大いに勢力を振ひ、支那の文化をも榮えしめたが、前時代に興起せる西力は、この亞細亞の各地を侵略し、西力優勢時代を現出した。我が國は、この間に、よく國家の獨立と尊嚴とを保ちつゝ、支那及び西洋の文化を吸収し、やがて優勢となるべき實力を養つてゐた。

視せる清は、忽ちこれに反對して、戰爭に訴へたが、結局、佛國の勢力を承認する外なかつた。勢に乗じて、佛國は、また暹羅から、ラオスの地をも譲らしめ、遂に印度支那に於ける佛國植民地を完成した。

西力優勢時代

Ⅴ

① 中華民國

西洋諸國が、競つて清國を壓迫してゐる時、我が國は、永い鎖國の夢から醒め、また清國に、重大なる影響を及ぼすやうになつた。

(一) 臺灣事件

清が、我と修好條約を結んだ明治四年、臺灣に漂着した我が邊民は、生蕃のために殺された。然るに清は、その責任を回避したので、

琉球問題

明治七年、我が國は、臺灣征伐を行つた。然るに清は、急に異議を唱へたが、我が主張の正しいため、遂に我に償金を出して、局を結んだ。その後、我が國が、琉球に沖繩縣を置くと、清は又異議を唱へるなど、

(二) 朝鮮問題

明治の初頃から、日清の交渉は、とかく圓滿を缺いた。朝鮮では、國王李熙が幼いため、生父大院君が政を攝し、鎖國主義

獨立黨と事大黨

を採つて、屢、我に無禮を加へたが、明治九年、兩國間に修好條約を結び、我は、彼の獨立國たるを認めた。(頁三四)然るに清は、依然、朝鮮を屬國視した。(頁三五)その後、朝鮮では、我に頼つて獨立の實を擧げんとする獨立黨と、大國の清に事へて、國を保たんとする事大黨とが、對立した。

日・清間の天津條約



李鴻章の像とその筆蹟 (一〇三一圖)

明治十七年、朝鮮在留の清將袁世凱は、事大黨を援けて、獨立黨を破り、我が公使館をも焼いた。(頁三六)そこで我が國は、伊藤博文を清國に派遣し、李鴻章と談判して、天津條約を結ばしめ、今後、朝鮮に出兵する必要の起つた時は、互に通知しあふべきを約した。(頁三七)

(三) 日清戦争 東學黨の亂

然るに明治二十七年、朝鮮に東學黨の亂が起ると、清は、我に通知もせず、大兵を半島に送つたので、我が國も、居留民保護のため、出兵した。亂が平いだ後、我が國は、朝鮮の内政改革のため、兩國協力せ

國交斷絶

下關條約

三國干涉と遼東還附

韓國の獨立

(四) 列國の清國壓迫

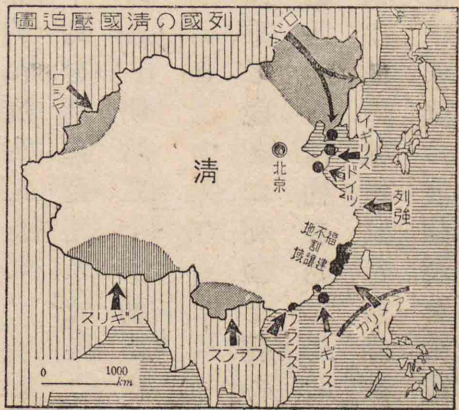
佛國 獨國

んことを提議したが、清は、これを拒絶して、益、半島の兵を増したので、日清の國交、遂に破れ、我が軍は、大いに勝つた。(頁三九)翌年、清は、李鴻章を派して和を請ひ、我が伊藤博文等と、下關條約を結び、(頁四〇)(一)朝鮮の獨立を認め、(頁四一)(二)償金を出し、(頁四二)(三)遼東半島、臺灣、澎湖島を割讓することなどを約した。(頁四三)然るに露國は、日本の遼東領有を喜ばず、佛、獨兩國を誘ひ、極東の平和に害があるとして、この條約に反對したので、我が國は、時局の大勢を察し、涙を吞んで、遼東半島を清に還附した。(頁四四)これ清が、三國の干涉を懇願した結果でもある。明治三十年、朝鮮は、國號を韓と改め、獨立國たる形を整へた。(頁四五)

こゝに於いて、西洋諸國は、清の弱點に乘じ、競うて利權を獲得した。(頁四六)露國は、清國との間に、我を共同の敵とする密約を結んで、北滿を横斷する鐵道の敷設權を得、更に遼東半島の租借及び南滿を横斷する鐵道の敷設權を得た。(頁四七)この前後に、佛國は、廣州灣を、獨國は、

英國  
日本  
米國

膠州灣を、英國は、威海衛を、いづれも租借し、我が國は、自衛上、福建不割讓の條約を結んだ。米國は、列國の對立利權競争には、加はらなかつたが、ハワイ及びフィリッピンを得て後、東洋との關係が密接となり、經濟的に東洋に發展せんとし、支那に於ける門戶開放、機會均等を唱へた。



(七二圖地)

(五) 改革運動  
の失敗  
康有爲  
德宗と西太后

(六) 義和團の  
亂

かくて康有爲を中心とする有志は、日本の維新に則り、自強の策を立つべきを説き、德宗は、この説を容れて、改革を圖つた。然るに西太后や、滿洲人等は多くこれを悦ばず、急に德宗を幽して、西太后が、政を聽くに至り、排外保守の風は、また盛んとなつた。  
翌年、義和團の暴徒起り、これに官兵も加はつて、列國の公使館を

北清事變

(七) 日・露戰  
争

露國の滿洲占  
領と韓國壓迫

日・英同盟  
日・露開戰



(一三一圖)  
像の宗德の清



(二三一圖)  
像の後太西の清

攻撃したので、我が國は、英米露佛と、聯合軍を組織して、北京に迫り、各公使館を救つた。清は、和を列國に請うて、償金を出し、列國の北京駐兵を認めることなどを約した。これが、明治三十三年の北清事變で、我が軍は、聯合軍の中堅として働き、大いに國威を揚げた。

義和團の亂が起ると、露國は、鐵道保護のためと稱し、大兵を極東に送つて、滿洲の要地を占領し、且つ韓國の北境を侵した。我が國は、東洋の平和と、清韓兩國の領土保全とを目的として、英國と同盟を結び、屢、露國と交渉したが、彼は、却つて軍備を充實して、我を脅かした。かくて日露の開戰となり、我が軍は、海陸共に大勝したが、米國大統領ルーズヴェルトの調停で和陸

日露講和條約

ロシア(RUSSIA)人が、支那(CHINA)の木に上つて左手に既に滿洲(MANCHURIA)をもぎ取り、更に右手で朝鮮(KOREA)をもぎ取らうとしてゐる。武裝せる日本(JAPAN)人が、ロシア人に向つて、「その木から下りて来い、それらの林檎は我のものだ」といつてゐる。

清國の中立 韓國併合



JAPAN-"COME DOWN OUT OF THAT TREE! THOSE APPLES BELONG TO ME!"

日露戰爭に關する西洋人の漫畫 (一三三圖)

漫畫である。戦争當時か、もの描いた西洋人は、満洲だけ、朝鮮も、支那の幹から生じてゐるが如き、誤解をしてゐるけれど、とにかくロシアが、滿洲から朝鮮まで取らうとしてゐたことは、西洋人の間にも、明らかに知られてゐたことがわかるであらう。この林檎盗人を追ひ拂つて、東洋の平和を保たうとしたのが、日露戰爭であつた。

生命線たる、この半島が、國として全く自衛力なく、他國によつて侵されん

し、露國は(一)韓國に於ける我が優越權を認め、(二)樺太の南半を割き、(三)遼東半島の租借及び長春以南の鐵道を我に譲つた。清國は露國から滿洲を奪回する元氣が無く、日露戰爭では、中立の態度を採つた。この時、清國は既に滿洲を棄ててゐたのである。

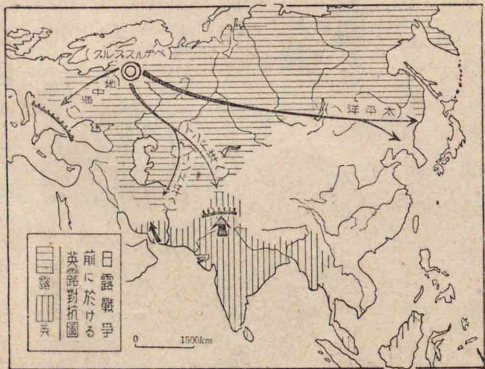
この戦役後、韓國は、我が保護國となり、明治四十三年、遂に我が國に併合された。

(八)清末の改革 憲政採用の決定

宣統帝

としたため、起つたのであつたが、今や強力なる我が國に併合されて、こゝに東洋平和の禍根も絶たれ、かつて大陸文化の棧橋となつた、この半島の民も、こゝに於いて、我が至仁至慈なる萬世一系の皇室の下に、限りなき文明の惠澤に浴するに至つた。

日露戰爭の後、清國では、日本興隆の原因を立憲政治の結果となし、早くこれに倣つて、國運を伸張すべしといふ意見が強くなり、西太后も、憲政採用を決意し、十年以内には、國會を開くことを約した。この年、德宗西太后、共に歿したので、宣統帝が、御年僅かに三歳にして即位し、生父醇親王が、政を攝し、次第に改革を進め、制度、學術、教育など、大いに我が國に倣ふところがあつた。然るに



(八二圖地)

(九) 革命黨の  
興起  
孫文



孫文の像 (圖一三四)

滿洲人、殊に皇族が、政府の要路を占めてゐたので、その改革にも、誠意が乏しく、漢人の心は、全く清朝から離れるやうになつた。

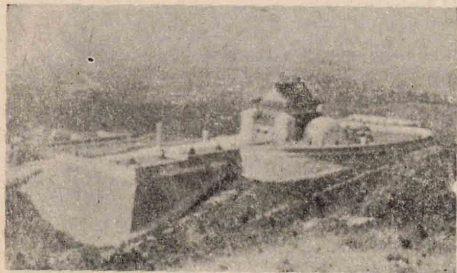
これより先き、孫文は、清朝を倒して、漢人の國家を復興せんと志し、屢、事を擧げんとしたが、悉く失敗して、我が國や、歐・米に亡命した。その間に、各地の

革命の興起

支那人留學生等に、革命思想を鼓吹した。遂に明治四十四年に至り、革命黨は、黎元洪を擁して、兵を武昌に擧げた。その勢甚だ盛んとなり、諸省多くこれに應じた。

(一〇) 中華民  
國の成立

かくて、革命軍は、南京に臨時政府を建て、國を中華民國と稱し、孫文を迎へて、假大總統とした。最初滅滿興漢を叫んだ革命の亂が起ると、清朝



南京に在る孫文の墓(中山陵) (圖一三五)

袁世凱

清の滅亡

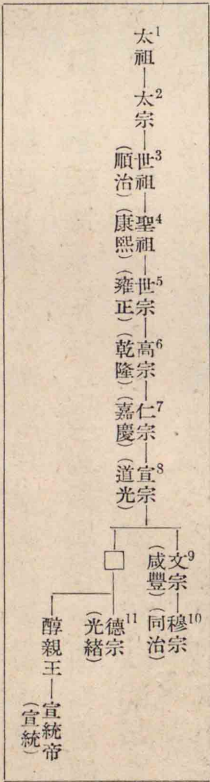


袁世凱の像 (圖一三六)

は頗る狼狽し、漢人袁世凱を起用したが、彼には、清朝を守る誠意なく、革命軍と妥協した。宣統帝は、間もなく退位せられ、彼は、孫文に代つて假大總統となつた。清は、支那に君臨して以來、二百七十年で滅んだ。

この革命は、ただに一朝廷を滅ぼしたのみでなく、支那古來の君主政治を倒して、東洋で最初の共和國を建てたのである。

初滅滿興漢を目標として起つた、この革命も、清朝滅亡の頃には、五族(漢・滿・蒙)共和を唱へるやうになつた。その翌年、袁世凱は、國會から選ばれて、正式の大總統となり、中華民國は、列國の承認を得るに



清 (系圖一〇)

(一) 日・獨  
開戦と日  
支條約  
日・獨開戦

謂はゆる二十  
一ヶ條の條約

(二) 袁世凱  
の失敗

至つた。

翌年、世界大戦が起ると、我が國は、東洋平和のため、獨國に對して宣戦し、膠洲灣を占領し、ついで日支條約を結び、(一)我が國は、山東省に於ける獨國の利權を繼承し、後日、膠洲灣を支那に還附すること、(二)遼東半島の租借期限を延長すること、(三)支那は、我が國の南滿洲・東蒙古に於ける特別の地位及び利益を認めることを約した。その草案から、これを俗に二十一ヶ條の條約といひ、支那は、これを以て國恥となし、排日を煽る材料にした。

これより先き、大總統となつた袁世凱は、その後、孫文の率ゐる國民黨を壓迫して、益、專制政治を行ひ、遂に自ら帝位に登らんとした。そこで、内外の反對にあひ、實現することができずして、彼は、憂憤の中に病死した。それ以來、北方では、共和政治に理解のない軍閥が、私兵を擁して、互に興亡を重ねた。

(三) 清帝の  
復位と南  
北の對立

宣統帝の復位

廣東政府



像の昌世徐 (九三一圖) 像の璋國馮 (八三一圖) 像の洪元黎 (七三一圖)

袁世凱について、大總統となつたのは、黎元洪である。時に、支那では、世界大戦に参加するか否かに就いて、國論の一致を缺いた。政府は、参加を主張し、國會は、反對した。その時、張勳は、黎元洪に迫つて、國會を解散せしめ、ついで兵を率ゐて、北平に入り、宣統帝を復位せしめたが、すぐに失敗した。そこで馮國璋が、代つて大總統の職に就き、獨國に宣戦した。次いで新たに召集された國會は、徐世昌を大總統に推したが、さきに國會の解散された時、南方に避難した多數の議員等は、別に廣東政府を起し、孫文をその大總統としたので、民國內に、今や南北兩

(一四) 山東問題

政府が對立するに至つた。  
大正四年の日支條約に不満を抱ける支那人は、世界大戰後、パリ  
に講和會議が開かれると、この條約の無効を叫び獨國から直接  
に山東の還附を受けようとしたが、成功しなかつた。かくて國內  
には、排日運動が起り、政治家は、己の地位を作る手段として、排日を  
宣傳した。

(一五) 華府會議と九ヶ國條約

大正十年、米國の主唱で、華府會議が開かれ、(一)日英米佛伊は、主要  
海軍力の比率を制限し、(二)日英米佛は、太平洋方面の領土の保全を  
約し、從來の日英同盟を廢棄することとし、(三)九國(日英米佛伊  
那の主權を尊重し、領土を保全すべきこと、及び支那に對し、經濟上  
の優越權を要求しないことなどを約した。この機會に、支那は、我  
が國と協議して、山東問題を解決した。  
北方では、軍閥の争が絶えず、大總統も、度々代つた。  
曹錕が大總

(一六) 國民政府の統一

張作霖

蔣介石

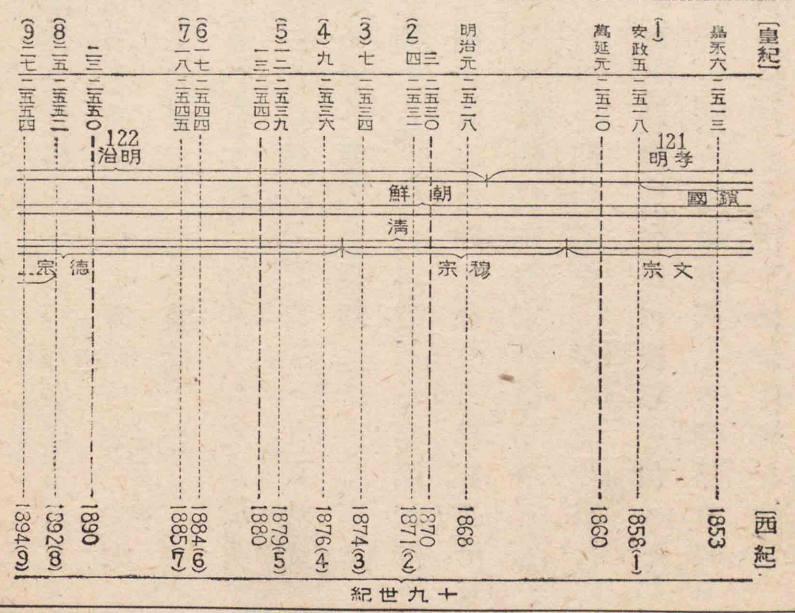


像の錕曹 (〇四一圖) 像の霖作張 四一圖) 像の石介蔣 (二四一圖)

統の時、滿洲を地盤とする張作霖は、これを認めず、自ら北京に入つて、軍政府を立て、大元帥と稱し、ほゞ北支那を支配した。  
南方でも、内訌が續いて起り、孫文は、屢、失脚したが、三民主義(民族・民生)を唱へて、民衆の共鳴を求め、また露國の援助によつて、革命の完成を期した。孫文が歿した年、國民黨は、廣東に國民政府を建て、孫文の參謀長であつた蔣介石は、國民革命軍の總司令として、北伐の行動を開始した。翌年、北伐軍は、南京を占領し、我が居留民に、凌辱を加へた。北伐が進むと、蔣介石は、露國との關係を絶ち、共產黨を排斥して、南京に新政府を建て

國民政府の統

た。濟南に入つた北伐軍は、我が派遣軍と衝突したが、その勢の盛んなため、張作霖は、北京を去つて、奉天に歸らうとした。その途中、列車の爆破に遭うて、横死を遂げ、その子張學良は、我が反對を無視して、國民政府に服從した。こゝに於いて、支那の南北は、略、國民政府に統一されるに至つた。されど、内には、諸勢力の争が絶えず、殊に共產軍の討伐をひかへ、外には、國權恢復に急で、列國と抗争し、相變



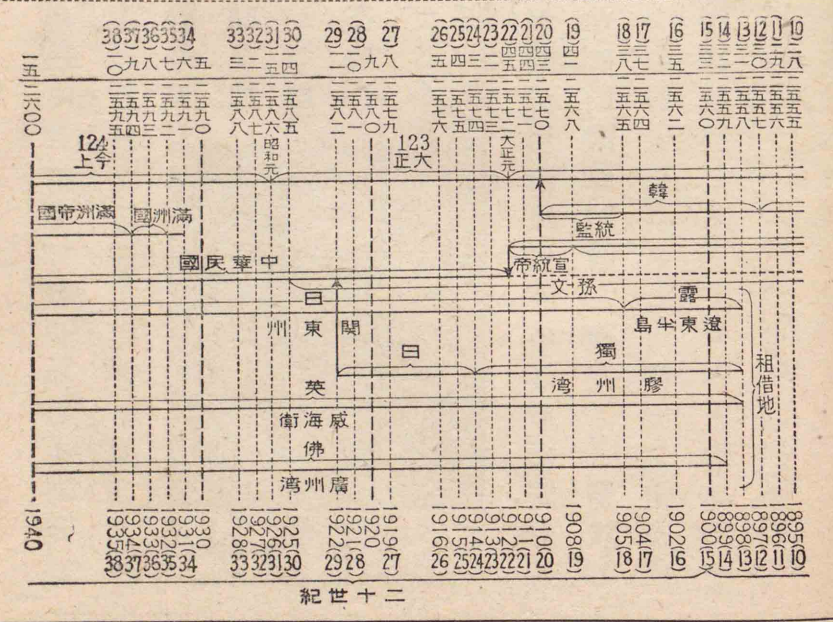
(一) 滿洲帝國建設の由來・理想 滿洲事變

らず不安の状態をつゞけた。而してその最も甚だしかつたのは、滿洲であつた。

2 滿洲帝國

曩に、我が國は、滿洲のため、多大の犠牲を拂つて、露國と戦つたが、その後、更に巨額の資本を投じ、懸命な努力を重ねて、その開發に盡した。然るに張學良は、排日行動を續け、我が正當なる既得の權益を侵害し、遂に彼の軍隊は、昭和六年九月十八日、

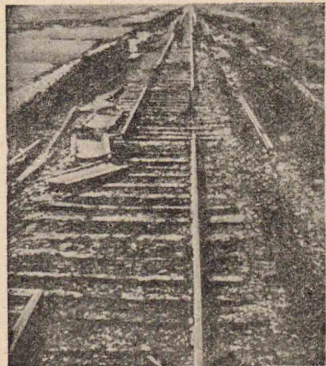
(34) 滿洲建國記念日





上海事變

我が南滿鐵道の線路を爆破した。そこで皇軍は、自衛のために起ち、張氏の兵を滿洲から一掃した。これを滿洲事變といふ。この間、民國は、事實を曲げて國際聯盟に訴へ、また米國を動かして、我が行動を抑へんとしたが、固より成功しなかつた。滿洲事變が起つてから、支那各地の排日運動は、益、激しくなり、上海では、日貨不買を實行し、我が在留民を殺傷するなど、横暴、極まりないので、我が國が、居留民保護のために派遣した海軍陸戦隊は、昭和七年一月、遂に民國の軍隊と衝突して、奮戦し、ついで陸軍が出勤して、全く敵を撃破した。そこで停戦協定が成立すると、同年五月、我が軍は、本國に凱旋した。これが上海事變である。



(三四一圖) 滿洲事變の導火線となつた柳條路附近の破壊された鐵道線路

滿洲國の獨立

滿洲帝國の出現

(二) 我が國との關係



(圖四一) 滿洲國皇帝

多年、張氏父子の虐政と重税とに苦しんだ滿洲の住民は、張氏が没落したので、こゝに獨立國家建設の運動を起し、昭和七年三月一日、中華民國と絶つて、王道政治を理想とし、新たに滿洲國を建て、この地より出た、清の最後の皇帝宣統溥儀氏を執政に推戴し、年號を大同と稱し、國都を長春に築いて、新京と改めた。爾來、着々として、國礎定まり、昭和九年三月一日、衆望の聚るところ、遂に溥儀氏は、帝位に即かせられ、同時に、年號を康德と改め、滿洲帝國は、こゝに輝かしくも、極東の地に出現するに至つた。

我が國は、滿洲國の健全なる發達により、兩國の共存共榮を實現することこそ、東亞の禍根を除き、世界の平和を保つ基であると確信し、列國に率先して、昭和七年九月、この國を承認し、且つ兩國共同

して、新國家の領土及び治安の防衛に當ることを約した。翌年三月、皇軍の援助により、熱河を平定して、滿洲國の領域を確立し、また國內の匪賊を討伐し、諸制度を整へ、財政の基礎を固めるに努めた。かくして新しく生れ出た、この王道樂土の建設のため、我が國は、國策と兩立しない國際聯盟の脱退を始め、有らゆる犠牲を拂つて來た。(頁三五) 昭和九年、我が友邦、滿洲帝國の(頁三五) 成るや、國務總理鄭孝胥は、滿洲



一新生れたる滿洲國と舊軍閥時代の滿洲をと對するボラス (圖一四五)

孝胥



鄭孝胥の像と筆蹟 (圖一四六)

國を代表して、來つて我が國に敬意を表した。同年、我が秩父宮殿下には、天皇陛下の御名代として、滿洲國に赴かせられ、翌十年、櫻咲く四月には、御答禮のため、滿洲國皇帝陛下、親しく本邦に成らせられ、益々、皇室との御親交を重ねさせ給ひ、兩國の親善は彌が上加はつた。

③ 現代の東洋

(一) 支那事變

滿洲事變後、支那は、抗日によつて、國內の統一を期し、屢、排日、侮日の行爲を繰返したが、我は出來るだけ忍んで來た。(頁二六) ところが、我が支那駐屯軍と提携して、北支の治安に任じてゐた支那兵が、昭和十二年七月七日夜半、蘆溝橋附近にて、皇軍を不法射撃したのに端を發し、こゝに支那事變が起つた。(北京西南) 最初、我が國は、現地解決、不擴大方

東亞新秩序

針を採つたのに、反つて支那側の挑戦により、事變は止むを得ず益、擴大し、遂に北支より、中支、南支に及び、更に皇軍の佛印進駐にまで發展した。かくて我が忠勇なる陸海空軍の活躍により、支那沿岸は、全く封鎖され、支那の主都、要地は、悉く占領され、蔣介石の國民政府は、南京より漢口、漢口より重慶へと、次第に奥地に退き、これを援助する敵性道路は、順次に遮斷された。



汪精衛 (七四一圖)

かくて我が國が東亞新秩序建設のため、長期戦の體制を整へ、着、戦果を収めてゐるのに呼應して、重慶を脱出し、和平救國運動に乗出したる汪精衛は、南京を都として新しく中華民國國民政府を立てた。  
(昭和十五年三月)  
この政府こそ、我が新秩序建設を分擔するに足るものと認め、皇紀二千

(二) アジヤ大陸並びに南洋諸島の現状  
大東亞共榮圈

蒙疆

外蒙古

新疆

六百年十一月、我が國は、これと日支基本條約を結んだ。それと同時に、日、滿、支三國は、共同宣言を行ひ、久しく問題になつてゐた滿支の關係を明らかにし、三國が善隣として、東亞新秩序建設のため、緊密に相提携することになつた。

支那事變解決の目標たる東亞新秩序の建設は、即ち日、滿、支は勿論、北方にては蒙疆、南方にては佛印、泰國、蘭印など、東亞大陸より南洋に及ぶ、大東亞共榮圈の確立に外ならないのである。

こゝに蒙疆といふは、さきに滿洲國に加はつた、東部を除く内蒙古に、山西省の北部を加へた地方であつて、昭和十四年、防共協和厚生を目ざし、德王を主席として、張家口に、蒙古聯合自治政府を立て、思吉思汗紀元を採用してゐる。この地、北は外蒙古に接し、西に新疆を控へてゐるが、前者は、清朝滅亡の頃、一時、露國の後援によつて、獨立を宣言し、後、全くソ聯の勢力下に置かれるに至つたし、後者も、

佛印

また殆んど同じ運命に陥りつゝあるので、蒙疆の地は、滿洲と共に、直接防共地區として、大いに意義をもつてゐる。

佛印(佛領印度支那)では、安南人の民族的自覺のため、獨立運動が繰返され

たが、常に佛人によつて制壓され、同地方に於ける邦人の發展も、ま

た著しく妨げられて來たが、支那事變の進展に伴ひ、皇軍の進駐す

るところとなり、遂に我が大東亞共榮圈の一翼となるに至つた。

その西に連る泰國は、もと暹羅(暹羅)と呼んだが、國民的自覺の高まるに

つれ、彼れ等民族の自稱なる今の稱(自由の意)に改め、最初より我が大東亞共

榮圈に好意を寄せてゐた。然るに新興の氣に燃えた泰國は、失地

の回復を志し、佛印との間に紛争を起したので、指導的地位にある

我が國は、兩者の間の困難なる調停に成功し、佛印をして、ラオスの

一部及びカンボヂヤの北部を泰國に割讓(昭和十六年)させた。これによつて、

我が國の威信を世界に示したに拘はらず、當然、共榮圈内に入るべ

泰國

蘭印

くして、未だ入るに至らないのは、蘭印(蘭領東印度)である。これ全くこの

地方が、新秩序建設を妨げつゝある、英米の勢力下にあるため、外

ならぬ。

もと支那の屬領であつた西藏は、清の滅亡後、英國の後援によつて獨立

を唱へたが、今日なほ未解決のまゝ、殘されてゐる。これに隣れる英印(英領印度)

領印度では、日露戦争の頃から、自治と國產尊重とを目的とする排英運動

が起り、ガンジール等の活動があつたが、國民一般の知識の程度低く、回教徒

と印度教徒との不和や、これを利用したる英國の巧みなる政策などのた

め自立を認められるところまでに至つてゐない。

我が南隣の米國領フィリッピンは、昭和十年に至り、自治が認められて、

共和國になることになつた。

要するに現代の東洋には、歐米諸國の重壓下より脱せんとする復興運

動が、日露戦争以後、著しくなつた。それと共に、歐米諸國が、依然、優位を保

(三) 歐米諸國の東洋に於ける最近の活動

英印

たとんと苦心し、活動を續けてゐるのが、現状である。

⑤ 總括

日清戦争から、現今まで、明治・大正・昭和の三代に跨る、現代期の特色は、日本の勃興である。東洋史上に於いて、これまで活躍したる主要勢力は、第一、支那の勢力、第二、北方の勢力、第三、西洋の勢力、即ち西力である。この期に於いて、我が國は、先づ日清戦争によつて、第一の勢力に優勝し、次で日露戦争によつて、第二の勢力を打破り、更に滿洲事變によつて、第三の勢力に打克つて、信ずるところを斷行した。こゝに於いて、日本の勢力、即ち東力の優勢時代が來た。然るにこの現代期に、第一の勢力として立つた蔣介石政權は、第二の勢力として現はれたソ聯、及び第三の勢力として根を張つてゐる英、米などの援助により、東力優勢時代の出現を妨害せんとし、遂に支那事變を起した。第一は、反日の力であり、第二は、破壊の力であり、第三は、侵略の力であり、これらは東洋の不安を來すのみであるが、東力は、親

東力優勢時代

善の力であり、建設の力であり、共榮の力であり、その優勢は、東洋の平和を確保するものである。東力優勢時代こそ、興亞の眞の姿である。

□ 東洋史上より觀たる我が國の使命と國民の覺悟

顧れば、支那にて發達した儒教や、印度にて發生した佛教は、我が國に渡來して、我れ等の祖先により、始めて眞に活かされて、我が固有の日本精神を培つた。たゞ儒教や佛教のみでなく、その他の大陸文化でも、そのよきものは、これを取入れ、我が文化の程度を高めるに役立てた。かくの如く、我が國が、大陸に負ふところは多いけれど、大陸に報いるところは、今日まで、餘り多かつたといへぬ。今やこれに報ずべき、我が大陸發展時代が來たのである。

東洋史の大勢を概觀するに、最初、支那を中心として、①興起した漢族は、

(一) 東洋史上より觀たる我が國の使命

周圍に對して、斷然、<sup>⑩</sup>その優勢を示したが、一たび<sup>⑪</sup>北狄が、これに代つてから、<sup>⑫</sup>西力を導く基を開き、その優勢を來したが、これに對して、現代では、<sup>⑬</sup>東力、即ち日本の力が、優勢となり、今や興亞の機運が漲るに至つた。

(卷頭、年代區分表)

こゝに於いて、我が國は、國際正義に基づき、平和増進のため、共存共榮のため、日滿支三國の親善提携を基調とする、東亞新秩序の建設を完成し、同時に、南洋を含めた、大東亞共榮圈の確立を目ざしてゐる。かくて我が國は、道義國家として、これらのアジア諸國、諸民族に對し、指導を與ふべき使命を感ずるのである。日本固有の文化の上に、東洋文化の粹を取入れ、更に西洋文化の長をも攝取した我が日本は、「光は東方より」といふが如く、八紘一宇の肇國の理想に基づき、新しき世界文化を創造し、これを廣めるべき、大なる使命をも荷つてゐる。

(二) 國民の覺悟

我れ等は、この光榮ある日本の女子として、大國民たる覺悟を持ち、身を

修め、家を齊へ、あつばれな日本婦人となつて、女子たる天職を完うし、東洋平和のため、世界の文化、人類の幸福のため、我が日本精神を發揮し、萬國無比なる我が國體の精華を發揚することによつて、我が國の使命を果すべき、立派な歴史を生み出す、聖じき内助者とならねばならぬ。

みたみわれ

いけるしるしあり

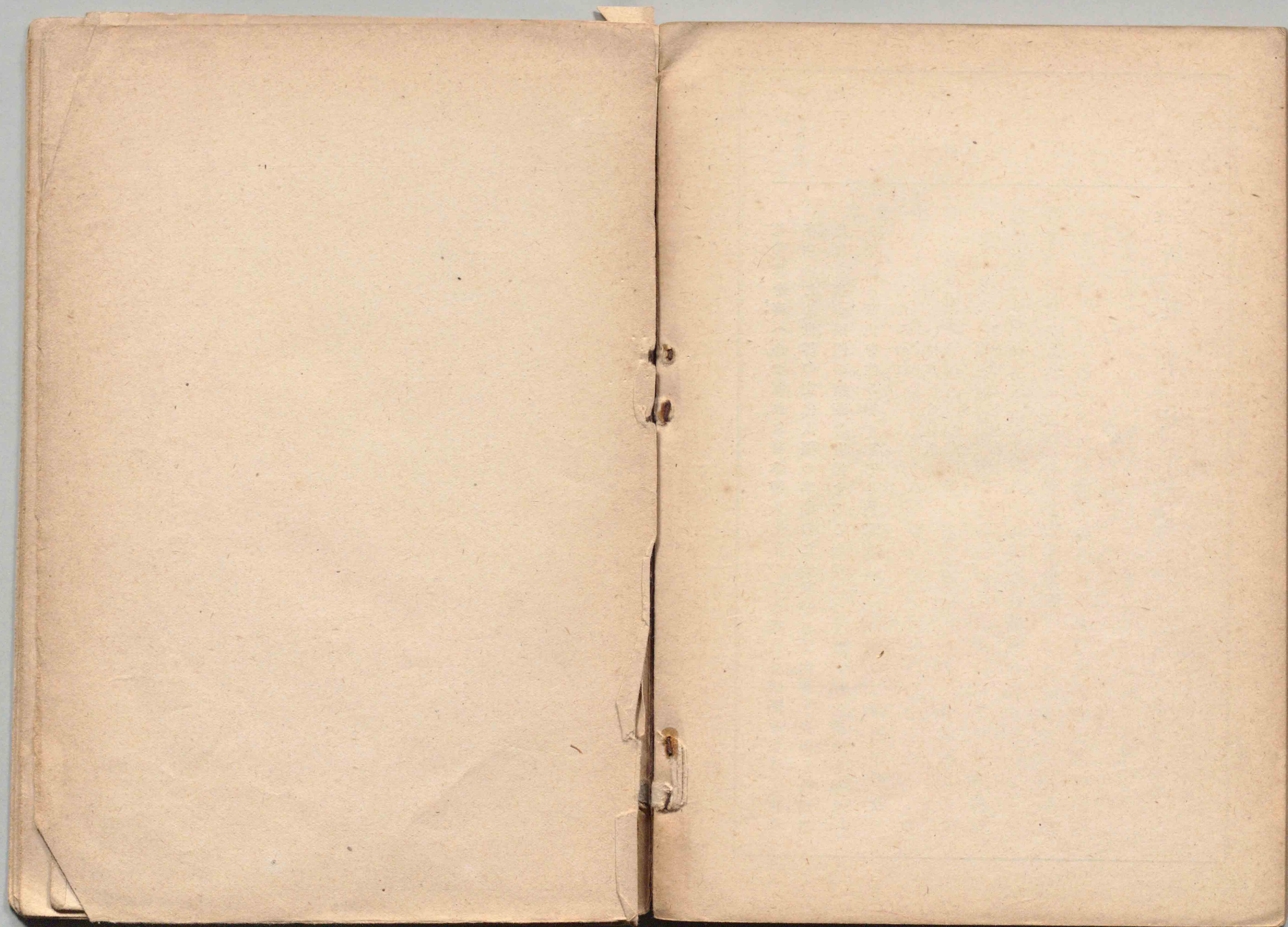
あめつちの

さかゆるときに

あへらくおもへば

(萬葉集卷第六雜歌)

改正新東洋史(高等女學校用) 終





(附圖四) 清代アジヤ形勢圖要解

- 一、本圖は、清初と清末とに於けるアジヤの形勢を併せ示す。
  - 二、本圖に於いて特に注意すべきは、
    - (1) 支那にては、元代に次ぐ清初乾隆時代(1736-1795)の最大版圖が、北はロシアにより、南はイギリス及びフランスによつて、如何に侵略されて行つたか。
    - (2) 印度にては、清初モガル帝國が尙存してゐたが、クライヴ時代(1756-1771)から、イギリスの印度經略が着々成功し、清末には、如何に英領が廣まつたか。
    - (3) 清初のベルシヤの領域が、漸次北からロシアに蠶食され、清末には、如何に英・露の間に勢力範圍を定めるに至れるか。
    - (4) その他、歐・米人が何時頃より如何にアジヤの各地を領有せるか。
- 要するに本圖が、清初と清末とを併せ示せるは、清一代(1644-1912)の間に、如何に西力東漸の勢が、アジヤの地方に押寄せたるかを知らしめんとためである。



(附圖四) 清代アジア形勢圖



(附圖四) 清代アジア形勢圖要解

一、本圖は、清初と清末とに於けるアジアの形勢を併せ示す。  
 二、本圖に於いて特に注意すべきは、  
 (1) 支那にては、元代に次ぐ清初乾隆時代(1736-1796)の最大版圖が、北はロシアにより、南はイギリス及びフランスによつて、如何に侵略されて行つたか。  
 (2) 印度にては、清初モガル帝國が尙存してゐたが、クライヴ時代(1756-1771)から、イギリスの印度經略が着々成功し、清末には、如何に英領が廣まつたか。  
 (3) 清初のベルシヤの領域が、漸次北からロシアに蠶食され、清末には、如何に英・露の間に勢力範圍を定めるに至れるか。  
 (4) その他、歐・米人が何時頃より如何にアジアの各地を領有せるか。  
 要するに本圖が、清初と清末とを併せ示せるは、清一代(1644-1912)の間に、如何に西力東漸の勢が、アジアの地方に押寄せたるかを知らしめんとためである。

1:44 000 000  
 500 0 500 1000 km



(附圖一) 漢代アジヤ形勢圖要解

一、本圖は、漢の領土の最も廣大であつた前漢の武帝時代と、それより約二百年を経て、後漢の盛衰の分界をなす和帝時代とに於けるアジヤの形勢を併せ示す。

二、本圖により、(イ)前・後兩漢に於ける對外勢力の比較、(ロ)南・北兩民族の對抗と、匈奴の西移、(ハ)東西の交通と、佛教の東傳、(ニ)朝鮮半島を仲介とする日・漢の接觸等に就いて考へてほしい。

(附圖二) 漢代アジア形勢圖

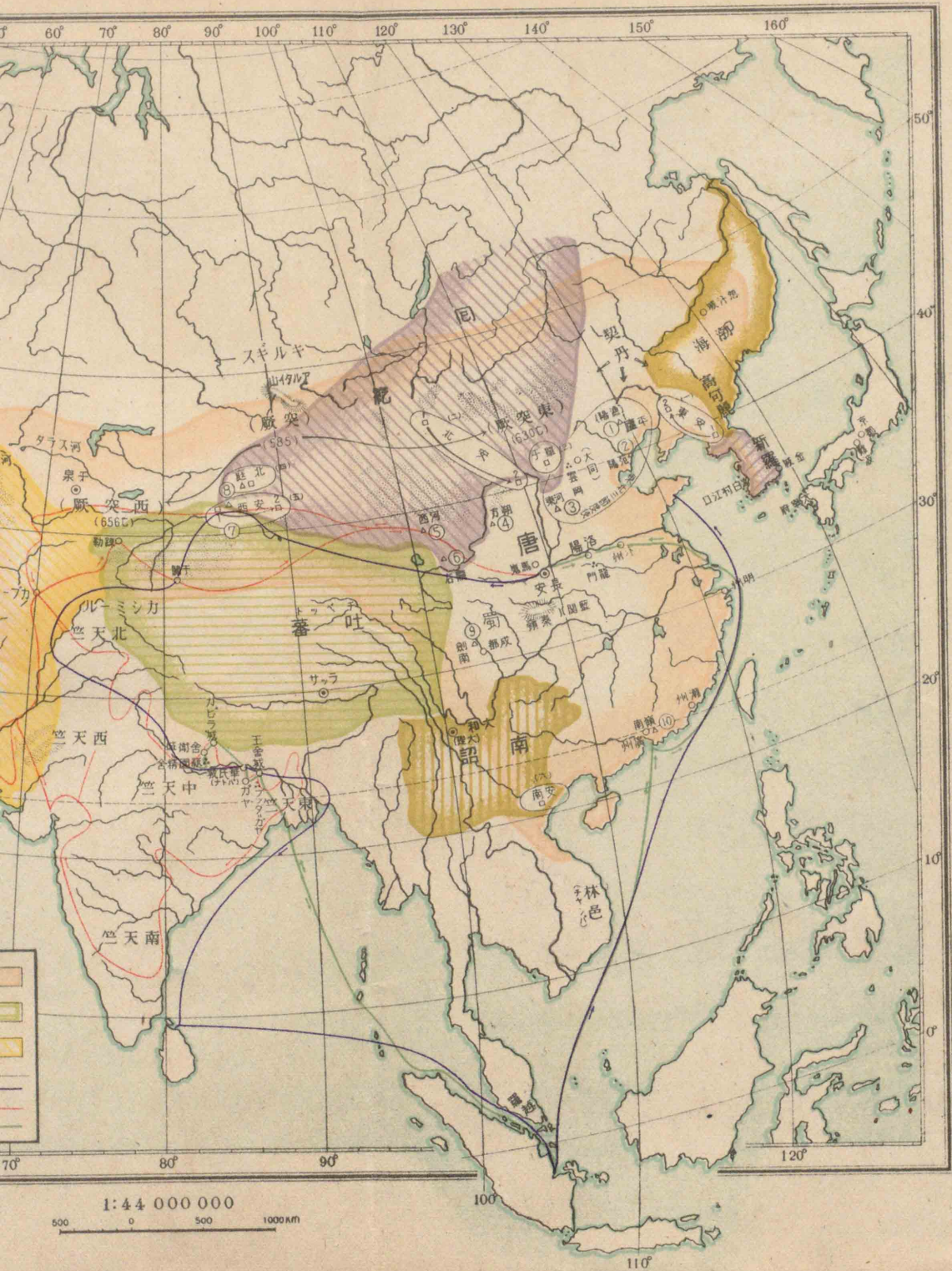


(附圖二) 漢代アジア形勢圖要解

一、本圖は、漢の領土の最も廣大であつた前漢の武帝時代と、それより約二百年を経て、後漢の盛衰の分界をなす和帝時代とに於けるアジアの形勢を併せ示す。

二、本圖により、(イ)前・後兩漢に於ける對外勢力の比較、(ロ)南・北兩民族の對抗と、匈奴の西移、(ハ)東西の交通と、佛教の東傳、(ニ)朝鮮半島を仲介とする日・漢の接觸等について考へてほしい。

1:44 000 000  
 500 0 500 1000KM



附圖二 唐代アジヤ形勢圖要解

一、本圖は、主として、唐の勢力が、最も絶頂に達した高宗時代に於ける、唐の最大版圖を示す。この時代は、唐の勢力の絶頂に達した時であるばかりでなく、また漢族勢力の頂点でもあった。

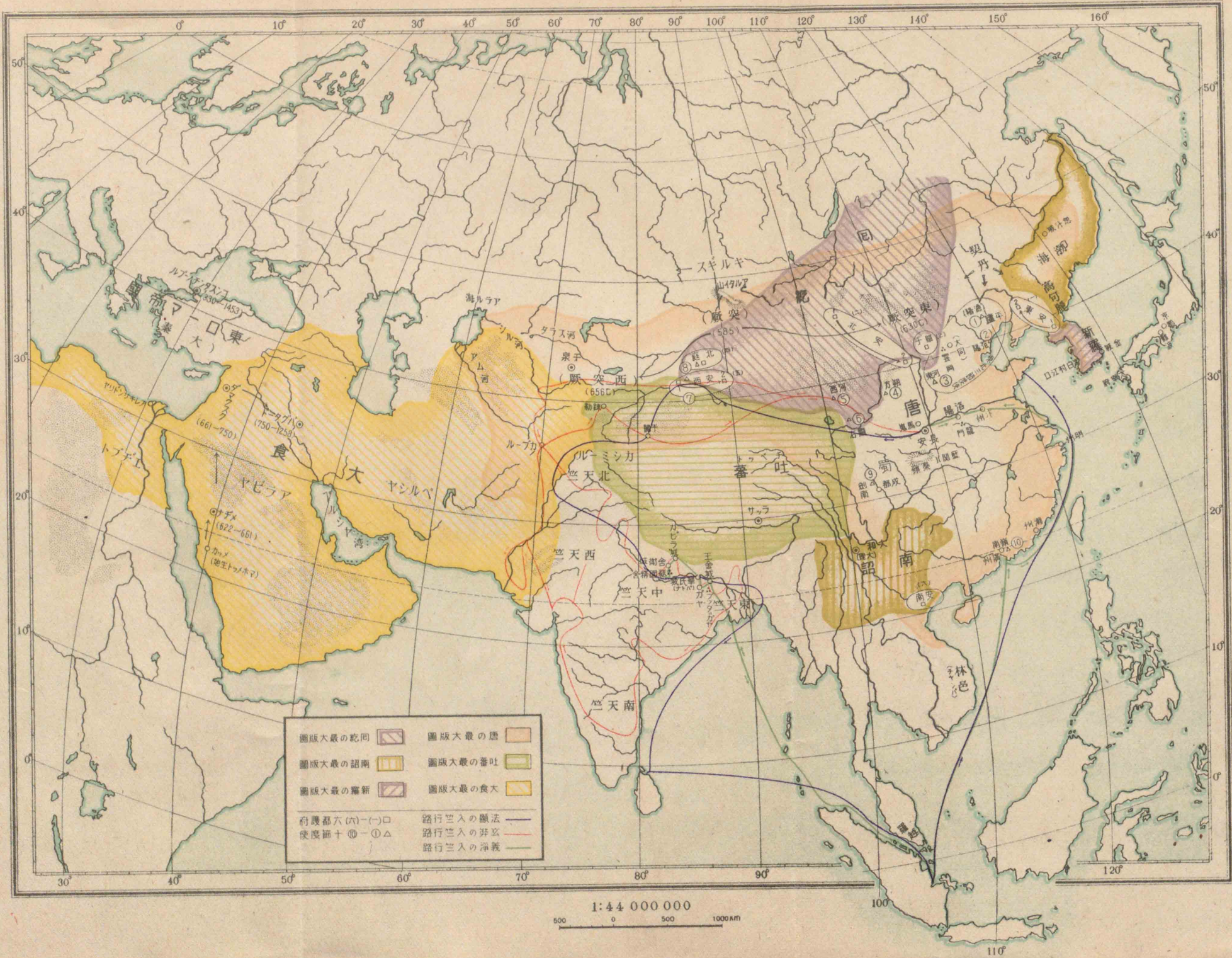
二、本圖は、唐の最大版圖を示すと共に、この領域をば、西方よりおびやかすに至る吐蕃及び大食、北方より侵入する回紇、南方より起る南詔並びに東方に興起する新羅など、これ等の最大版圖をも併せ示した。

三、その他、本圖に於いて注意すべき一二の點を挙げると、

(1)太宗・高宗時代の六都護府と、玄宗時代の十節度使が、如何なる地方に設けられたるかを考へること。

(2)太宗時代の玄奘、並びに高宗時代の義浄と、東晉時代の法顯との入竺行路を比較して見ること。

(附圖二) 唐代アジア形勢圖



(附圖二) 唐代アジア形勢圖要解

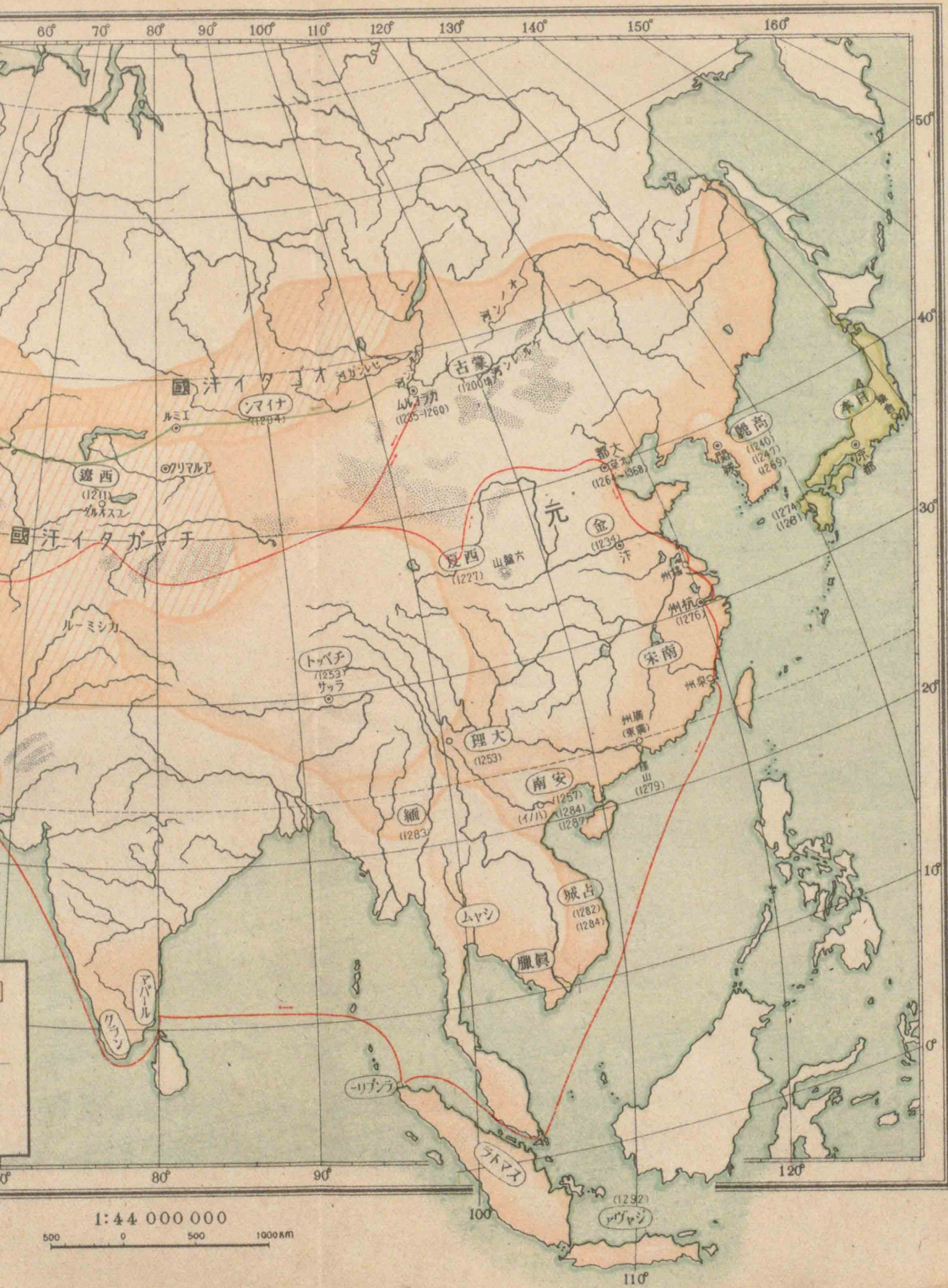
一、本圖は、主として、唐の勢力が、最も絶頂に達した高宗時代に於ける、唐の最大版圖を示す。この時代は、唐の勢力の絶頂に達した時であるばかりでなく、また漢族勢力の頂点でもあった。

二、本圖は、唐の最大版圖を示すと共に、この領域をば、西方よりおびやかすに至る吐蕃及び大食、北方より侵入する回紇、南方より起る南詔、並びに東方に興起する新羅など、これ等の最大版圖をも併せ示した。

三、その他、本圖に於いて注意すべき一二の點を挙げて、

(1)太宗・高宗時代の六都護府と、玄宗時代の十節度使が、如何なる地方に設けられたるかを考へること。

(2)太宗時代の玄奘、並びに高宗時代の義浄と、東晉時代の法顯との入竺行路を比較して見ること。



(附圖三) 元代アジア形勢圖要解

一、本圖は、元の最盛時たる世祖の晩年のアジアの形勢を示すのが主である。宋の時、初は遼が、次で金が北より迫り、漢族を南方に壓したが、元代になると、支那は、遂に北方民族たる蒙古の領土の一部となつた。かくて支那を治めるものは、漢族であるといふ従来の歴史を一變するに至つた。その領域の、如何に廣大であつたかを見よ。この強盛なる元が、一指をも我が國に加へる事ができなかつたのは何故であるか、再思する必要がある。

二、パツの西征及びマルコポーロの行路を併せて示す。思ふに前者の反動は、結局陸上よりする西力東漸となり、後者の影響は、海上よりする西力東漸の一因となつて、近世に於ける西力東漸の歴史をよび起すのである。さうした點にまで考を運らしてほしい。

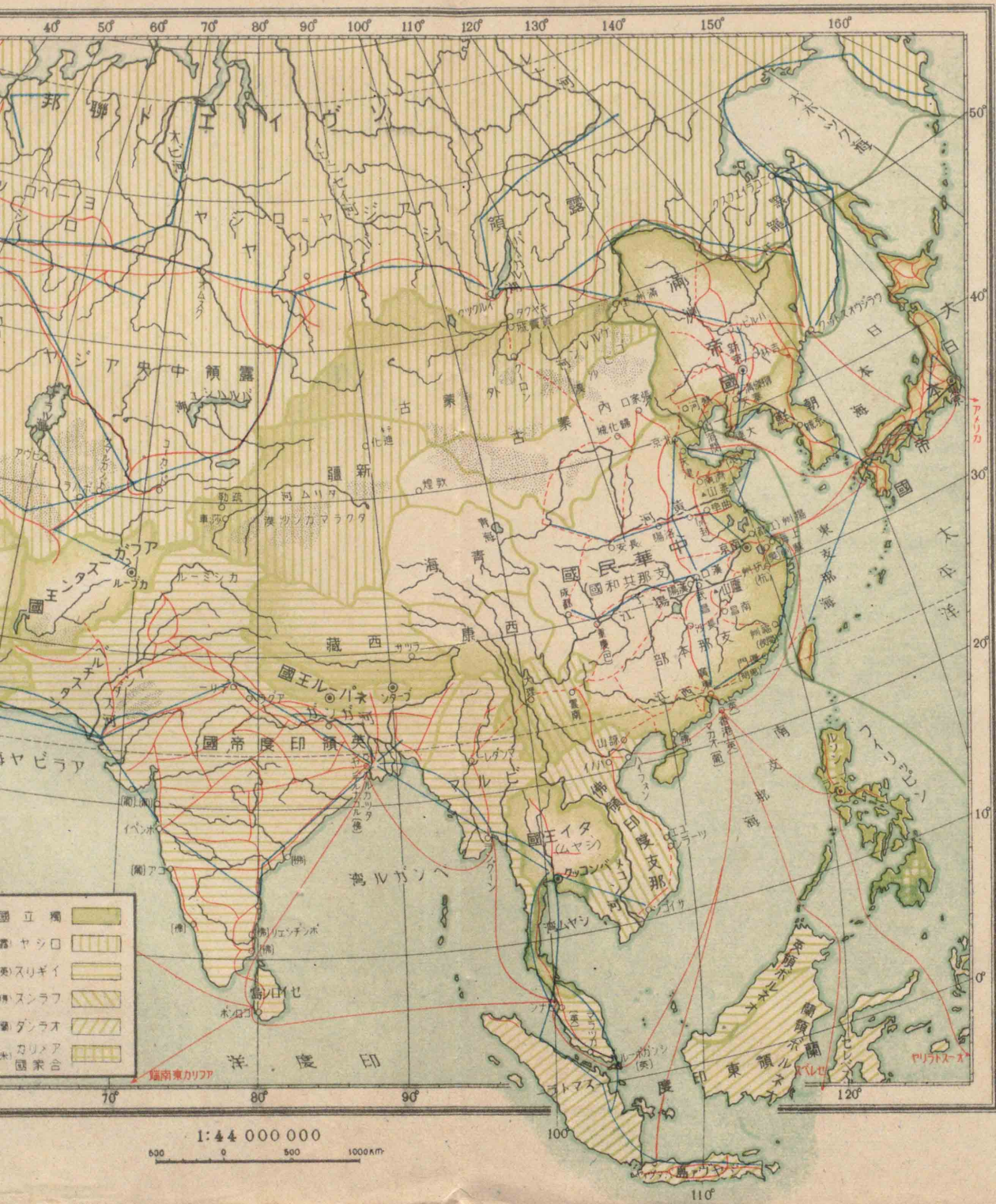
(附圖三) 元代アジア形勢圖



(附圖三) 元代アジア形勢圖要解

一、本圖は、元の最盛時たる世祖の晩年のアジアの形勢を示すのが主である。宋の時、初は遼が、次で金が北より迫り、漢族を南方に壓したが、元代になると、支那は、遂に北方民族たる蒙古の領土の一部となつた。かくて支那を治めるものは、漢族であるといふ従来の歴史を一變するに至つた。その領域の、如何に廣大であつたかを見よ。この強盛なる元が、一指をも我が國に加へる事ができなかったのは何故であるか、再思する必要がある。

二、バツの西征及びマルコポーロの行路を併せて示す。思ふに前者の反動は、結局陸上よりする西力東漸となり、後者の影響は、海上よりする西力東漸の一因となつて、近世に於ける西力東漸の歴史をよび起すのである。さうした點にまで考を運らしてほしい。



(附圖五) 現代アジヤ形勢圖要解

一、政治上、アジヤは、西力東漸の結果、如何なる状態にあるかを示す。即ち獨立國に對し、如何に西洋諸國の屬領又は勢力範圍の多きかを注意すべきである。

二、文化上、アジヤが、如何なる程度に開けてあるかを交通路によつて示す。即ち開けてある地方ほど交通網が密であり、開けてゐない地方ほど粗である。これをアジヤの諸國に於いて比較し、更にこれをヨーロッパの諸國と比較せば如何、而して二と一との間に、何らかの關係が見出されるであらうか。

三、滿洲國の獨立によつて、一層強化せる我が國を見よ、日本船による航路の如何に發達せるかを見よ、しかしながら、航空路は如何、過去の歴史の總決算であり、未來に對して無限の發展を藏せる現在の状態を見て、我れ等若き日本人は、如何なる覺悟を持つべきか、地圖を活かして讀んでほしい。



(附圖五) 現代アジア形勢圖



(附圖五) 現代アジア形勢圖要解

一、政治上、アジアは、西力東漸の結果、如何なる状態にあるかを示す。即ち獨立國に對し、如何に西洋諸國の屬領又は勢力範圍の多きかを注意すべきである。

二、文化上、アジアが、如何なる程度に開けてあるかを交通路によつて示す。即ち開けてある地方ほど交通網が密であり、開けてゐない地方ほど粗である。これをアジアの諸國に於いて比較し、更にこれをヨーロッパの諸國と比較せば如何。而して二と一との間に、何らかの關係が見出されるであらうか。

三、滿洲國の獨立によつて、一層強化せる我が國を見よ。日本船による航路の如何に發達せるかを見よ。しかしながら、航空路は如何。過去の歴史の總決算であり、未來に對して無限の發展を藏せる現在の状態を見て、我れ等若き日本人は、如何なる覺悟を持つべきか。地圖を活かして讀んでほしい。

昭昭昭昭昭昭  
 和和和和和和  
 十十十十十十  
 六六四四三三二二  
 年年年年年年  
 八八十一一七七  
 月月月月月月  
 十十二二五二  
 五十五十五  
 日日日日日日

修訂訂訂發印  
 正正正正正  
 四四三三再  
 版版版版版  
 發印發印發印  
 行刷行刷行刷



發行所

著者

杉本直治郎

發行者

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社

印刷者

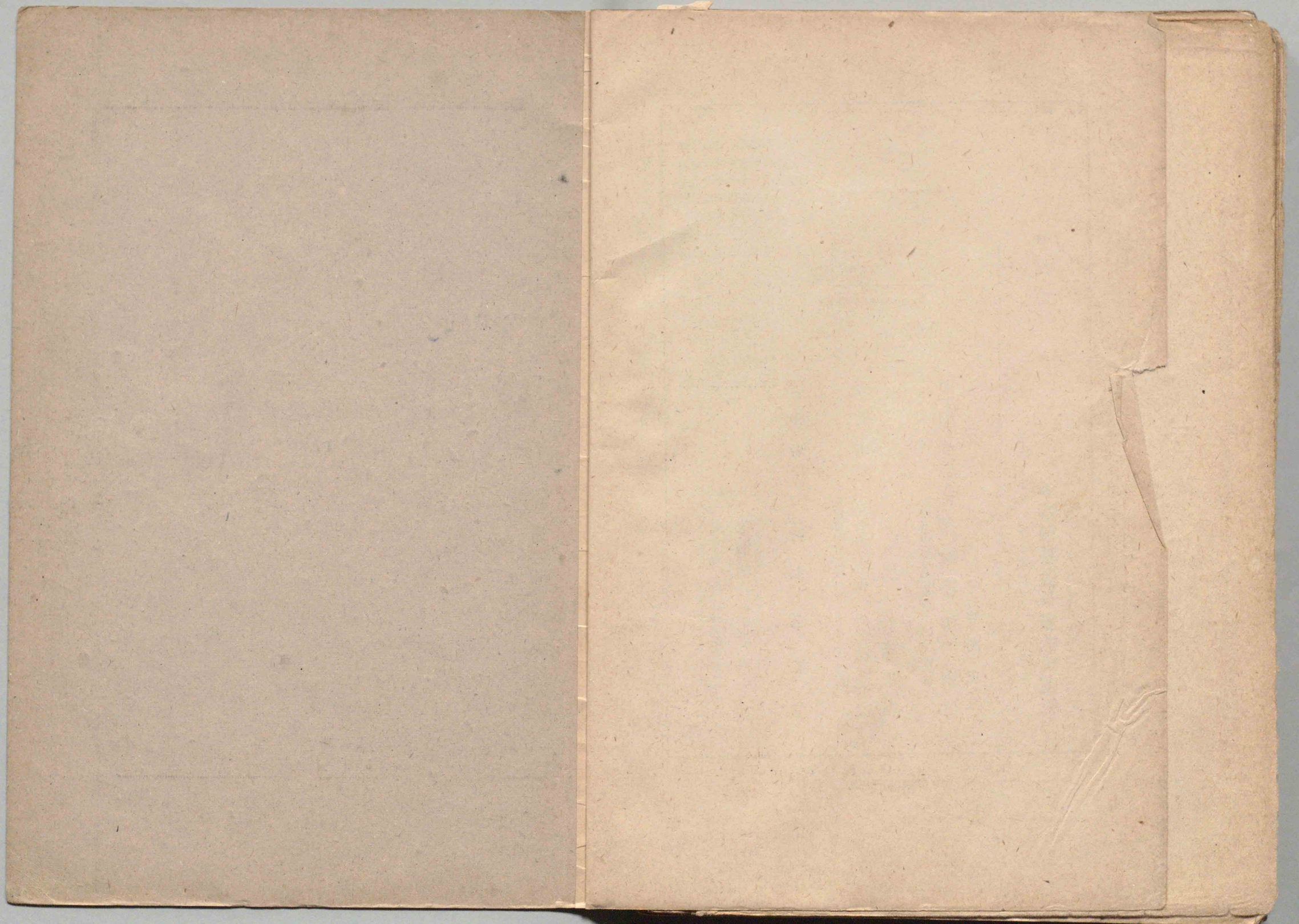
大阪市浪速區西園手町千三十二番地  
 代表者 山本慶治  
 岡書籍印刷所  
 代表者 岩岡忠一

正改  
 新東洋史(高等女學校用)  
 定價金八拾五錢

(略名) 精華 杉本東史女

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社  
 日本出版文化協會會員番號一七五二二

配給元 日本出版配給株式會社  
 東京市神田區淡路町二ノ九



広島大学図書

0130449367

